

中垣内遺跡

—大東市公共下水道工事に伴う発掘調査報告書—

2008 年 3 月

大東市教育委員会

大東市埋蔵文化財調査報告第29集

中垣内遺跡

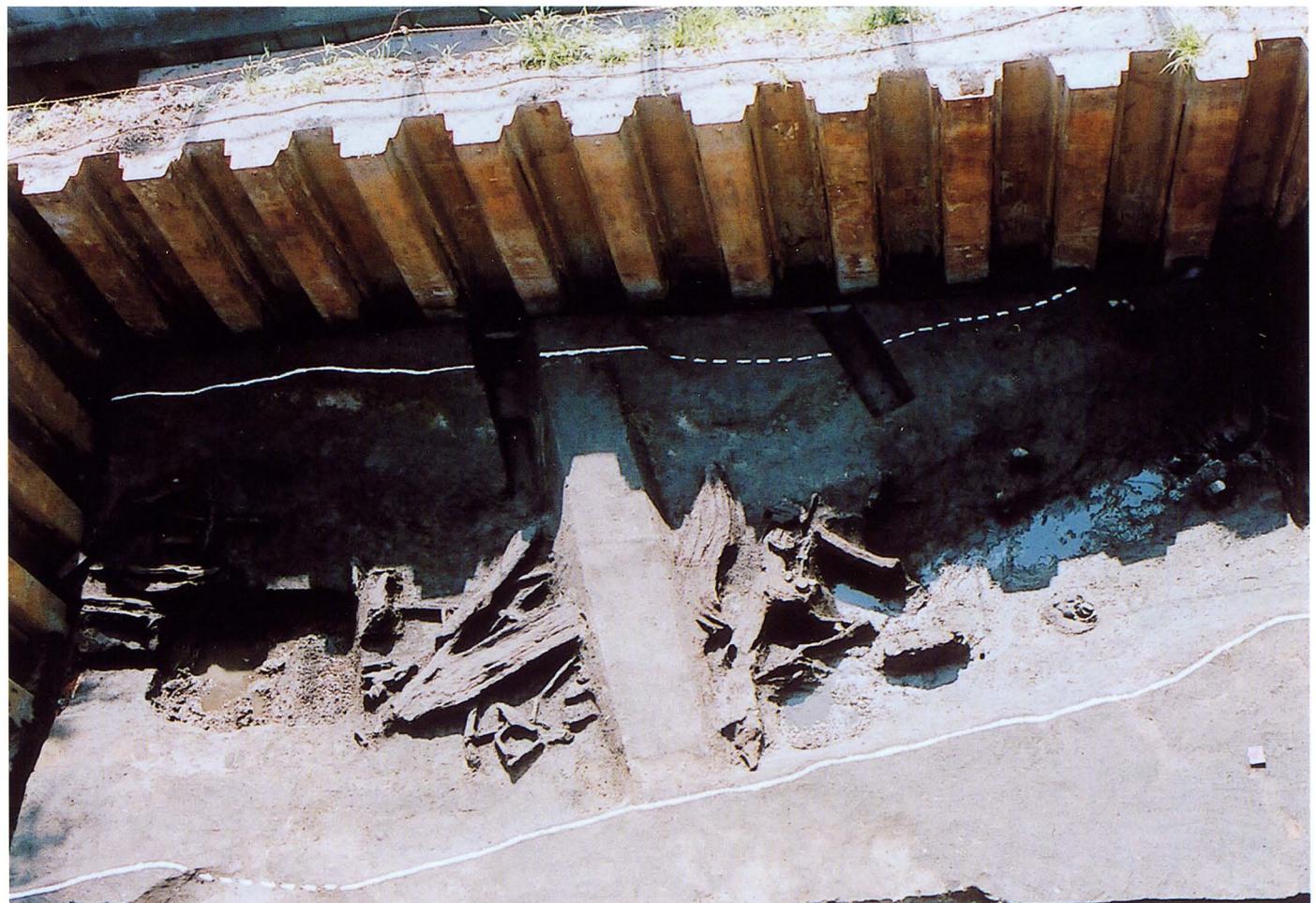
—大東市公共下水道工事に伴う発掘調査報告書—

2008年3月

大東市教育委員会



1. SD-701 (南西より)



2. SD-701遺物出土状況 (1) [自然木等]



1. SD-701遺物出土状況（2）[中期弥生土器]



2. SD-701遺物出土状況（3）[木製品・鍬]

序 文

大阪府の北東部に位置する大東市は、東部に飯盛山を含む生駒山系が南北に連なり、西部では古くは河内湾、河内湖、また江戸時代の中頃までは深野池という大きな池があり、山と海、湖、池などに彩られた多様な地形環境のなかで古来より豊かな自然を有してきました。

そのような環境のなかでわたしたちの先人達は個性豊かな歴史、文化を育み、その足跡として多くの神社仏閣、遺跡、様々な美術工芸品など、いわゆる文化財が数多く残され今日に至っています。

この度、報告することになりました中垣内遺跡は昭和34年以来、十数次にわたる調査が実施されてきて、遺跡の様相についてはかなり多くのことが明らかにされてきました。

今回の発掘調査につきましても弥生時代を中心とした集落跡の様相を明らかにすることができ、中垣内遺跡の歴史的価値をあらためて確認するとともに、大東市の歴史・文化を語るうえで、たいへん貴重な成果を得ることができたと思われます。

今後、これらの成果を市民共有の財産として活用していくと共に、本報告書が本市の歴史や文化を知る基礎資料として活用され、歴史や文化財に対する理解を深めるための契機となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査および整理作業の費用負担をはじめ多大なご協力を賜りました大東市下水道部をはじめ、お世話になりました関係機関・各位に厚くお礼申し上げます。

また教育委員会では、今後とも先人より受け継いできました貴重な文化財を大切に保存・活用し、未来を担う次世代に託したく努力する所存でありますので、市民の皆様方におかれましては今後とも本市の文化財保護行政にご理解、ご協力賜りますよう心よりお願い申し上げます。

平成20年3月

大東市教育委員会

教育長 中 口 馨

例　　言

1. 本書は、大阪府大東市中垣内5丁目における中垣内遺跡発掘調査(NGT05-1)の報告書である。
2. 調査は大東市公共下水道工事に伴うもので、大東市下水道部下水道整備課（平成19年度より街づくり部下水道整備課）より依頼を受け、大東市教育委員会生涯学習部歴史民俗資料館が実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は大東市立歴史民俗資料館（現所属、生涯学習課）、中達健一が担当した。
4. 調査面積は60m²で、調査期間は平成17年7月4日～同年8月10日である。
5. 本調査に係る費用については大東市下水道部（平成19年度より街づくり部）がこれを負担した。
記して感謝の意を表する。
6. 現地調査における記録作業にあたっては株式会社島田組による下記の諸氏により実施した。
(敬称略、五十音順)
大塚照子、川田秀治、古川久雄、松下信一、安田貴憲、
7. 報告書作成にかかる整理作業については大東市教育委員会の指導のもと、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。また、木製品の保存処理、樹種同定についても財団法人元興寺文化財研究所に委託し、樹種同定の結果については（財）元興寺文化財研究所、木沢直子氏に報告書を作成していただいた。
8. 本調査における基準点、水準点の設置については株式会社島田組に委託した。
9. 本調査で使用した座標は世界測地系による国土座標第VI系であり、方位は座標北を使用している。
また、標高はT.P.（東京湾平均海面値）である。
10. 本書の執筆、編集は中達が行った。
11. 本調査に関わる遺物、実測図、写真、カラースライド等については大東市立歴史民俗資料館において保管している。広く利用されることを希望する。

本文目次

序文

例言

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	4
第3章 調査成果	7
第1節 基本層序	7
第2節 第1遺構面	7
第3節 第2遺構面	12
第4節 第3遺構面	13
第5節 第4遺構面	14
第6節 第5遺構面	15
第7節 第6遺構面	17
第8節 第7遺構面	23
第9節 第8遺構面	37
第5章 まとめ	40
附載 中垣内遺跡出土木製品および自然木の樹種同定 (木沢直子)	41

挿図目次

第1図 調査地位置図	2
第2図 範囲確認調査出土遺物	3
第3図 大東市位置図	4
第4図 周辺遺跡分布図	6
第5図 包含層等出土遺物(1)	8
第6図 調査区東壁断面図	9~10
第7図 調査区北壁断面図	9~10
第8図 包含層等出土遺物(2)	11
第9図 第2遺構面全体図	12
第10図 SD-301断面図	13
第11図 SX-301断面図	13
第12図 第3遺構面全体図	13
第13図 第4遺構面全体図	14
第14図 第5遺構面全体図	15
第15図 SK-501断面図	16
第16図 SK-502断面図	16

第 17 図	S K-503 断面図	16
第 18 図	S X-501 断面図	16
第 19 図	第 6 遺構面全体図	17
第 20 図	S D-601 断面図 (1)	18
第 21 図	S D-601 断面図 (2)	18
第 22 図	S K-601・602 断面図	18
第 23 図	S K-603 断面図	18
第 24 図	S K-604 断面図	18
第 25 図	S K-605 断面図	18
第 26 図	S K-606 断面図	18
第 27 図	S P-601 断面図	18
第 28 図	S X-601 断面図	18
第 29 図	S D-601、S K-606 遺物出土状況図	19
第 30 図	S K-605 遺物出土状況図	19
第 31 図	S D-601、S K-602・603・604 出土遺物	20
第 32 図	S K-605 出土遺物	21
第 33 図	S K-606、S X-601 出土遺物	22
第 34 図	S D-701、S D-801 他断面図	23
第 35 図	第 7 遺構面全体図	23
第 36 図	S D-701 遺物・自然木等出土状況図	24
第 37 図	S D-701 出土遺物 (1)	25
第 38 図	S D-701 出土遺物 (2)	26
第 39 図	S D-701 出土遺物 (3)	27
第 40 図	S D-701 出土遺物 (4)	28
第 41 図	S D-701 出土遺物 (5)	29
第 42 図	S D-701 出土遺物 (6)	30
第 43 図	S D-701 出土遺物 (7)	31
第 44 図	S D-701 出土遺物 (8)	32
第 45 図	S D-701 出土遺物 (9)	33
第 46 図	S D-701 出土遺物 (10)	34
第 47 図	S D-701 出土遺物 (11)	35
第 48 図	S D-701 出土遺物 (12)	36
第 49 図	第 8 遺構面全体図	37
第 50 図	S D-802 断面図	38
第 51 図	S D-803 断面図	38
第 52 図	S K-801 断面図	38
第 53 図	S K-802 断面図	38

第 54 図 S P-801 断面図	38
第 55 図 S D-801、S K-801 出土遺物	39

表 目 次

第 1 表 出土遺物一覧表	61
---------------	----

写 真 図 版 目 次

卷頭カラー図版 (1)

- 1. S D-701 (南西より)
- 2. S D-701 遺物出土状況 (1) [自然木等]

卷頭カラー図版 (2)

- 1. S D-701 遺物出土状況 (2) [中期弥生土器]
- 2. S D-701 遺物出土状況 (3) [木製品・鍬]

図版 1 遺構 (1)

- 1. 第 1 遺構面全景 (南より)
- 2. 第 2 遺構面全景 (南より)

図版 2 遺構 (2)

- 1. 基本層序第Ⅲ層遺物出土状況 (1)
- 2. 基本層序第Ⅲ層遺物出土状況 (2)

図版 3 遺構 (3)

- 1. 第 3 遺構面全景 (南より)
- 2. 第 4 遺構面全景 (南より)

図版 4 遺構 (4)

- 1. 第 5 遺構面全景 (南より)
- 2. 第 6 遺構面全景 (南より)

図版 5 遺構 (5)

- 1. S D-601・S K-603 遺物出土状況 (東より)
- 2. S K-605 遺物出土状況 (東より)

図版 6 遺構 (6)

- 1. S D-701 (南より)
- 2. S D-701 断面 (南より)

図版 7 遺構 (7)

- 1. S D-701 遺物出土状況 (1)
- 2. S D-701 遺物出土状況 (2)

図版 8 遺構 (8)

- 1. S D-701 遺物出土状況 (3)
- 2. S D-701 遺物出土状況 (4)

図版 9 遺構 (9)

- 1. S D-701 遺物出土状況 (5)
- 2. S D-701 遺物出土状況 (6)

図版 10 遺構 (10)

- 1. 第 8 遺構面全景 (南より)
- 2. S D-801 断面 (南より)

図版 11 出土遺物 (1)

図版 12 出土遺物 (2)

図版 13 出土遺物 (3)

図版 14 出土遺物 (4)

図版 15 出土遺物 (5)

図版 16 出土遺物 (6)

図版 17 出土遺物 (7)

図版 18 出土遺物 (8)

図版 19 出土遺物 (9)

図版 20 出土遺物 (10)

図版 21 出土遺物 (11)

図版 22 出土遺物 (12)

第1章 調査に至る経緯

中垣内遺跡は昭和34年に関西電力株式会社東大阪変電所建設の際に発見された遺跡である。それに伴う緊急調査が一部実施されており、限られた条件下の調査であったにもかかわらず竪穴住居跡などを検出し、また弥生土器など大量の遺物が出土したことから、当時においては弥生時代の大規模な集落遺跡として多大な評価を得た遺跡であった。

その後、長年にわたり発掘調査の機会には恵まれなかつたが、昭和62年の大阪産業大学の校舎建設に伴う調査を皮切りに、昭和62～63年にかけては変電所敷地内における4ヶ所の調査など、現在に至るまで昭和34年の調査を含めば、合計14次にわたる調査が実施されている。その結果、遺跡としては集落を中心とした縄文時代から近世に至る複合遺跡との性格が与えられているが、その具体的様相からみて大東市域およびその周辺地域の歴史を復元するにあたっては、やはり弥生時代を代表する遺跡として認識されている状況である。

今回の調査は大東市下水道部〔平成19年度より街づくり部（以下、省略）〕により公共下水道工事〔東部排水区（第21工区）〕の事業計画がなされたことによる。

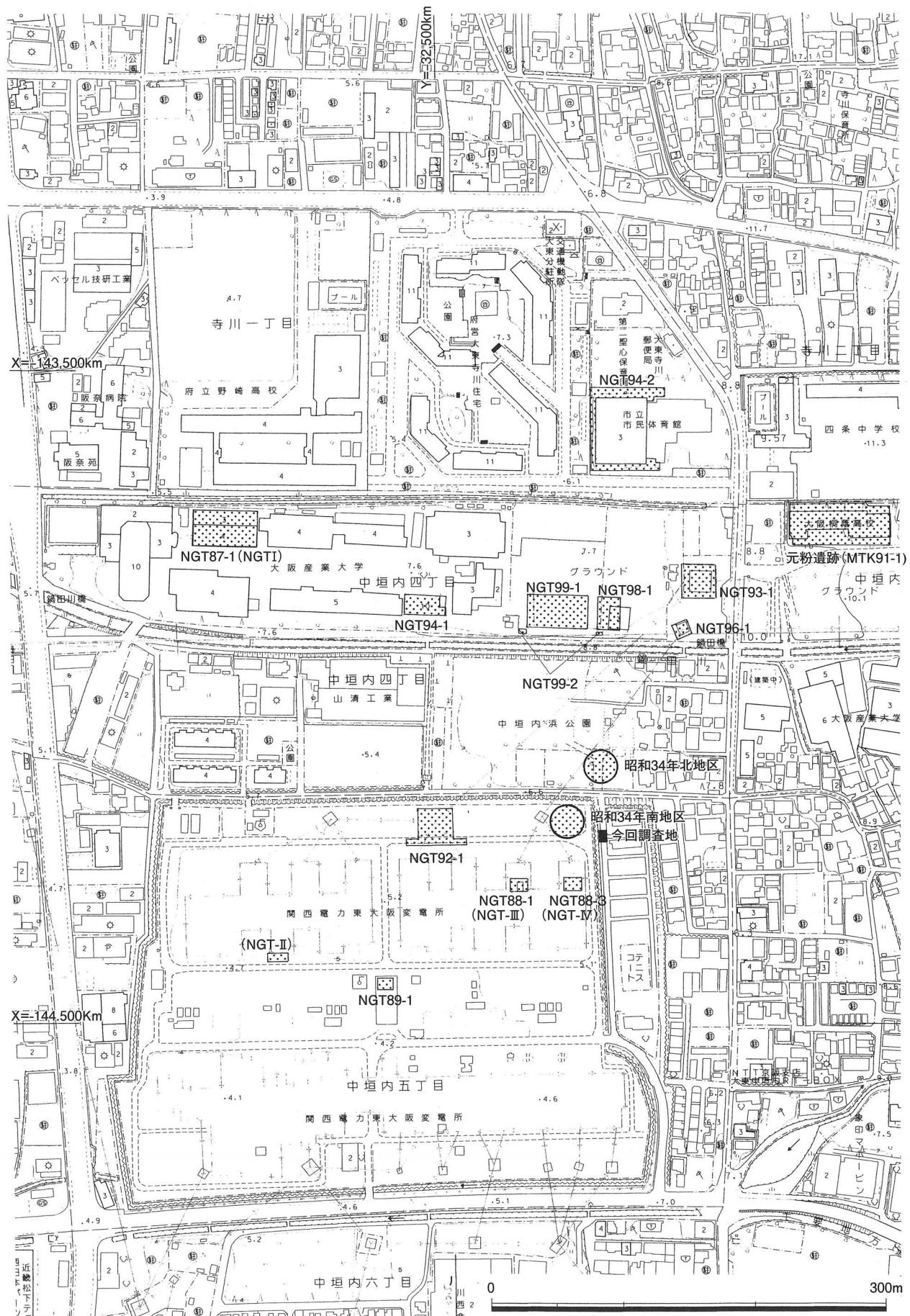
計画地は、先述した中垣内遺跡の範囲内であったため、大東市下水道部下水道整備課より文化財担当課である大東市立歴史民俗資料館〔平成18年度より大東市教育委員会生涯学習部生涯学習課（以下、省略）〕に当該事業における埋蔵文化財の取り扱いについての事前協議の申し入れがあった。

歴史民俗資料館では、文化財保護法第94条に基づく通知の提出を求めるとともに、工事内容によつて遺跡の損壊が想定される場合には工事の設計変更等による現状保存または発掘調査が必要である旨を伝えた。

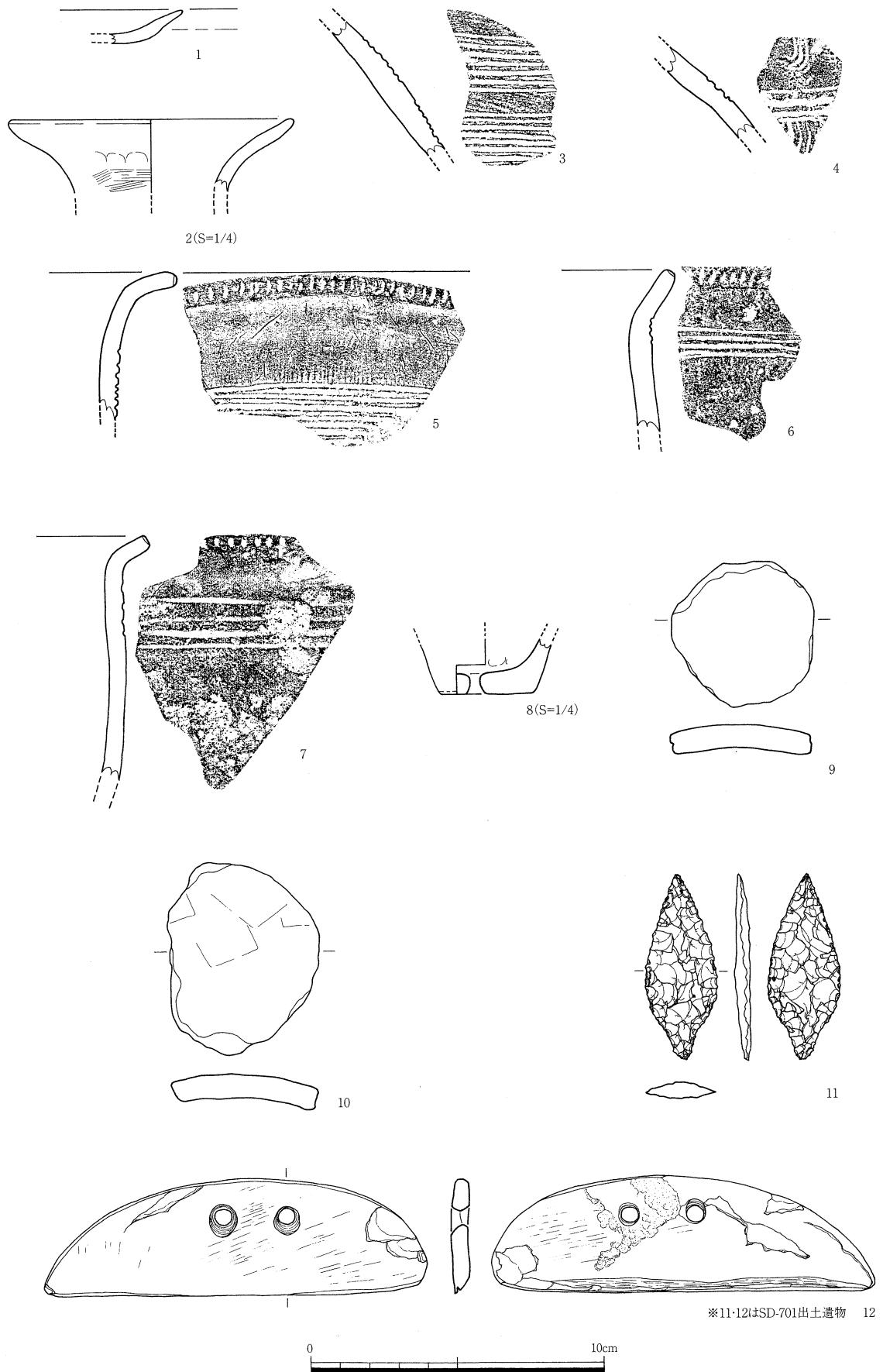
以上の協議を経て、歴史民俗資料館が平成17年5月10、13日に範囲確認調査を実施したところ、事業計画のうち「No.3立坑」から遺物を多量に含んだ包含層を確認するなど遺跡の広がりが確認された。

その結果、遺跡の保存に関して協議を行つたが、事業の特殊性により計画変更は困難であるとのことから発掘調査を実施することで合意した。

その後、更なる協議の結果、発掘調査については大東市下水道部下水道整備課の依頼を受け、大東市立歴史民俗資料館が実施することとなり、「No.3立坑」部分60m²を対象に、平成17年7月4日から着手し、同年8月10日に終了した。以下、整理作業については平成18年度に実施し、平成19年度における報告書の刊行により、今回事業に伴う発掘調査すべての作業を終了したものである。



第1図 調査地位置図



第2図 範囲確認調査出土置物

第2章 遺跡の位置と環境

中垣内遺跡は大阪府大東市中垣内一帯にかけて所在し、南北約850m、東西約1kmの範囲を持つ遺跡である。これまで十数次にわたって調査が実施されており、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかにされている。特に弥生時代の集落遺跡として有名である。

地理的には、鍋田川によって形成された扇状地からその西方に広がる沖積地にかけて立地している。

以下、大東市域の遺跡を中心に歴史的推移を概観する。

〈旧石器時代〉

中垣内遺跡からナイフ形石器が出土している。しかし、昭和34年の東大阪変電所建設時における出土のため、その詳細は明らかでないが、この時代の遺物としては現在のところ市内唯一のものである。

〈縄文時代〉

集落を示すような具体的な遺構は検出されていないため、様相については明らかではない。唯一、中垣内遺跡で中期後半の土坑状の遺構と推測されるものが確認されているのみである。遺物では、北条遺跡、宮谷古墳群で草創期の有舌尖頭器などが出土・採集している他、自然河川、自然流路、包含層等からの出土ではあるが主に宮谷川、鍋田川周辺の遺跡から中～晚期を中心とした土器の出土が確認されている。

そして、磨耗を受けず比較的残りの良好な土器の出土も多いことから丘陵、扇状地などに集落跡の存在した可能性は十分高いものと考えられる。

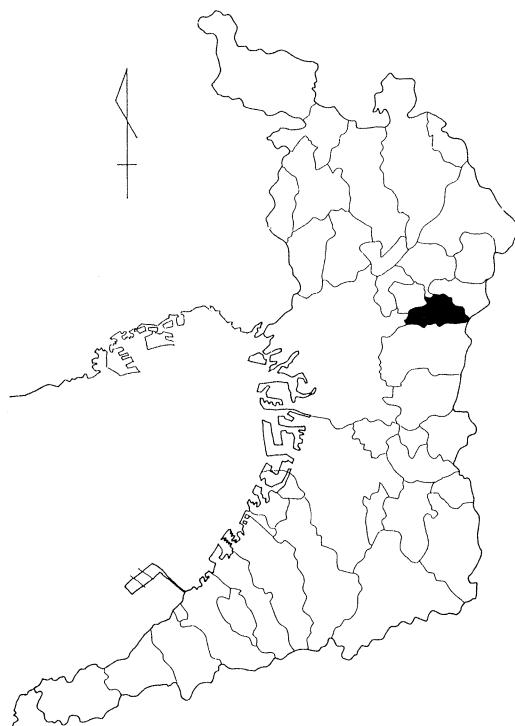
〈弥生時代〉

この時代から市域においても遺構を伴う遺跡が多数確認されるようになる。前～中期の集落跡が確認された中垣内遺跡、北条西遺跡、後期の竪穴住居を検出した北条遺跡などがある。また、中垣内遺跡の東に位置する鍋田川遺跡では後期のまとまった遺物が出土しており、当時の集落の動向を考えるうえでも重要な遺跡であることが明らかになりつつある。

〈古墳時代〉

当時、河内湖東岸に位置していた市域においても多数の集落が営まれるようになり、前期では鍋田川遺跡、中～後期にかけては北新町遺跡、メノコ遺跡などがある。特に特徴的な様相としては初期須恵器、韓式系土器、鳥足文を施した陶質土器の出土など渡来系的な影響の強い遺物が目立ち、先に述べた河内湖東岸という地理的状況からも領けるものである。

古墳に関しても多くの古墳、古墳群が周知されているが、残念ながら詳細の解らないものが多い。その中において城ヶ谷遺跡、北条遺跡、宮谷古墳群、堂山古墳群で古墳の調査が行われている。特に



第3図 大東市位置図

堂山古墳群では三角板皮綴短甲、衝角付冑、鉄刀、鉄鎌など多量の鉄製武器、武具類が出土していることから当時の有力な首長墓と考えられており、当時の社会を考えるうえで貴重な成果をあげている。

〈古代〉

奈良時代では北新町遺跡、寺川遺跡、元粉遺跡で集落が確認、推測されている。特に北新町遺跡では人面墨書土器が出土し、また寺川遺跡では「白麻呂」と墨書された土器が出土するなど、官衙的集落の存在が推定されている。

平安時代では寺川遺跡で集落跡が確認されている。特に、直径1m程の木を刳り貫いた井筒などは注目され、また河川跡からはウマの骨が一体復元出来るほどの出土があり、通常の集落とはかなり違う様相を示している。

〈中世〉

北新町遺跡で12～13世紀を中心とした集落跡、御領遺跡で13～14世紀の集落跡が確認されており、市域における中世の様相も明らかにされてきている。また、城跡に関しても、戦国武将、三好長慶の飯盛城、その支城とされる野崎城、キリシタンで有名な三箇サンチョの三箇城などが知られている。ただ、考古学的には飯盛城において発掘調査がわずかに実施されているのみで残念ながら詳細は明らかにされていない。

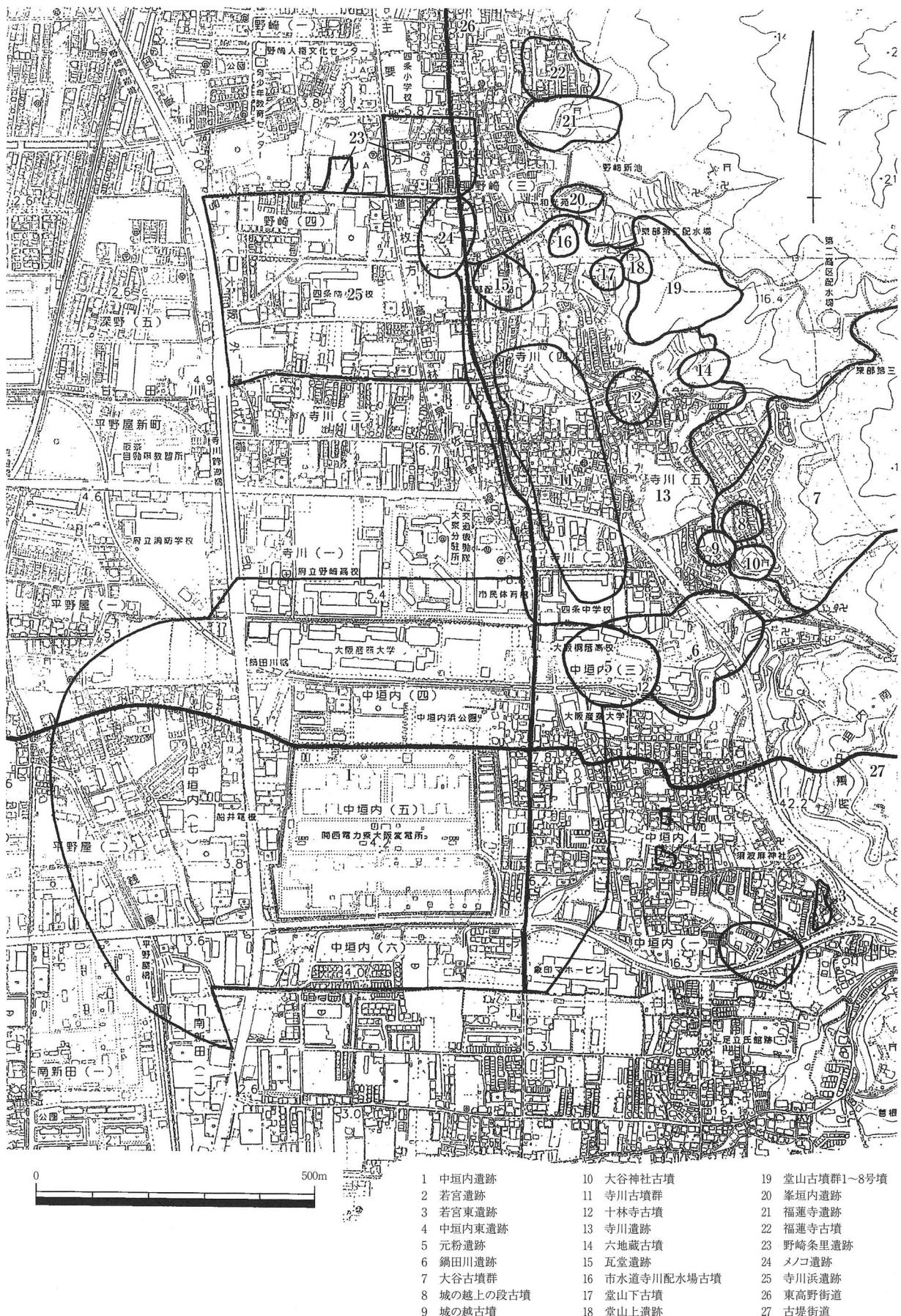
〈近世〉

大阪城の築城、また江戸幕府による再築の際、石垣用石材の供給地であった石切場跡や、宝永元年(1704)の大和川付け替えに伴い新田開発が盛んになるが、その管理施設であった平野屋新田会所などがある。

また西諸福遺跡では深野池、新開池とは別の池と推定されている遺構が検出されており、備前擂鉢、壺、美濃窯系天目茶碗、胎土目唐津窯系皿、堺擂鉢、石臼などの陶磁器類がまとまって出土している。

(引用・参考文献)

- 大阪府史編集専門委員会 1991年 『大阪府史』別巻 大阪府
大東市教育委員会 1973年 『大東市史』
大東市教育委員会 1987年 『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第1集
大東市教育委員会 1989年 『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』大東市埋蔵文化財調査報告第3集
大東市教育委員会 1990年 『城ヶ谷遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第6集
大東市教育委員会 1997年 『中垣内遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第11集
大東市教育委員会 1997年 『寺川遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第13集
大東市教育委員会 1998年 『メノコ遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第14集
大東市教育委員会 1999年 『御領遺跡』大東市埋蔵文化財調査報告第15集
大東市教育委員会 2000年 『西諸福遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第17集
大東市教育委員会 2002年 『旧平野屋新田会所屋敷と建物』大東市文化財調査報告書
大東市教育委員会 2004年 『元粉遺跡I』大東市埋蔵文化財調査報告第19集
大東市教育委員会 2004年 『中垣内遺跡発掘調査報告書』大東市埋蔵文化財調査報告第20集
大東市北新町遺跡調査会 1986年 『北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』
大東市北新町遺跡調査会 1991年 『北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』
大東市北新町遺跡調査会 1997年 『北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書』
大阪府教育委員会 1993・1994年 『堂山古墳群』大阪府文化財調査報告書第四五輯
中達健一 1995年 「大東市・北条西遺跡(93・1次調査)」『まんだ』第五十六号
黒田淳 1988年 「大東市“宮谷古墳群の調査”」『まんだ』第三十五号



第4図 周辺遺跡分布図(S=1/10000)

第3章 調査成果

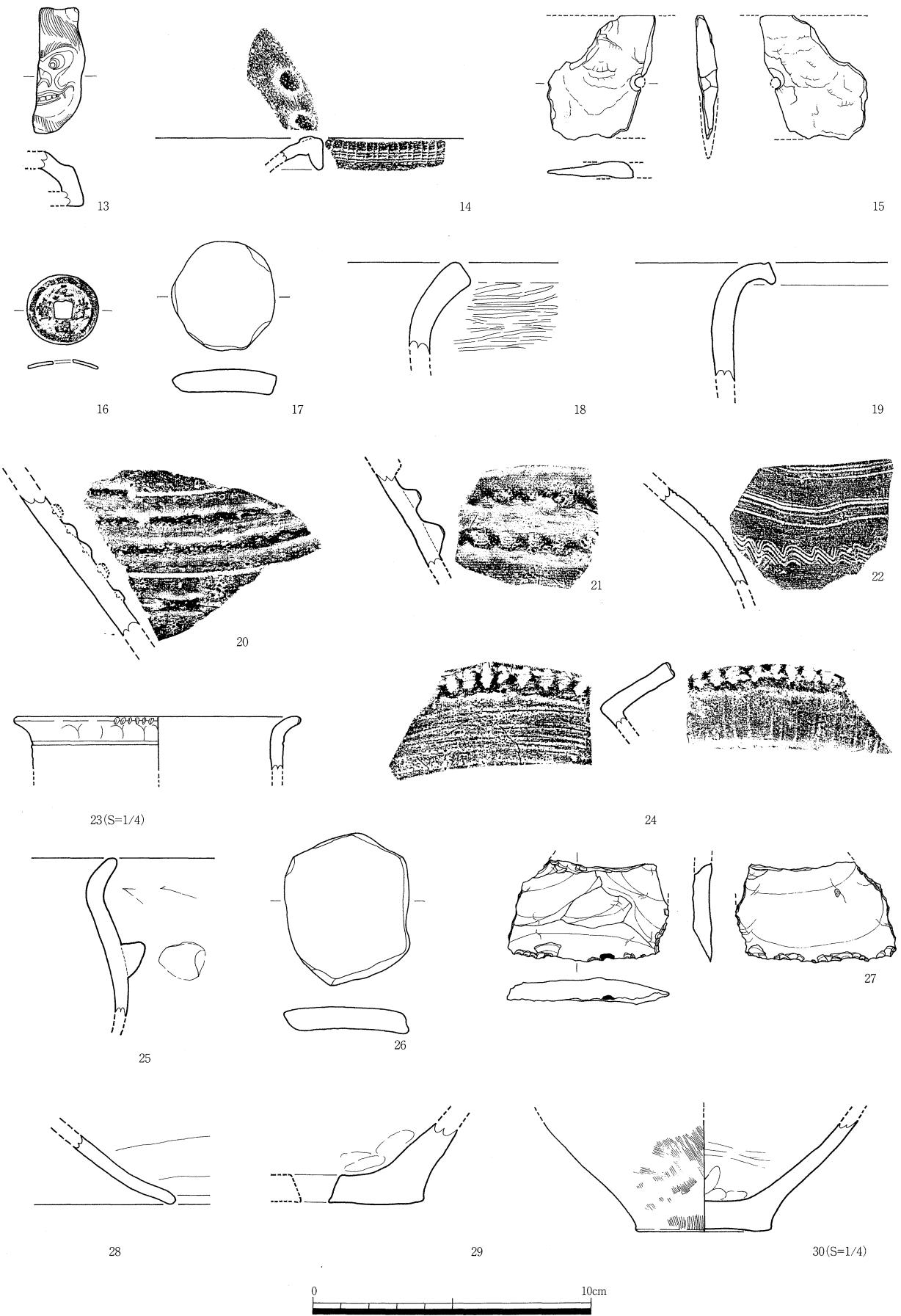
第1節 基本層序

今回の調査では8面の遺構面を層位的に確認した。基本的な層序については以下の通りである。

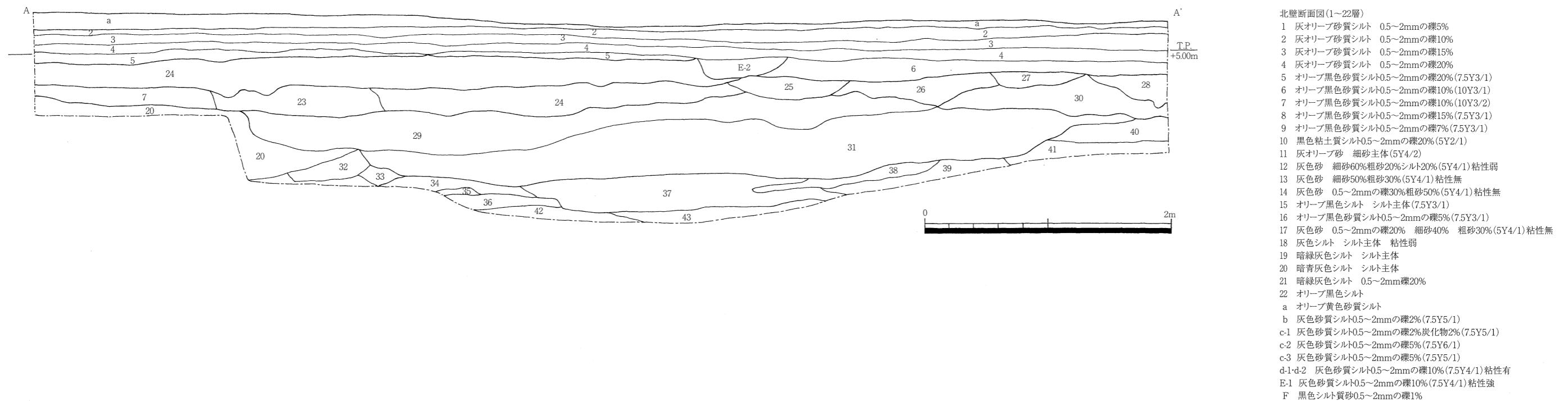
- 第I層 機械掘削の対象とした層で盛土、旧耕土、床土である。層厚は順にそれぞれ約1.5m、約0.1m、0.05mを測る。
- 第II層 灰オリーブ(5Y6/2)砂質シルト。層厚は約0.1～0.2mを測る。第1遺構面のベース層になる。
- 第III層 灰オリーブ(5Y5/2)砂質シルト。層厚は約0.1～0.2mを測る。第2遺構面のベース層になる。
- 第IV層 灰オリーブ(5Y5/3)砂質シルト。層厚は約0.1～0.2mを測る。第3遺構面のベース層になる。
- 第V層 灰オリーブ(5Y4/2)砂質シルト。層厚は約0.1～0.25mを測る。第4遺構面のベース層になる。
- 第VI層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂質シルト。層厚は約0.1～0.25mを測る。第5遺構面のベース層になる。
- 第VII層 オリーブ黒色(10Y3/1)砂質シルト。層厚は約0.2～0.3mを測る。第6遺構面のベース層になる。
- 第VIII層 オリーブ黒色(10Y3/2)砂質シルト。層厚は約0.2～0.25mを測る。第7遺構面のベース層になる。
- 第IX層 暗青灰色(5BG3/1)シルト。層厚は約0.2～0.5mを測る。第8遺構面のベース層になる。考古学で言う地山層である。
- 第X層 暗緑灰色(10GY4/1)シルト。層厚は約0.2mを測る。第8遺構面のベース層になる。考古学でいう地山層である。
- 第XI層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト。層厚は約0.2～0.3mを測る。第8遺構面のベース層になる。考古学でいう地山層である。
- 第XII層 灰色(5Y4/1)シルト。層厚は約0.2～0.3mを測る。第8遺構面のベース層になる。考古学で言う地山層である。
- 第XIII層 オリーブ黒色(5Y4/3)シルト。層厚は確認し得なかった。第8遺構面のベース層になる。考古学でいう地山層である。

第2節 第1遺構面

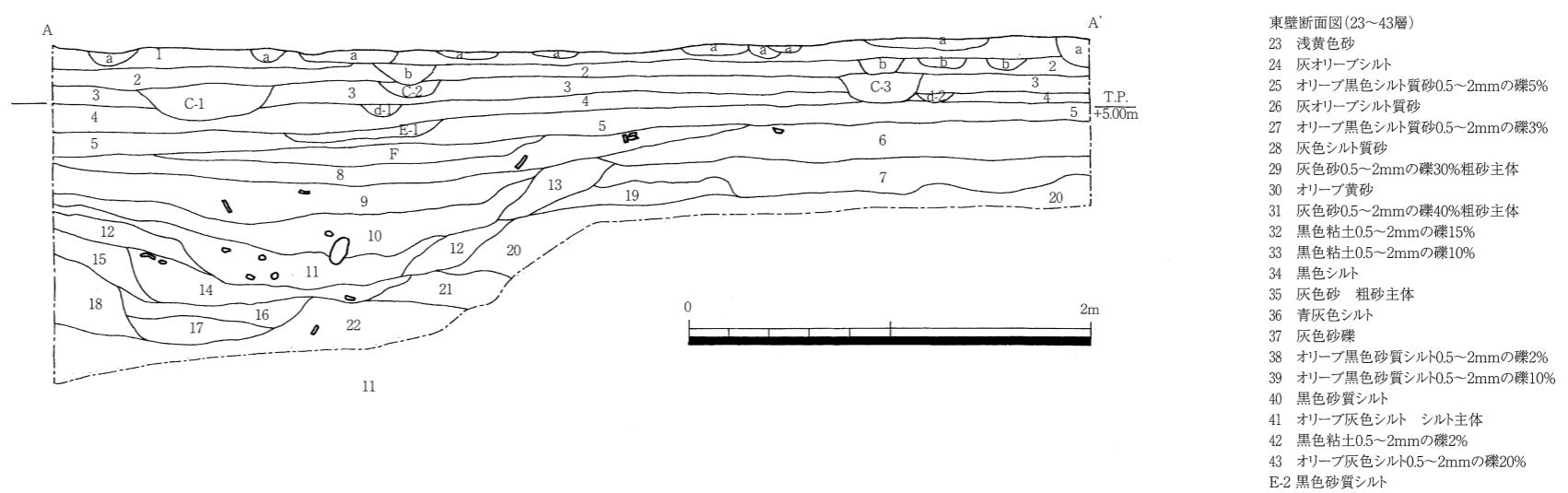
基本層序第II層をベース面として、調査区全面にかけてほぼ南北に走る溝群を検出した。耕作に伴う溝と思われ、いわゆる鋤溝であると考えられる。時期的に近～現代に比定できるものであったことから、検出状況を写真記録するにとどめた。ちなみに標高はT.P. + 5.3m前後を測る。



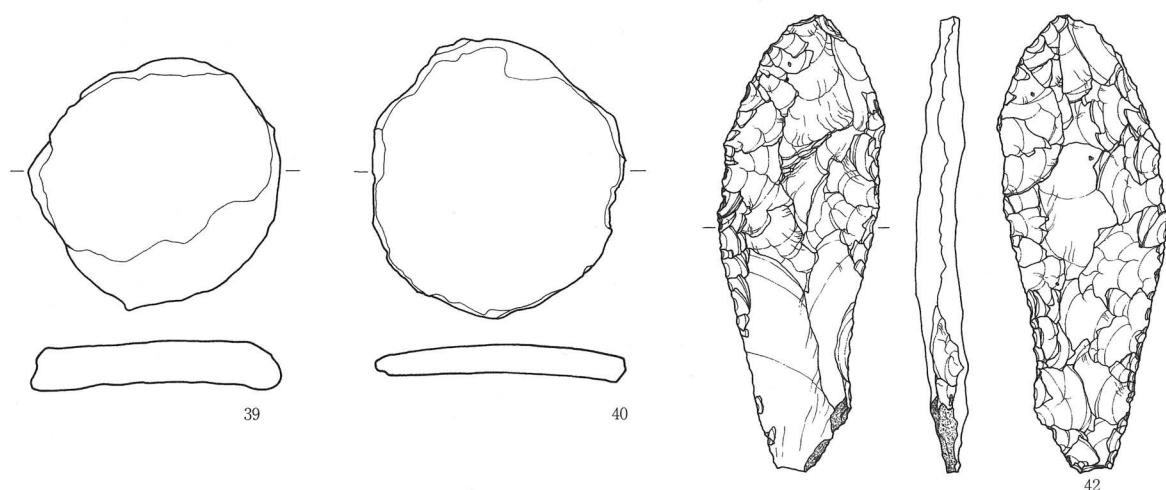
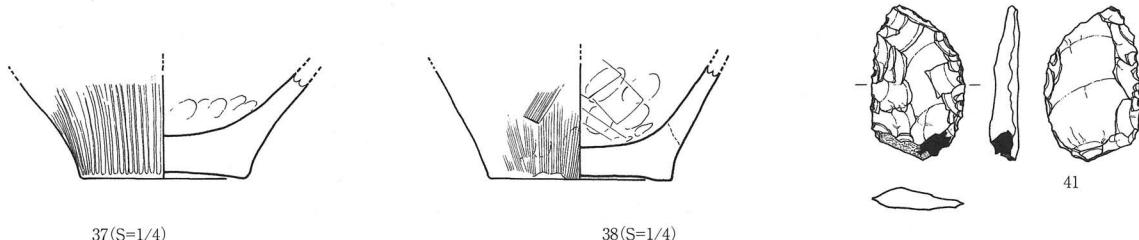
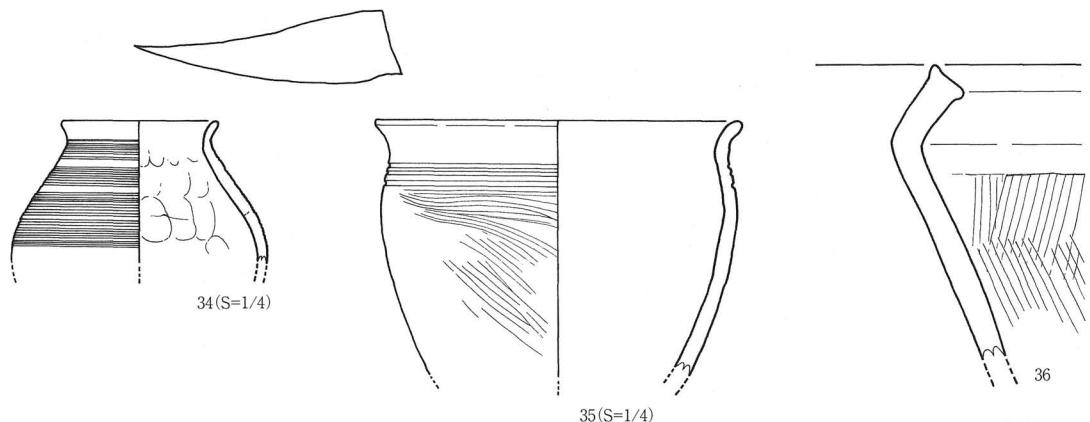
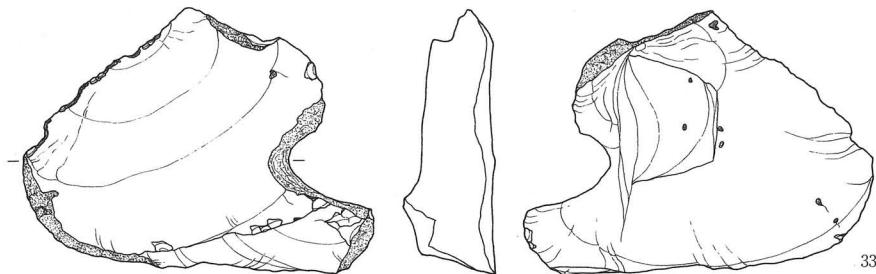
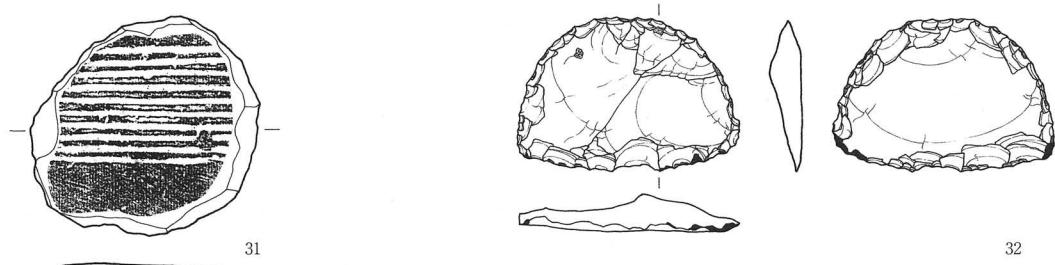
第5図 包含層等出土遺物(1)



第6図 調査区東壁断面図



第7図 調査区北壁断面図



0 10cm

第8図 包含層等出土遺物(2)

第3節 第2遺構面

基本層序第Ⅲ層をベース面として、溝を検出している。標高は T.P. + 5.2 m 前後を測る。

1. 溝

SD-201

調査区の西側で検出した。規模は幅約 0.2 m、深さ約 0.07 m を測る。埋土は 1 層で灰色砂質シルトである。遺物は土師器片、陶器片が出土している。

SD-202

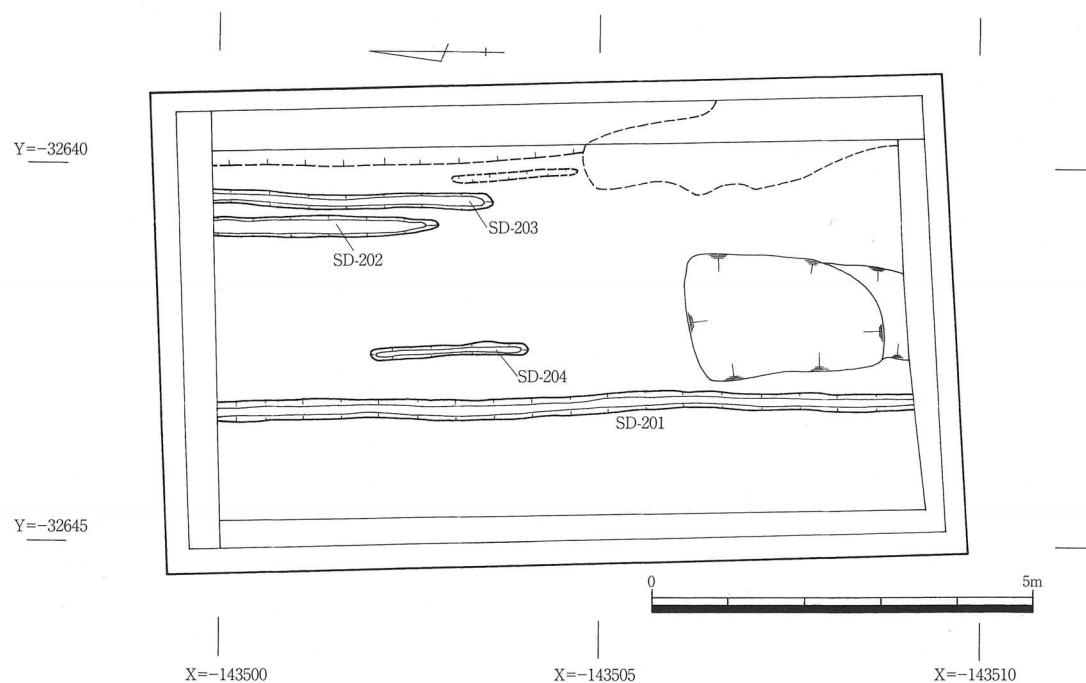
調査区の北東側で検出した。規模は幅約 0.3 m、深さ約 0.02 m を測る。埋土は 1 層で灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

SD-203

調査区の北東側で検出した。規模は幅約 0.2 m、深さ約 0.03 m を測る。埋土は 1 層で灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

SD-204

調査区の北側ほぼ中央で検出した。規模は幅約 0.15 m、深さ約 0.02 m を測る。埋土は 1 層で灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。



第9図 第2遺構面全体図

第4節 第3遺構面

基本層序第IV層をベース面として、溝、不明遺構を検出している。標高は T.P. + 5.1 m 前後を測る。

1. 溝

S D-301

調査区の西側隅で検出した。規模は幅約 0.7 m、深さ約 0.16 m を測る。埋土は 2 層で灰色砂質シルト、やや暗く、シルト質の強い灰色砂質シルトである。遺物は土師器片、須恵器片、瓦器片が出土している。

S D-302

調査区の西側で検出した。規模は幅約 0.15 m、深さ約 0.02 m を測る。埋土は 1 層で灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

S D-303

調査区の南側中央付近で検出した。規模は幅約 0.3 m、深さ約 0.04 m を測る。埋土は 1 層で灰色砂質シルトである。遺物は弥生土器片、土師器片が出土している。

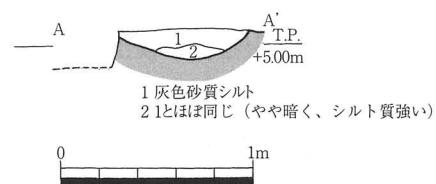
S D-304

調査区の南東部で検出した。S X-301 に切られる。規模は幅約 0.25 m、深さ約 0.04 m を測る。埋土は 1 層で灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

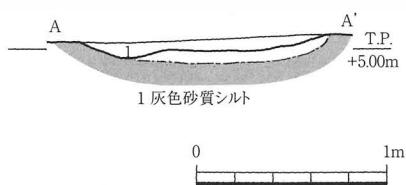
2. 不明遺構

S X-301

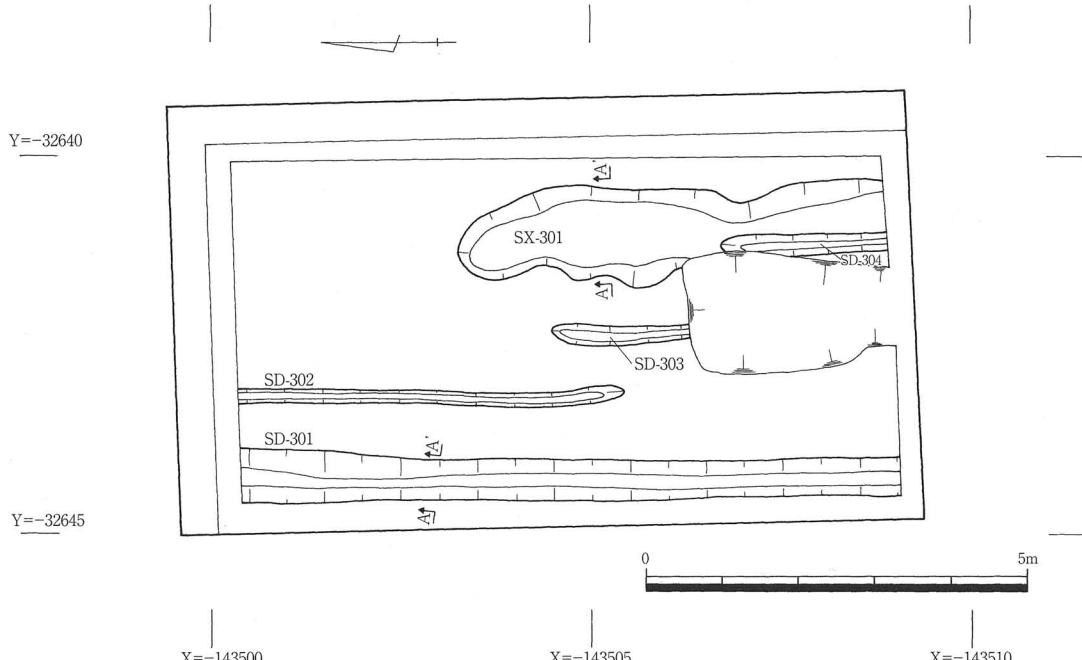
調査区の南東部で検出した溝状の不定形を呈するものである。規模は幅約 0.9 ~ 1.4 m、深さ約 0.1 m を測る。埋土は 1 層で灰色砂質シルトである。遺物は弥生土器片、土師器片が出土している。



第10図 SD-301断面図



第11図 SX-301断面図



第12図 第3遺構面全体図

第5節 第4遺構面

基本層序第V層をベース面として、溝、ピットを検出している。標高はT.P. + 5.0 m前後を測る。

1. 溝

S D-401

調査区の南西側で検出した。規模は幅約 0.35 m、深さ約 0.09 mを測る。埋土は1層で灰色砂質シルトである。遺物は土師器片が出土している。

S D-402

調査区の西側で検出した。規模は幅約 0.15 m、深さ約 0.03 mを測る。埋土は1層で灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

S D-403

調査区の北西側で検出した。規模は幅約 0.25 m、深さ約 0.02 mを測る。埋土は1層で灰色砂質シルトである。遺物は弥生土器片、土師器片が出土している。

S D-404

調査区の北西側で検出した。規模は幅約 0.2 m、深さ約 0.02 mを測る。埋土は1層で灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

S D-405

調査区の北東側で検出した。規模は幅約 0.15 m、深さ約 0.03 mを測る。埋土は1層で灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

2. ピット

S P-401

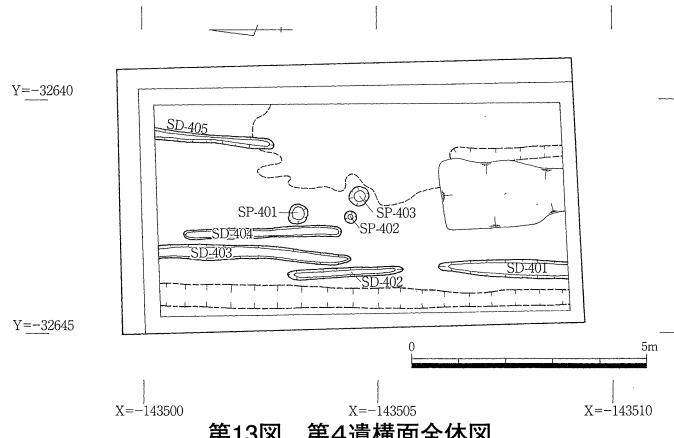
調査区の北西側で検出した。形態はほぼ円形を呈し、規模は径約 0.4 m、深さ約 0.13 mを測る。埋土は2層で掘方部が灰白色砂質シルト、柱痕部が灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

S P-402

調査区の中央で検出した。形態はほぼ円形を呈し、規模は径約 0.25 m、深さ約 0.12 mを測る。埋土は1層で灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

S P-403

調査区の中央で検出した。形態はほぼ円形を呈し、規模は径約 0.4 m、深さ約 0.13 mを測る。埋土は1層で灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。



第13図 第4遺構面全体図

第6節 第5遺構面

基本層序第VI層をベース面として、土坑、ピット、不明遺構を検出している。標高はT.P. + 4.9 m前後を測る。

1. 土坑

S K-501

調査区の南東側で検出した。形態・規模は調査区外に広がるため明らかでないが、深さは約0.17mを測る。埋土は2層でオリーブ黒色シルト質粘土、黒色シルト質砂である。遺物は弥生土器片、木片が出土している。

S K-502

調査区の南東側で検出した。形態・規模は調査区外に広がるため明らかでないが、深さは約0.05mを測る。埋土は2層でオリーブ黒色シルト質粘土、黒色シルト質砂である。遺物は弥生土器片が出土している。

S K-503

調査区の南東側で検出した。S P-504に切られる。形態はほぼ楕円形を呈するものと思われ、規模は長径約0.7m、短径約0.45m、深さ約0.07mを測る。埋土は2層でオリーブ黒色シルト質粘土、黒色シルト質砂である。遺物は出土していない。

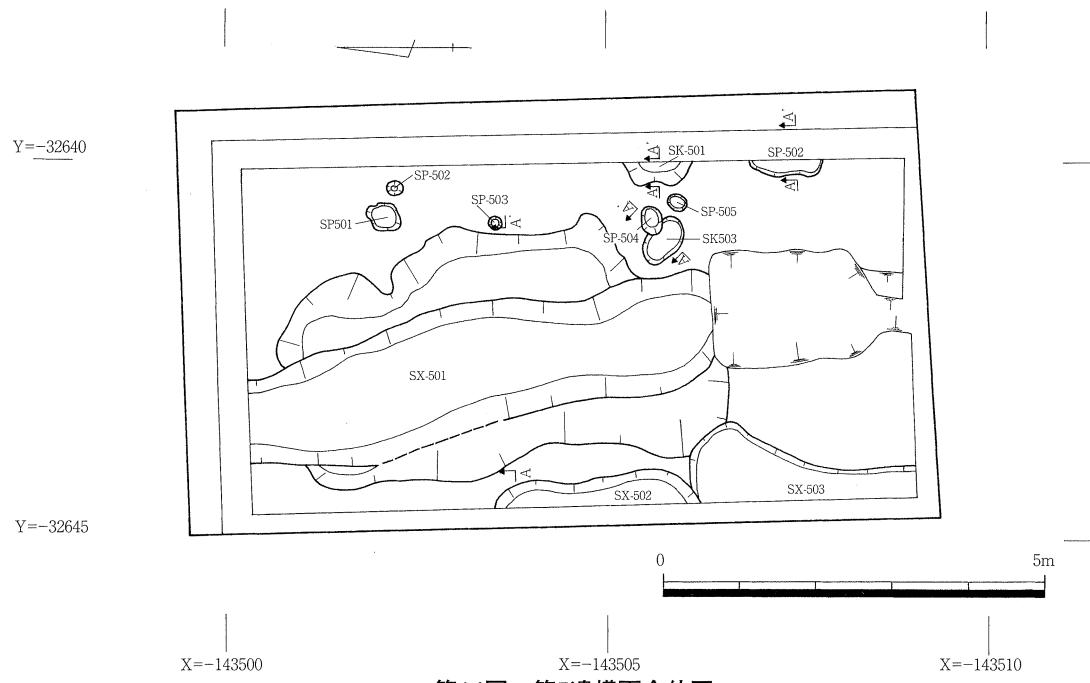
2. ピット

S P-501

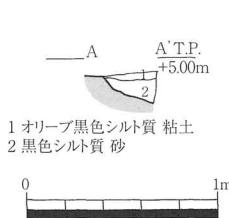
調査区の北東側で検出した。形態は若干不定形なものであるが、ほぼ円形を呈し、規模は径約0.35m、深さ約0.05mを測る。埋土は1層でオリーブ黒色砂質シルトである。遺物は出土していない。

S P-502

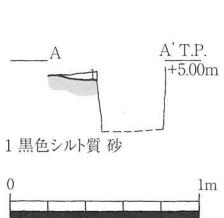
調査区の北東側で検出した。形態はほぼ円形を呈し、規模は径約0.2m、深さ約0.13mを測る。埋土は1層でオリーブ黒色砂質シルトである。遺物は弥生土器片が出土している。



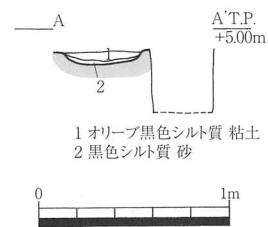
第14図 第5遺構面全体図



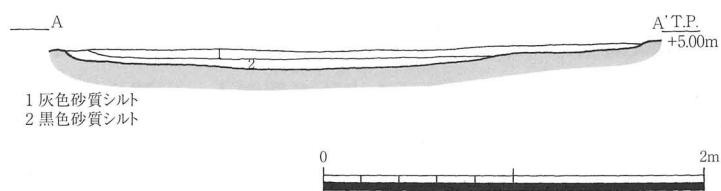
第15図 SK-501断面図



第16図 SK-502断面図



第17図 SK-503断面図



第18図 SX-501断面図

S P -503

調査区の北東側で検出した。形態はほぼ円形を呈し、規模は径約 0.2 m、深さ約 0.04 m を測る。埋土は 1 層でオリーブ黒色砂質シルトである。遺物は出土していない。

S P -504

調査区の南東側で検出した。S K-503 を切る。形態は若干楕円形を呈し、規模は長径約 0.4 m、短径約 0.3 m、深さ約 0.04 m を測る。埋土は 1 層でオリーブ黒色シルト質粘土である。遺物は石片、桃の種が出土している。

S P -505

調査区の南東側で検出した。形態はほぼ円形を呈し、規模は径約 0.2 m、深さ約 0.03 m を測る。埋土は 1 層でオリーブ黒色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

3. 不明遺構

S X -501

調査区の北側の大半で検出した。形態は不定形な土坑状に底面で溝状の段差を残すものである。規模は東西で約 3.0 m 前後を測り、深さは約 0.1 m を測る。埋土は 2 層で灰色砂質シルト、黒色砂質シルトである。遺物は弥生土器片、木片、石片が出土している。

S X -502

調査区の西側で検出した。形態・規模は調査区外に広がるため明らかでないが、深さは約 0.1 m を測る。埋土は 1 層でオリーブ黒色シルト質砂である。遺物は弥生土器片、石片が出土している。

S X -503

調査区の南西側で検出した。形態・規模は調査区外に広がるため明らかでないが、深さは約 0.07 m を測る。埋土は 1 層でオリーブ黒色シルト質砂である。遺物は弥生土器片、サヌカイト片が出土している。

第7節 第6遺構面

基本層序第VII層をベース面として、溝、土坑、ピット、不明遺構を検出している。標高は T.P. + 4.8 m 前後を測る。

1. 溝

S D-601

調査区中央で検出した。SK-602に切られる。規模は幅約 0.4 ~ 0.65 m、深さ約 0.1 ~ 0.15 m を測る。埋土は2層で黒色砂質シルト、オリーブ黒色シルト質砂である。遺物は弥生土器片が出土している。

2. 土坑

S K-601

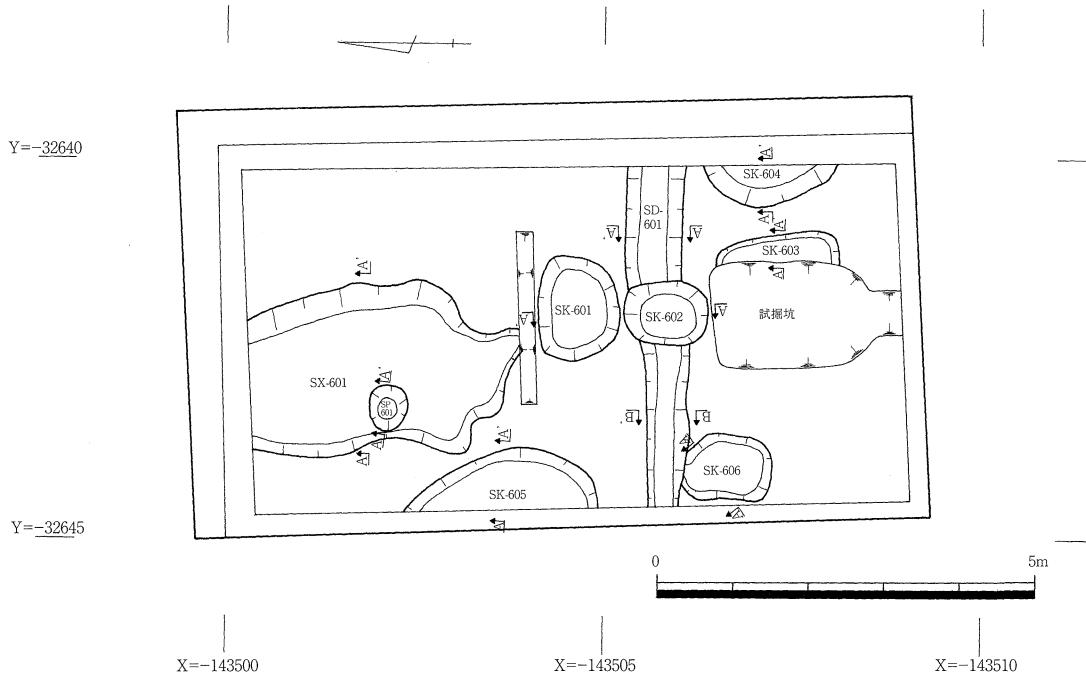
調査区のほぼ中央で検出した。形態は橢円形を呈し、規模は長径約 1.4 m、短径約 1.0 m、深さ約 0.07 m を測る。埋土は2層で黒色シルト質砂、オリーブ黒色シルト質砂である。遺物は弥生土器片が出土している。

S K-602

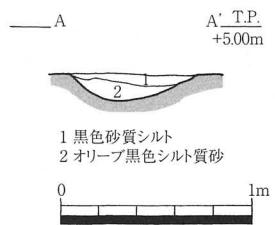
S K-601の南側で検出した。SD-601を切る。形態は橢円形を呈し、規模は長径約 1.1 m、短径約 0.8 m、深さ約 0.2 m を測る。埋土は3層で黒色砂質シルト、黒色シルト、オリーブ黒色シルト質砂である。遺物は弥生土器片が出土している。

S K-603

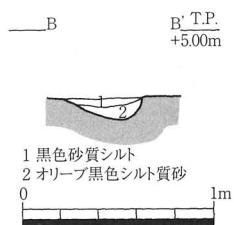
調査区の南側で検出した。試掘坑に切られる。形態・規模は明らかでないが、深さは約 0.15 m を測る。埋土は2層でオリーブ黒色シルト質砂、灰オリーブ砂である。遺物は弥生土器片が出土



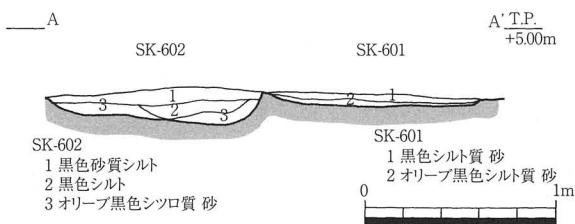
第19図 第6遺構面全体図



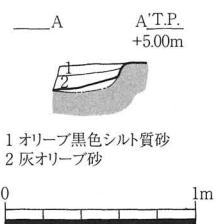
第20図 SD-601断面図(1)



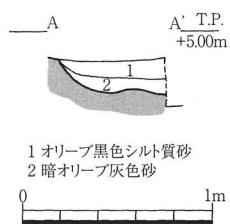
第21図 SD-601断面図(2)



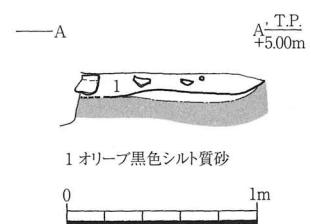
第22図 SK-601・602断面図



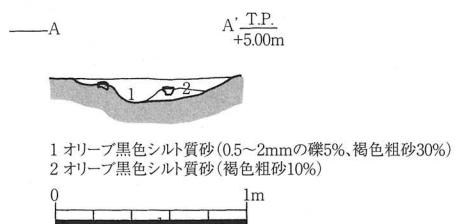
第23図 SK-603断面図



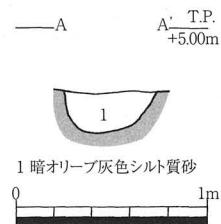
第24図 SK-604断面図



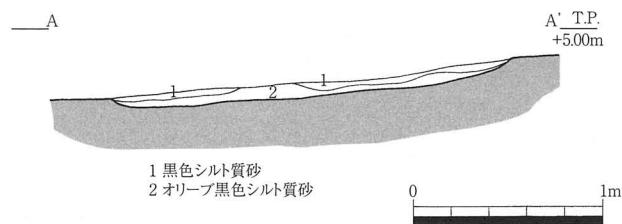
第25図 SK-605断面図



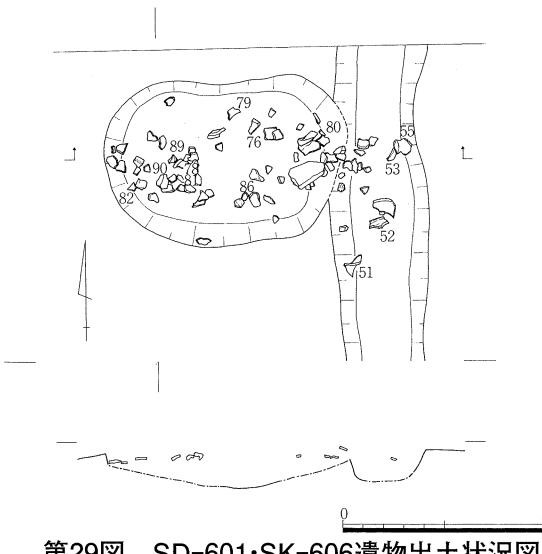
第26図 SK-606断面図



第27図 SP-601断面図



第28図 SX-601断面図



第29図 SD-601・SK-606遺物出土状況図

している。

S K -604

S K -603 の東側で検出した。形態・規模は調査区外に広がるため明らかでないが、深さは約 0.2 m を測る。埋土は 2 層でオリーブ黒色シルト質砂、暗オリーブ灰色砂である。遺物は弥生土器片が出土している。

S K -605

調査区の西側で検出した。形態・規模は調査区外に広がるため明らかでないが、深さは約 0.15 m を測る。埋土は 1 層でオリーブ黒色シルト質砂である。遺物は比較的まとまって出土しており、弥生土器片、土製円板、石製品などが出土している。

S K -606

調査区の南西側で検出した。S D -601 に切られる。形態はほぼ橢円形を呈するものと思われ、規模は長径約 1.3 m、短径約 0.9 m、深さ約 0.13 m を測る。埋土は 2 層で 0.5 ~ 2mm の礫を含む褐色粗砂混オリーブ黒色シルト質砂、褐色粗砂混オリーブ黒色シルト質砂である。遺物は比較的まとまって出土しており、弥生土器片、石製品、サヌカイト片などが出土している。

3. ピット

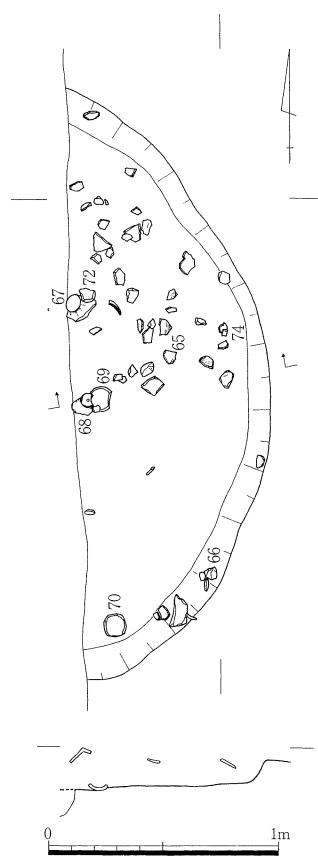
S P -601

調査区北西側で検出した。S X -601 に切られる。形態はほぼ円形を呈し、規模は径約 0.5 m、深さ約 0.2 m を測る。埋土は 1 層で暗オリーブ灰色シルト質砂である。遺物は弥生土器片が出土している。

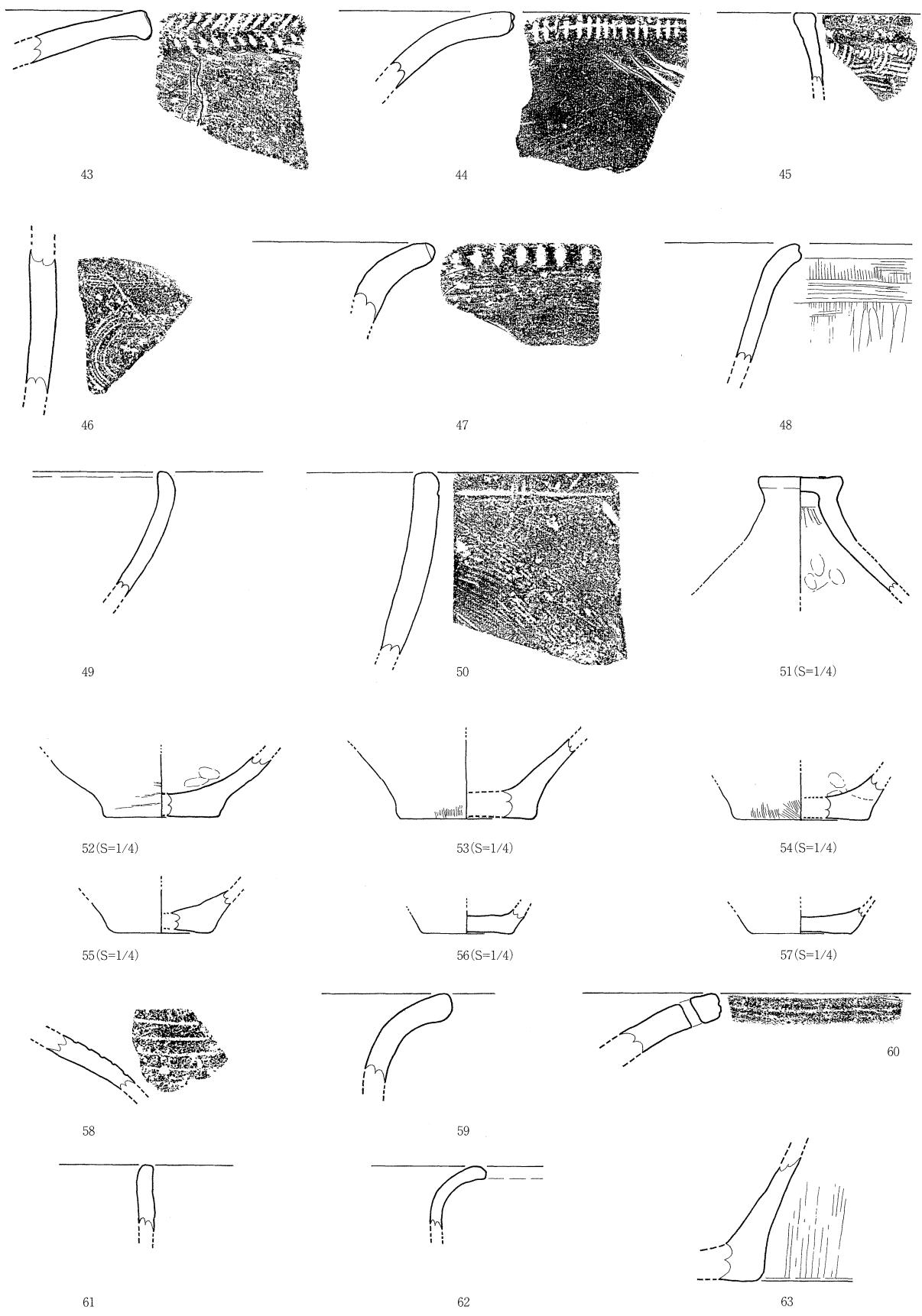
4. 不明遺構

S X -601

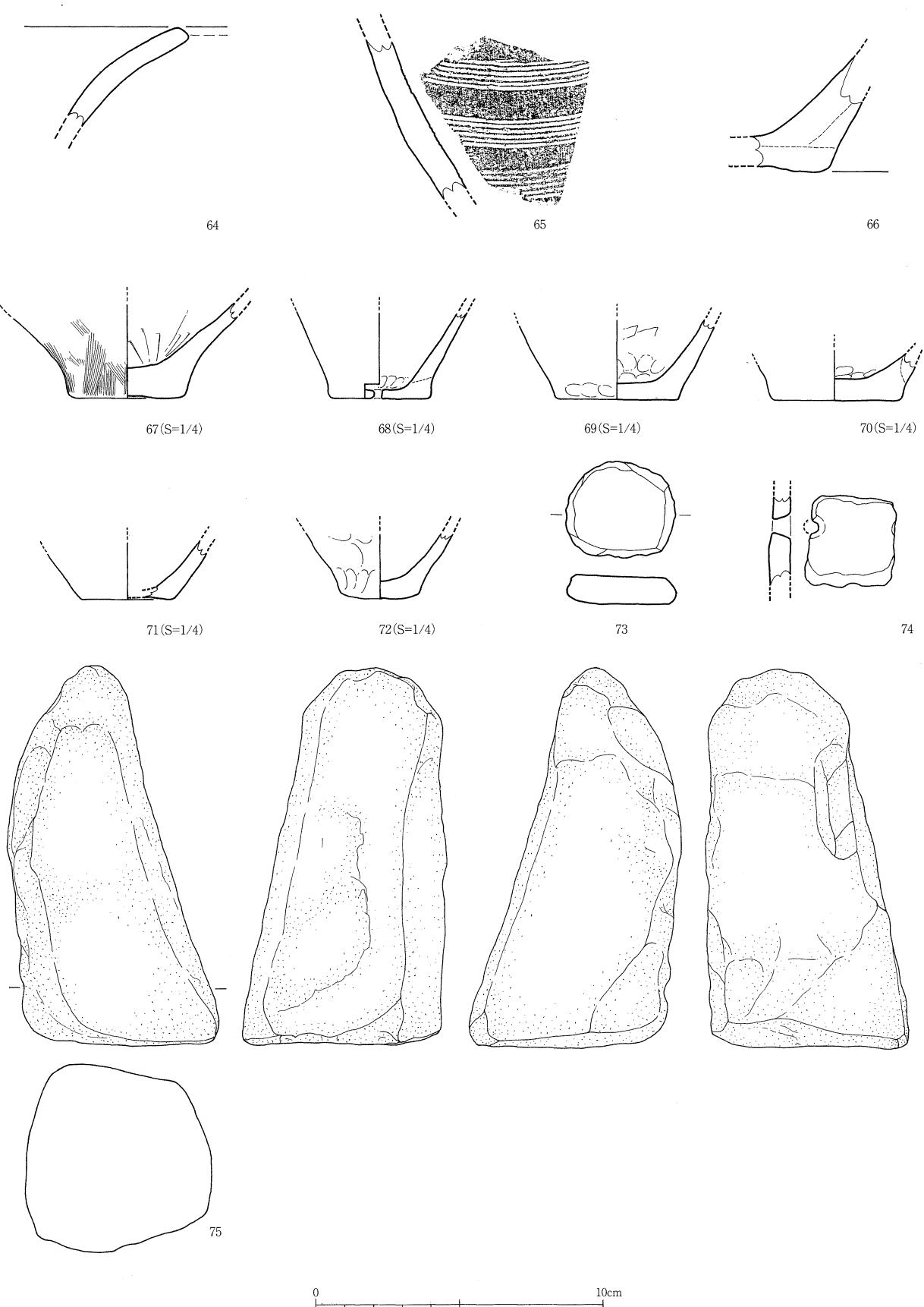
調査区北側で検出した。形態・規模は調査区外に広がるため明らかでないが、深さは約 0.1 m を測る。埋土は 2 層で黒色シルト質砂、オリーブ黒色シルト質砂である。遺物は弥生土器片が出土している。



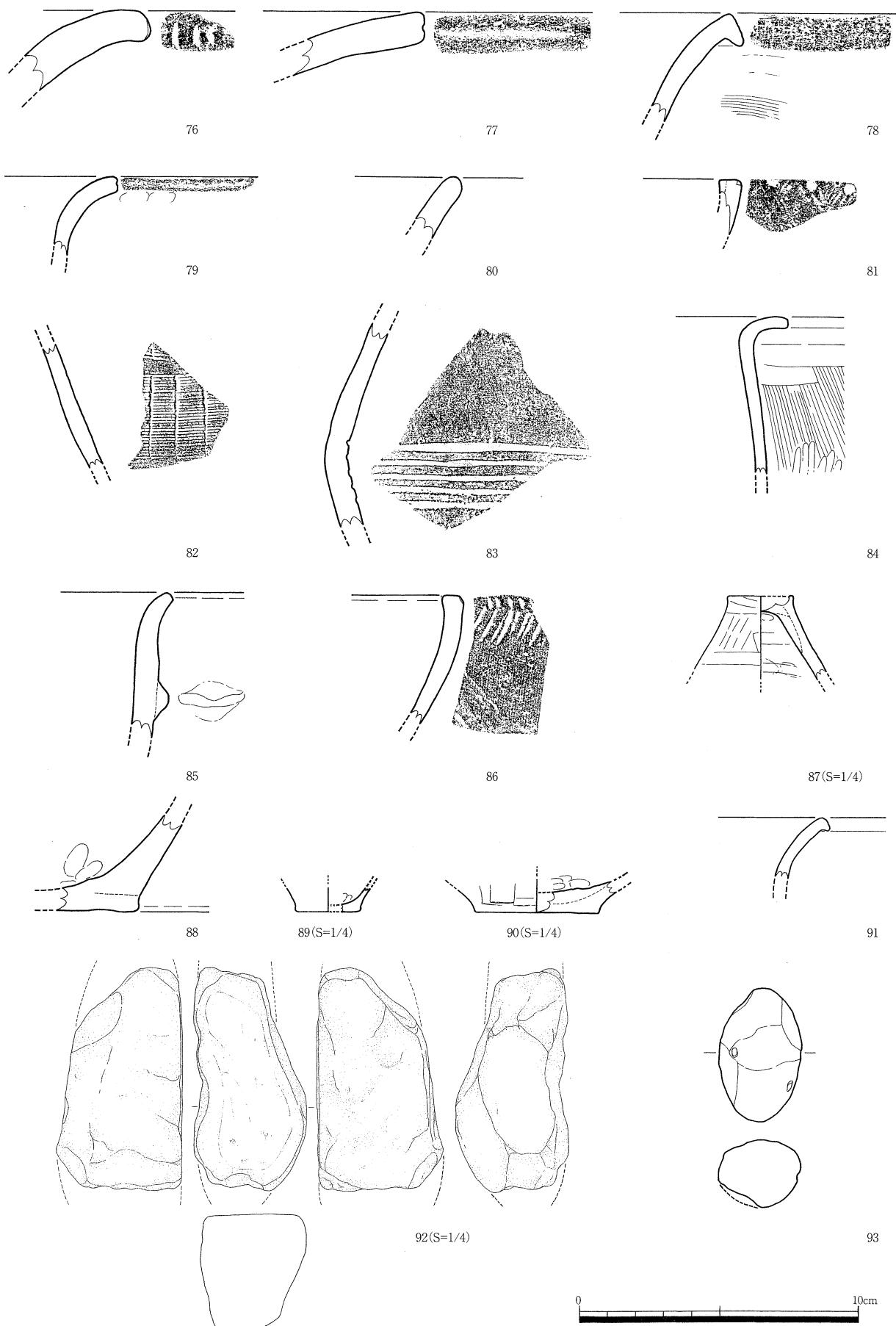
第30図 SK-605遺物出土状況図



第31図 SD-601、SK-602・603・604出土遺物



第32図 SK-605出土遺物



第33図 SK-606、SX-601出土遺物

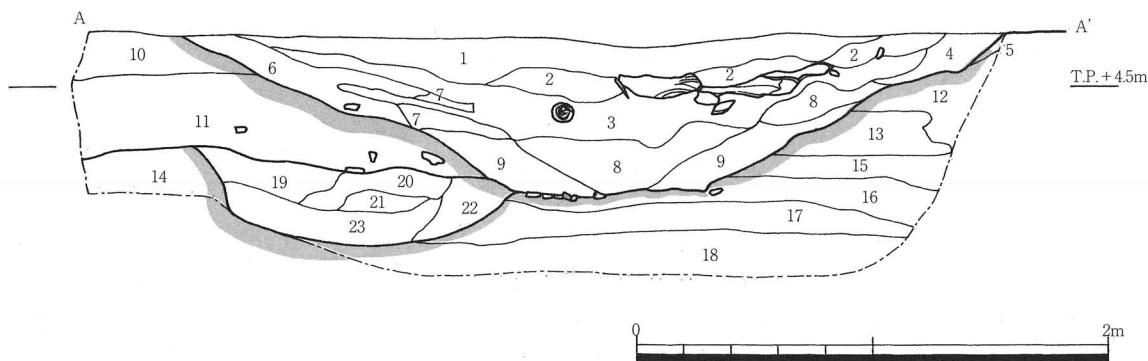
第8節 第7遺構面

基本層序第VII層をベース面として、大溝を検出している。標高は T.P. + 4.7 m 前後を測る。

1. 大溝

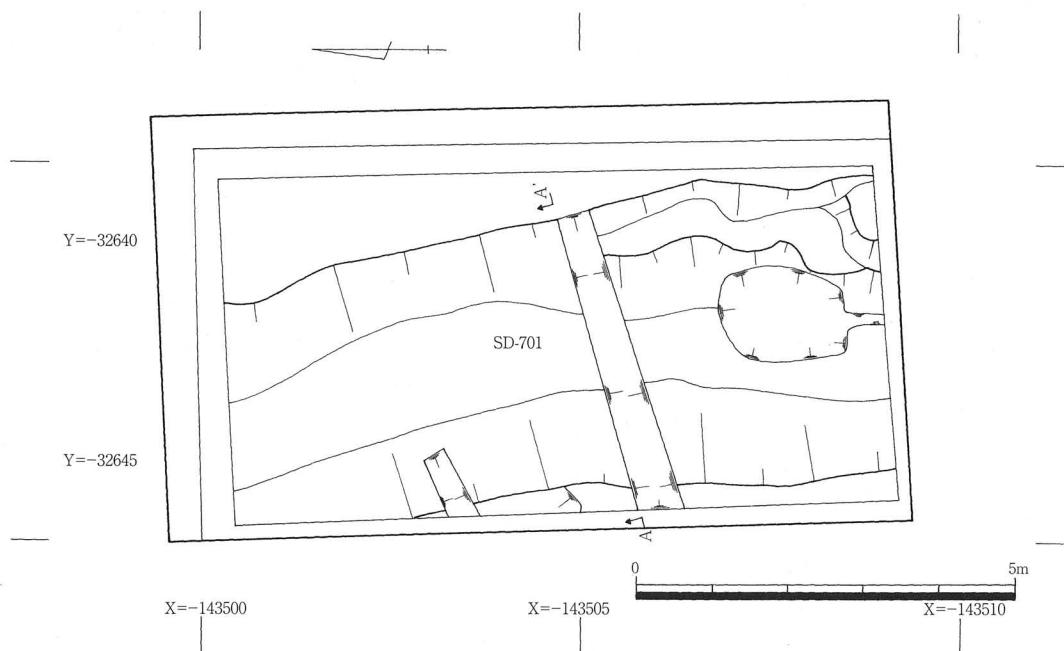
S D -701

調査区のほぼ全域にかけて検出した。規模は幅約 3.5 m、深さ約 0.65 m を測る。埋土は大きく 4 層に分類でき、1 層はオリーブ黒色シルト質砂、黒色シルト質砂、第 2 層は黒色粘土質シルト、第 3 層は灰オリーブ砂、オリーブ黒色砂、浅黄色砂、第 4 層は黒色シルト質砂、第 5 層は灰色砂である。遺物は大量に出土しており、弥生土器を中心に石製品、木製品、サヌカイト片などが出土するほか、特に第 2 層では自然木が集中して出土する状況であった。

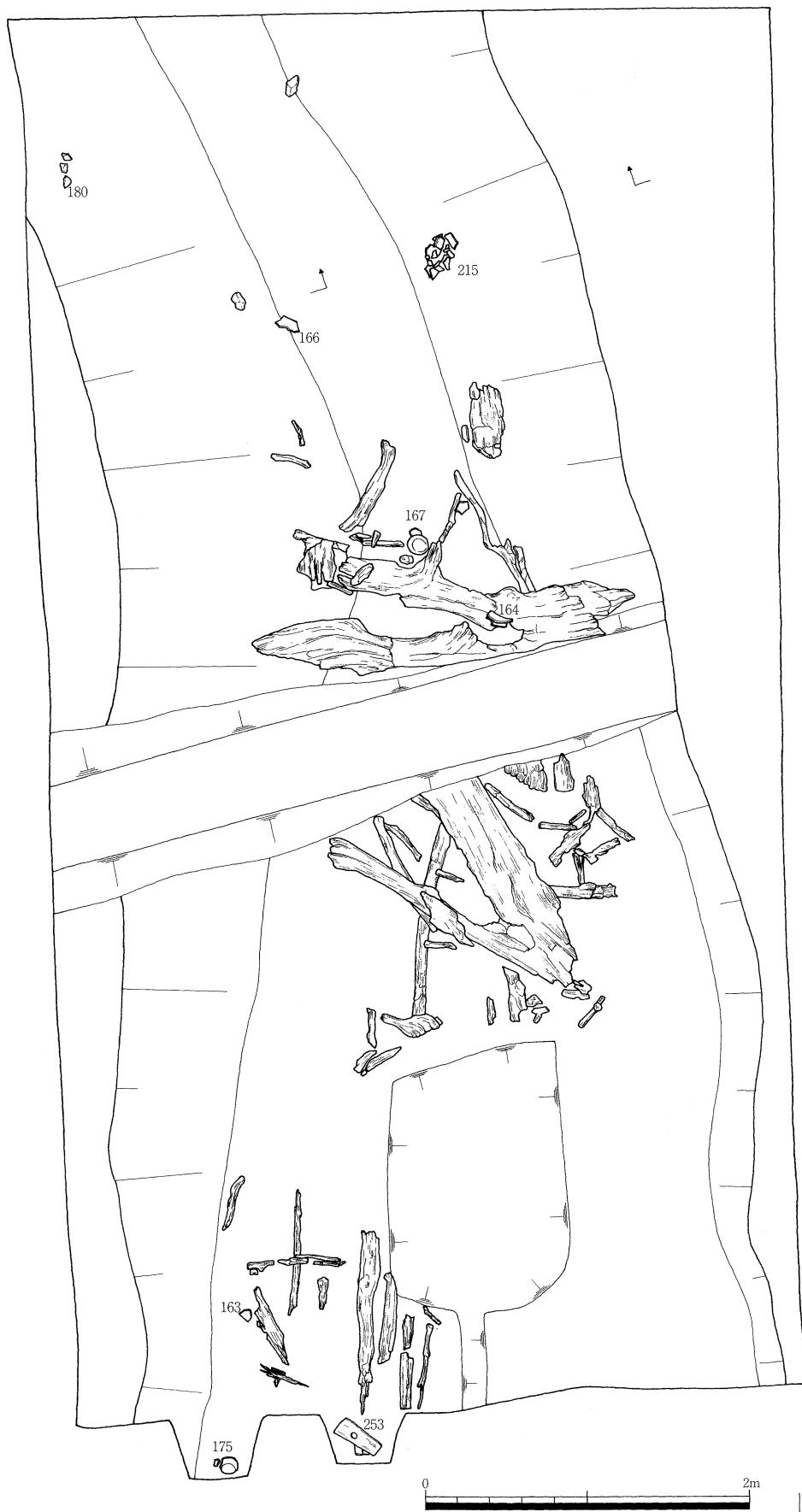


- | | | |
|-------------------------------|----------------------------|-----------------------------|
| 1 オリーブ黒色シルト質砂 0.5~2mmの礫7% | 9 灰色砂(5Y4/1) | 17 灰オリーブシルト |
| 2 黒色シルト質砂 0.5~2mmの礫5% 粘性弱 | 10 オリーブ黒色シルト質砂 0.5mm~の礫20% | 18 灰オリーブ砂質シルト |
| 3 黒色粘土質シルト | 11 オリーブ黒色シルト質砂 0.5mm~の礫15% | 19 黒色シルト質砂 0.5~2mmの礫5% 粘性有 |
| 4 灰オリーブ砂(5Y4/2) | 12 浅黄色砂(5Y6/4) | 20 黒色シルト 0.5~2mmの礫2% |
| 5 オリーブ黒色砂 | 13 黒色シルト質砂 0.5~2mmの礫2% | 21 灰色砂(10Y4/1) |
| 6 浅黄色砂(5Y7/3) | 14 オリーブ灰色シルト | 22 黒色シルト質砂 0.5~2mmの礫15% 粘性有 |
| 7 黒色シルト質砂 0.5~2mmの礫15% 粘性弱 | 15 灰色砂(7.5Y4/1) | 23 黒色シルト質砂 0.5~2mmの礫20% |
| 8 黒色シルト質砂 0.5mm~の礫10% 7.とほぼ同じ | 16 灰オリーブ砂(7.5Y4/2) | |

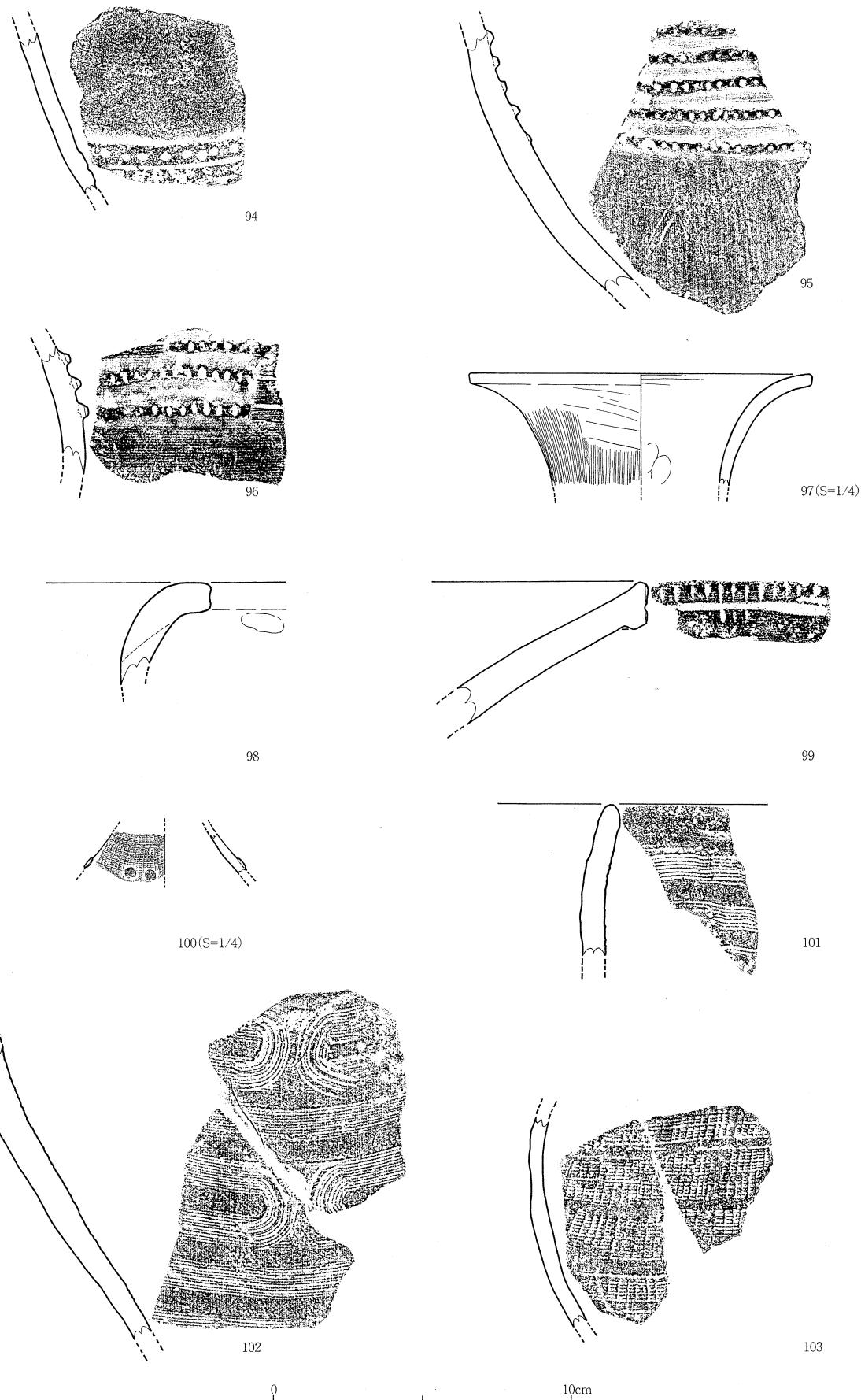
第34図 SD-701、SD-801他断面図



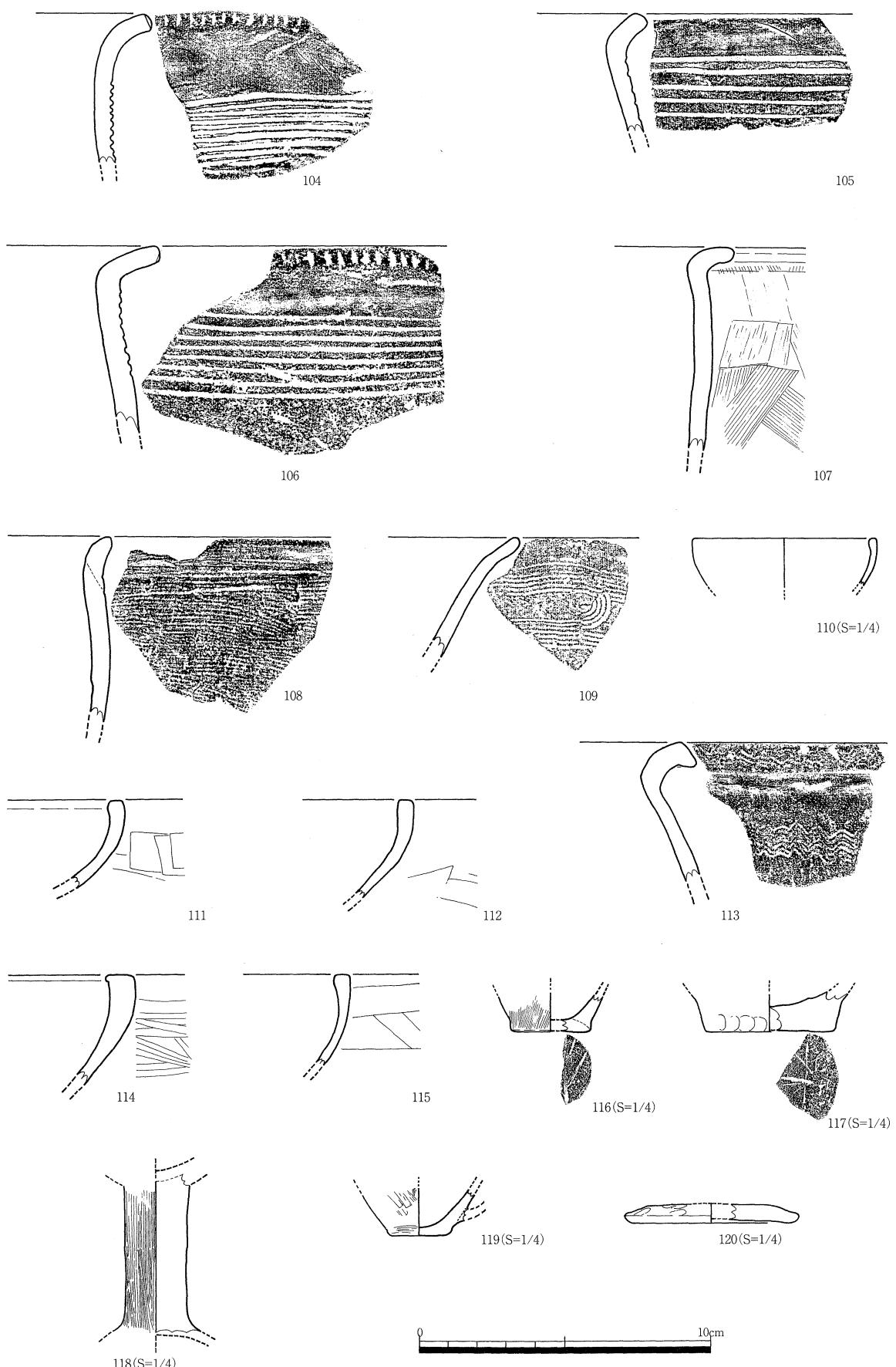
第35図 第7遺構面全体図



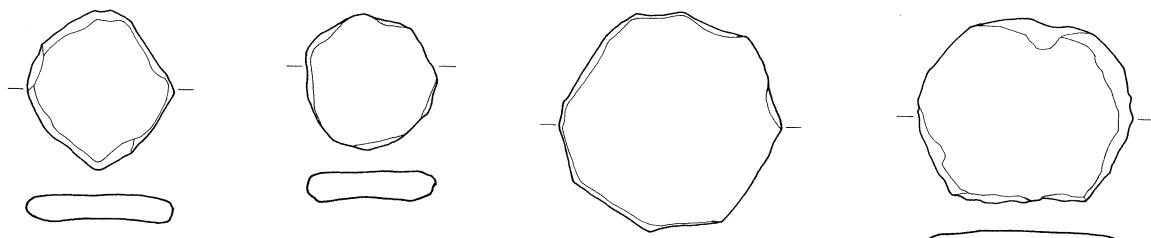
第36図 SD-701遺物、自然木等出土状況図



第37図 SD-701出土遺物(1)



第38図 SD-701出土遺物(2)

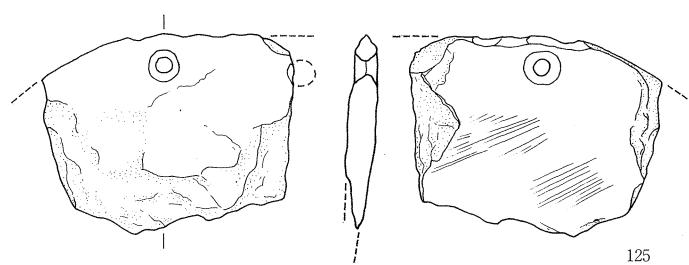


121

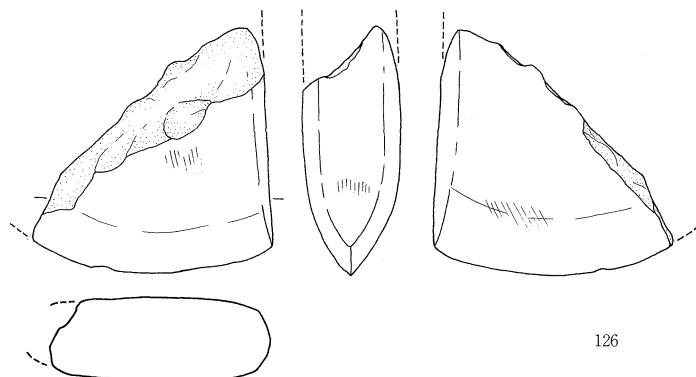
122

123

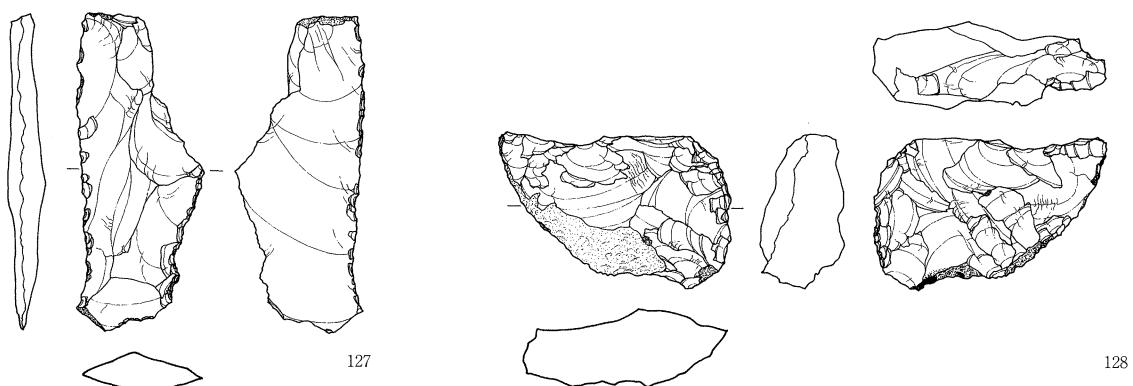
124



125

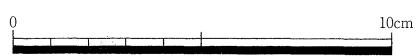


126

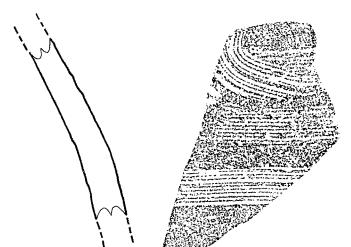


127

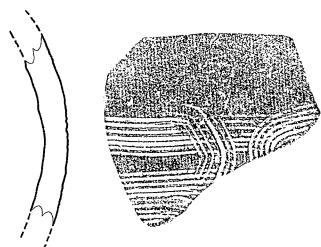
128



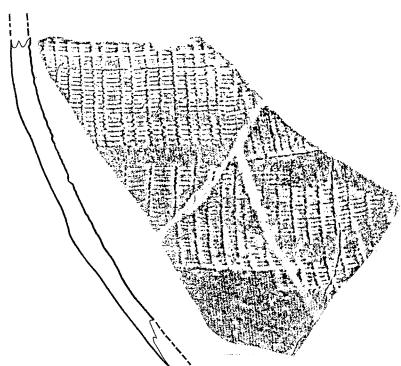
第39図 SD-701出土遺物(3)



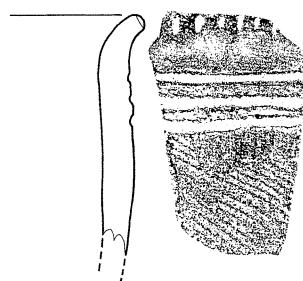
129



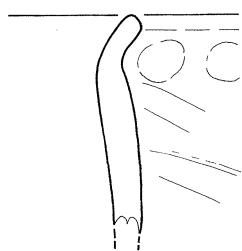
130



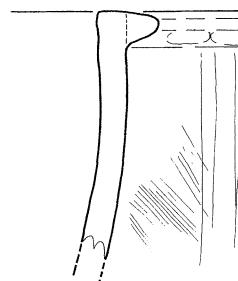
131



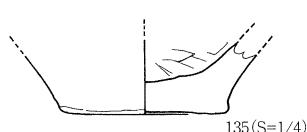
132



133



134



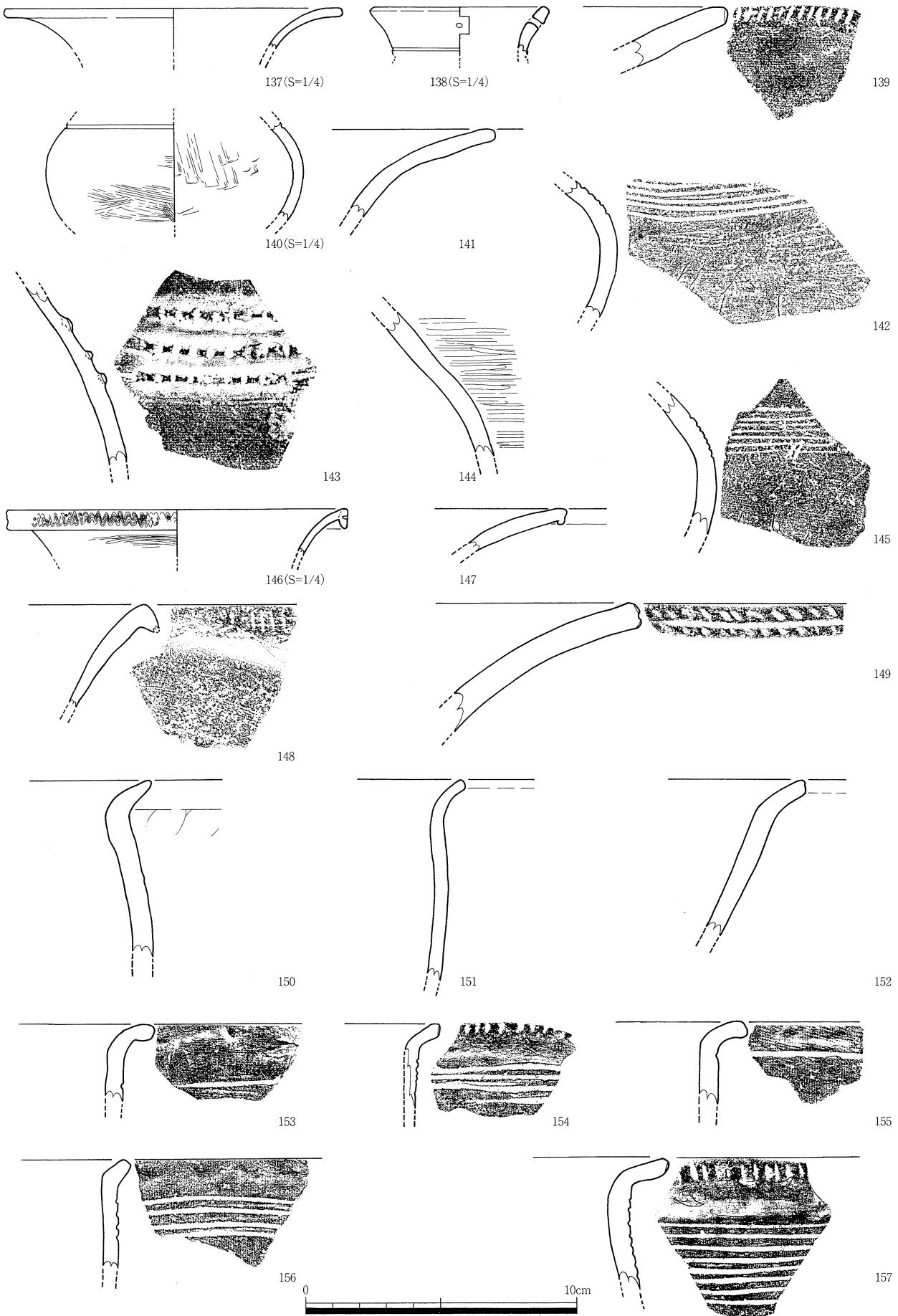
135(S=1/4)



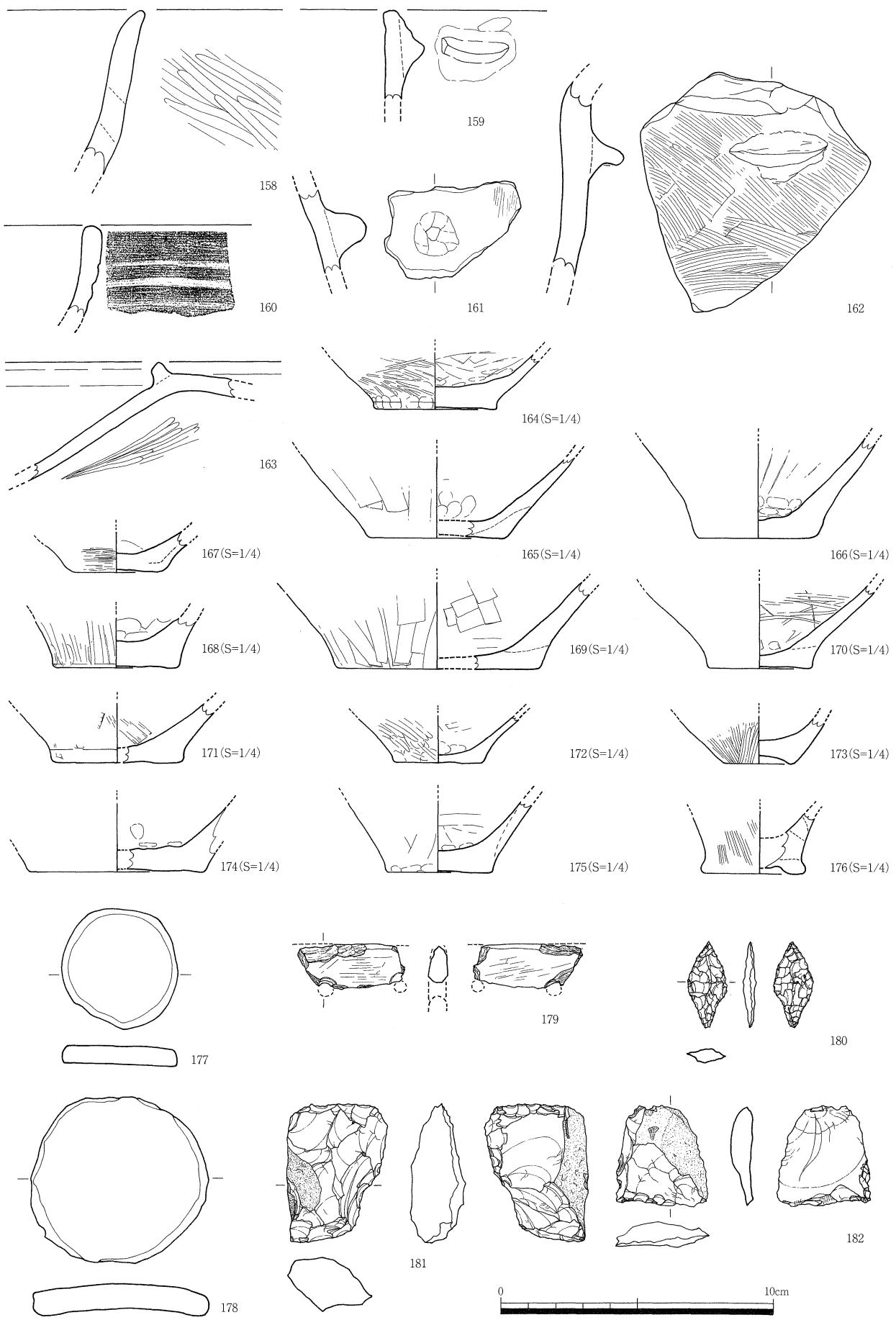
136



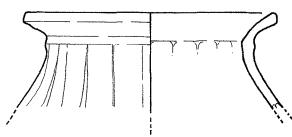
第40図 SD-701出土遺物(4)



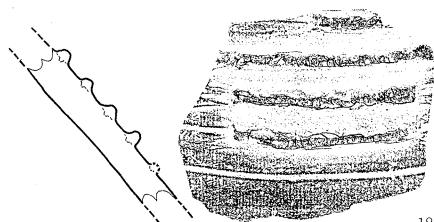
第41図 SD-701出土遺物(5)



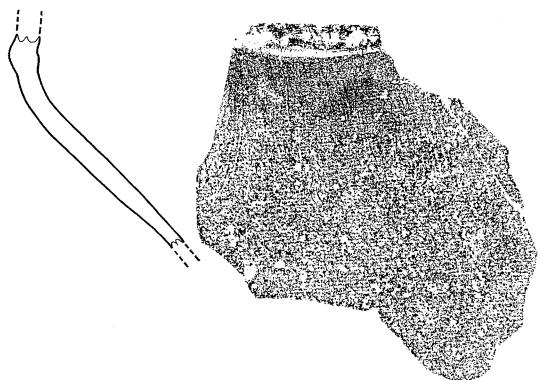
第42図 SD-701出土遺物(6)



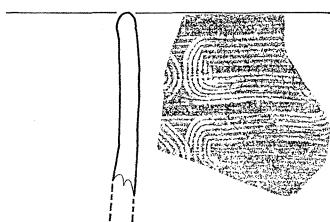
183(S=1/4)



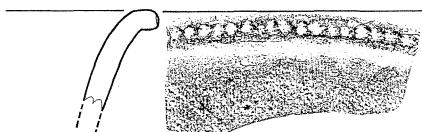
184



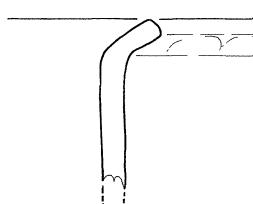
185



186



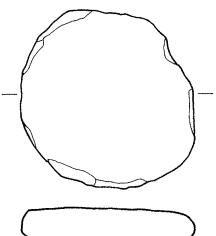
187



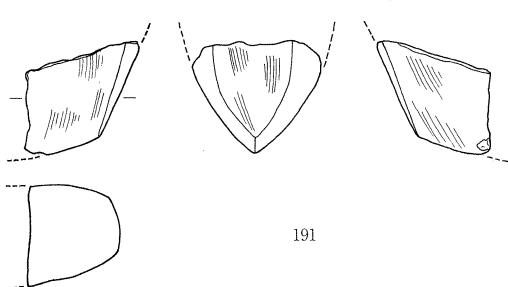
188



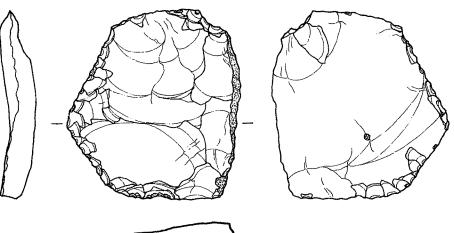
189(S=1/4)



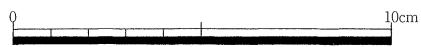
190



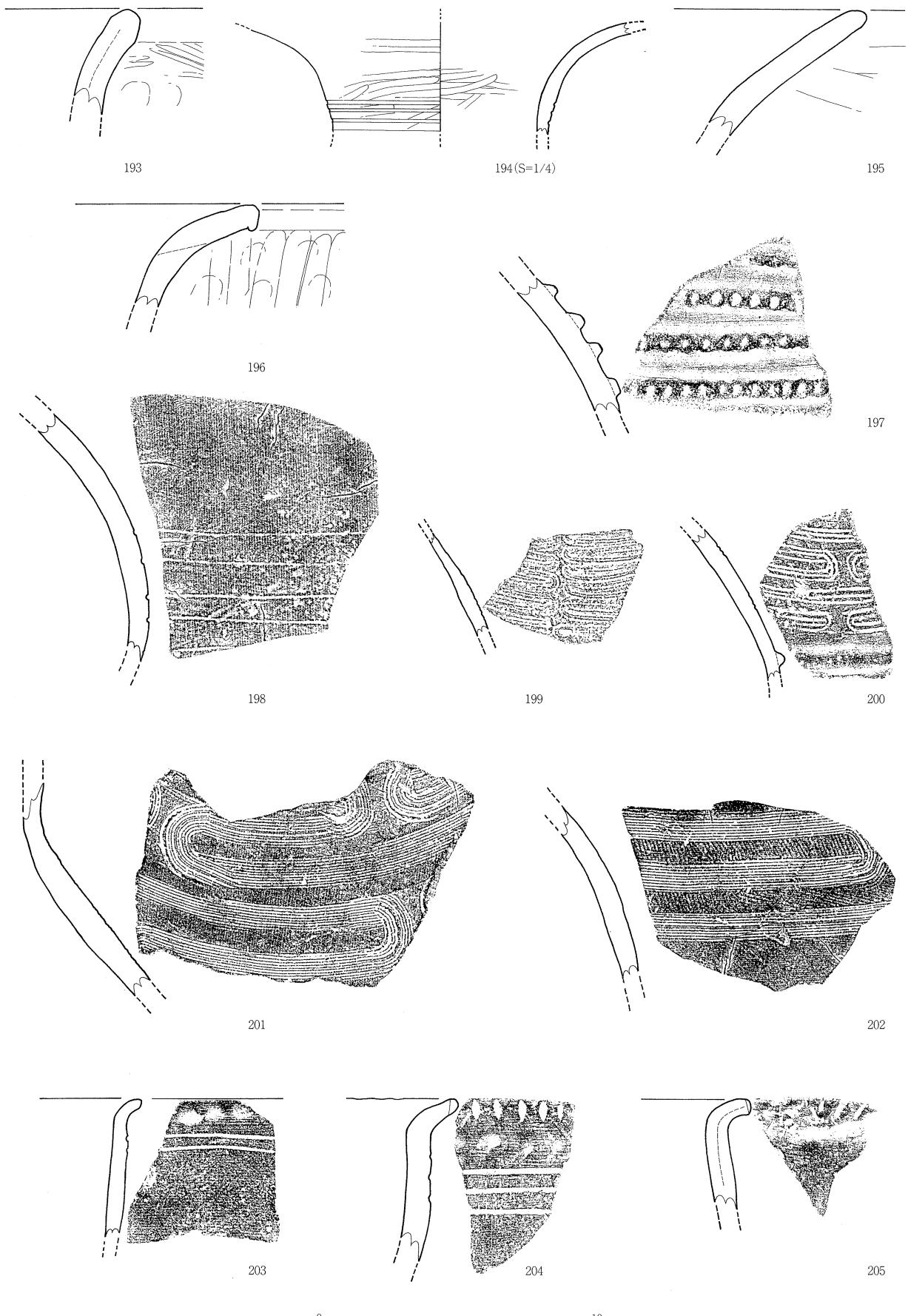
191



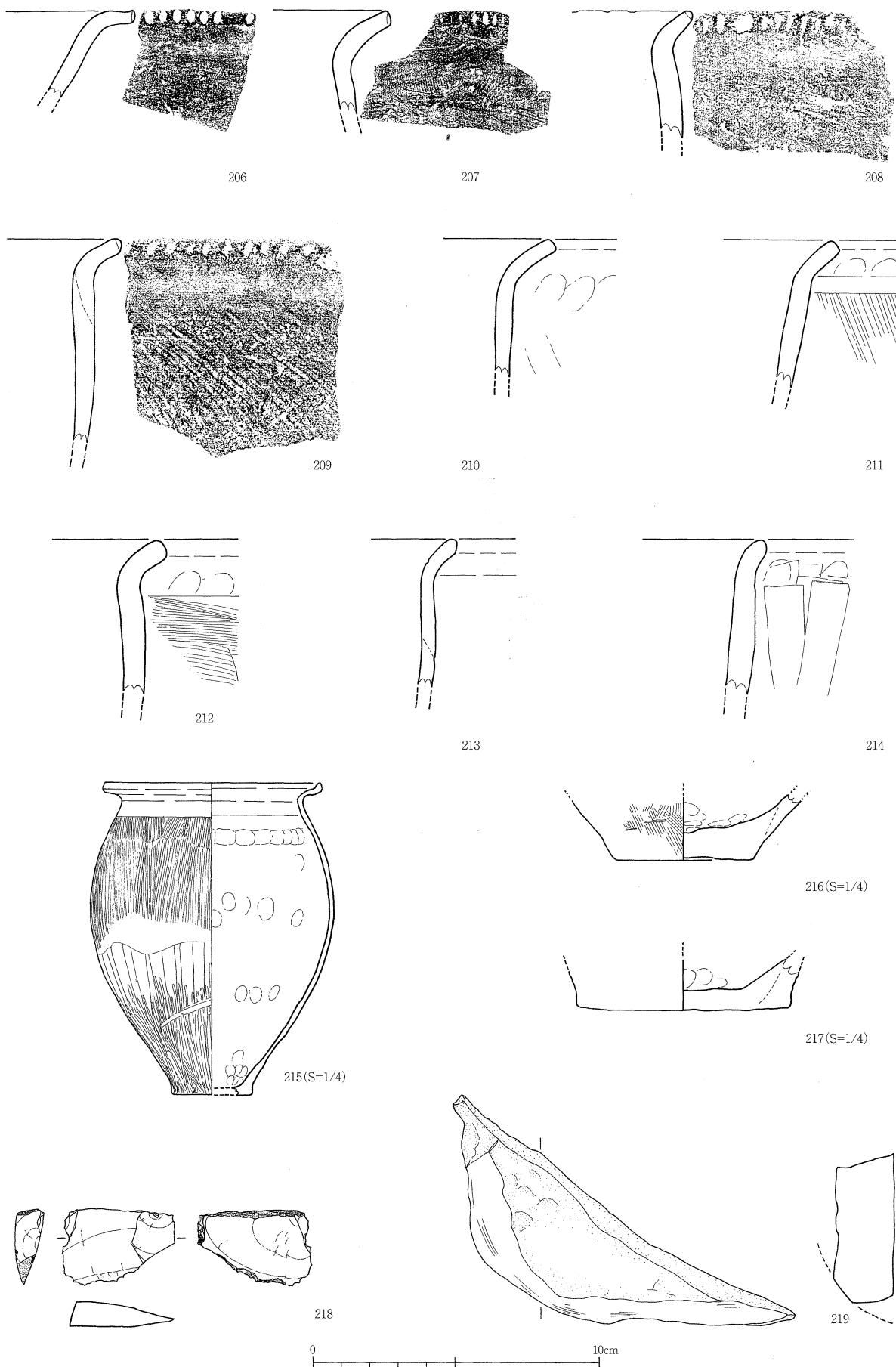
192



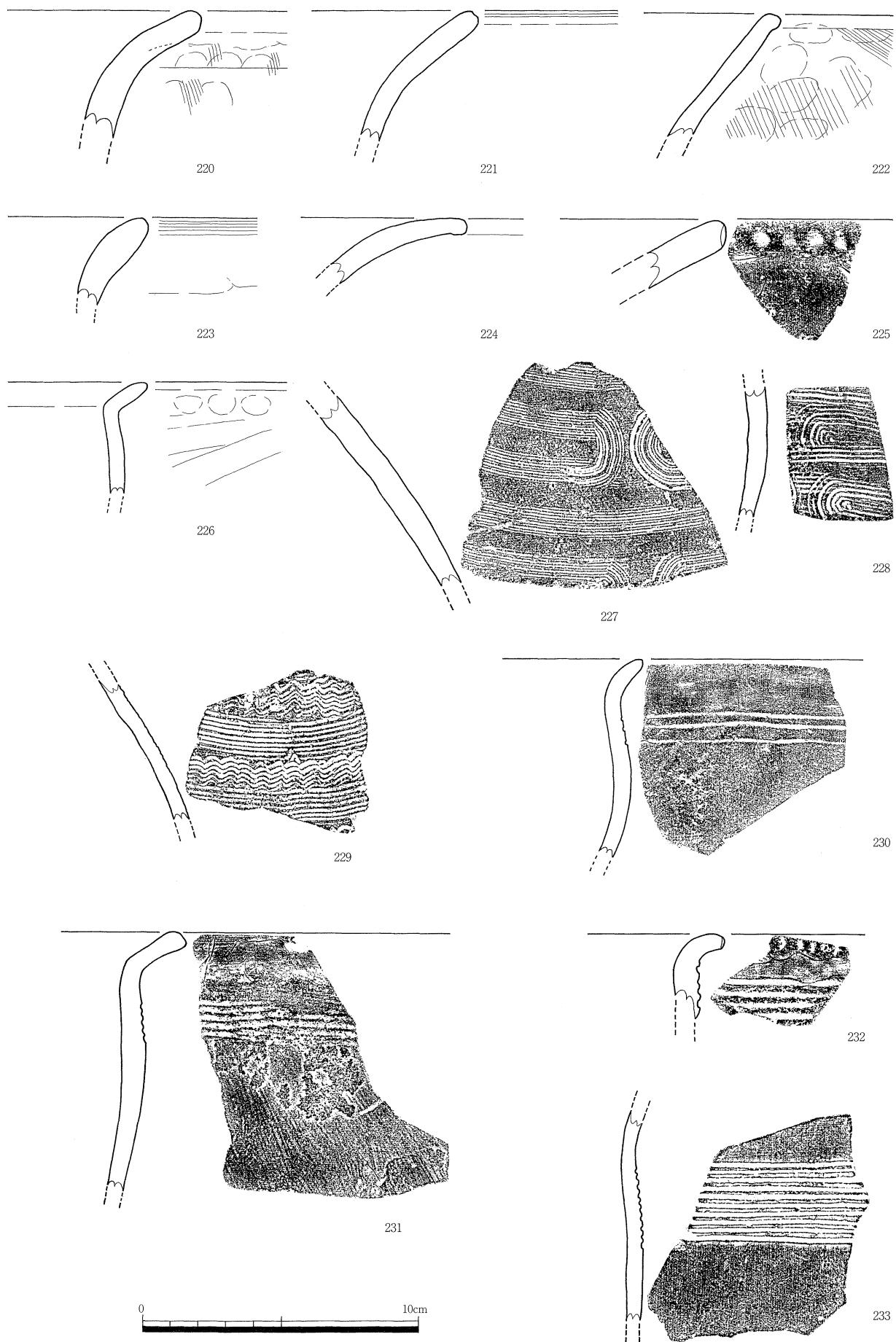
第43図 SD-701出土遺物(7)



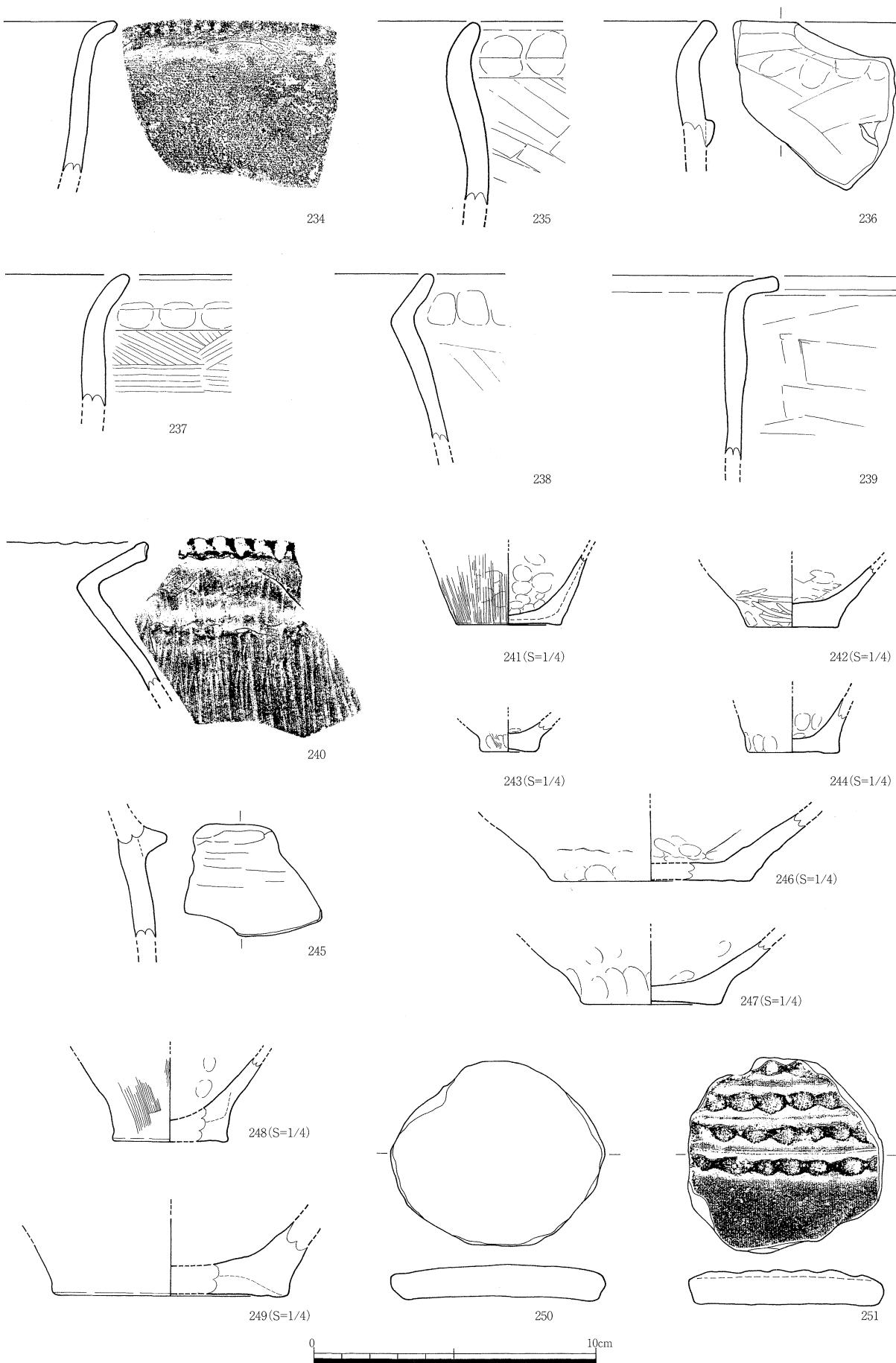
第44図 SD-701出土遺物(8)



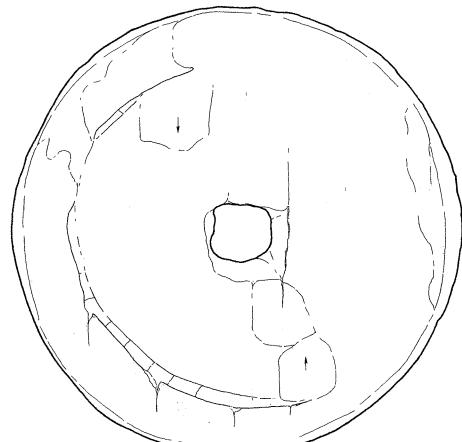
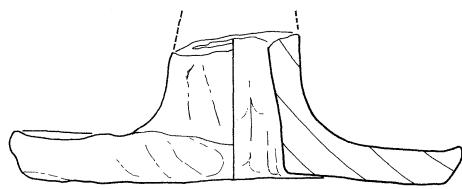
第45図 SD-701出土遺物(9)



第46図 SD-701出土遺物(10)



第47図 SD-701出土遺物(11)



252



253



第48図 SD-701出土遺物(12)

第9節 第8遺構面

基本層序第IX～XⅢ層をベース面として、溝、土坑、ピット、不明遺構を検出している。標高は北東部で T.P. + 4.6 m 前後、南西部で T.P. + 4.2 m 前後を測る

1. 溝

S D -801

調査区の西側で検出した。規模は幅約 1.35 m、深さ約 0.3 m を測る。埋土は 5 層で黒色シルト、灰色砂、黒色シルト質砂が主体をなす。遺物は比較的まとまって出土しており、弥生土器片、土製円板、石製品、木片などが出土している。

S D -802

調査区の南東側で検出した。S X -801 に切られる。規模は幅約 0.7 m、深さ約 0.05 m を測る。埋土は 1 層で黒色粘土である。遺物は弥生土器片が出土している。

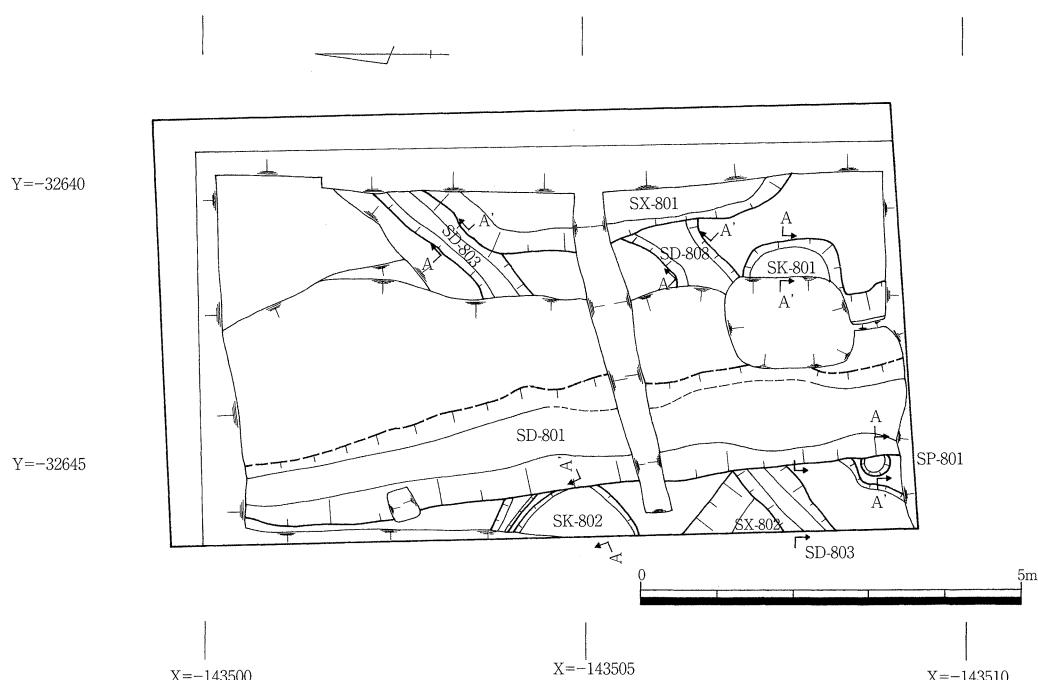
S D -803

調査区の北東から南西側にかけて検出した。規模は幅約 0.4 m、深さ約 0.2 m を測る。埋土は 1 層でオリーブ黒色シルト質砂である。遺物は出土していない。

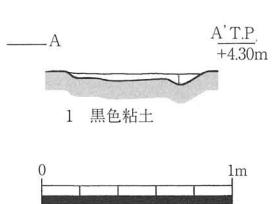
2. 土坑

S K -801

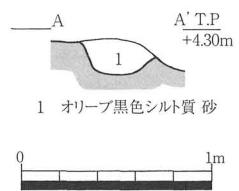
調査区の南東部で検出した。形態・規模は試掘坑に切られているため明らかでないが、深さは約 0.15 m を測る。埋土は 3 層で黒色シルト質砂、黒色砂質シルト、暗オリーブ灰色砂である。遺物は弥生土器片が出土している。



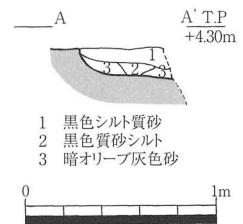
第49図 第8遺構面全体図



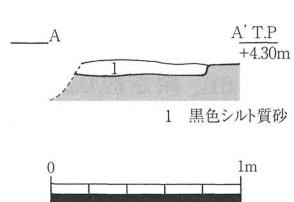
第50図 SD-802断面図



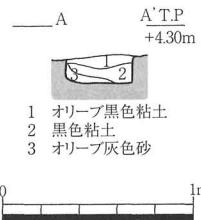
第51図 SD-803断面図



第52図 SK-801断面図



第53図 SK-802断面図



第54図 SP-801断面図

S K-802

調査区の西側ほぼ中央隅で検出した。SD-801に切られる。形態・規模は調査区外に広がるため明らかでないが、深さは約0.1mを測る。埋土は1層で黒色シルト質砂である。遺物は出土していない。

3. ピット

S P-801

調査区の南西側で検出した。SD-801に切られる。形態はほぼ円形を呈するものと思われ、規模は径約0.35m、深さ約0.15mを測る。埋土は3層でオリーブ黒色粘土、黒色粘土、オリーブ灰色砂である。遺物は出土していない。

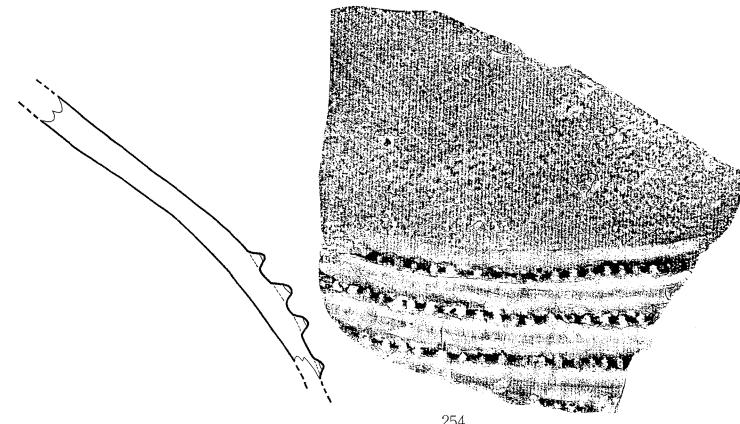
4. 不明遺構

S X-801

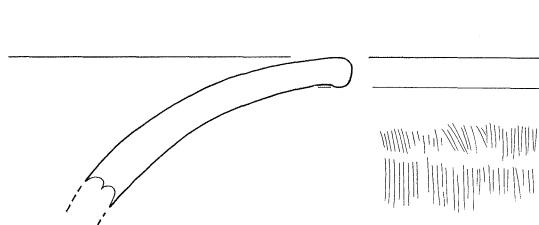
調査区の東側で検出した。形態・規模は調査区外に広がるため明らかでないが、深さは約0.45mを測る。埋土は概ね6層程度で灰色砂～砂礫、青灰～黒色シルトが主体をなしている。遺物は出土していない。

S X-802

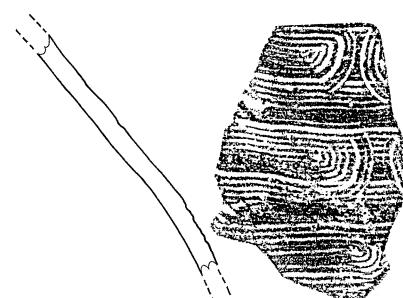
調査区の南西側で検出した。SD-803を切る。形態・規模は調査区外に広がるため明らかでないが、深さは約0.1mを測る。埋土は1層で緑黒色シルトである。遺物は出土していない。



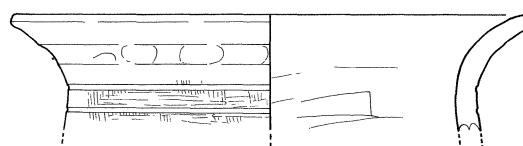
254



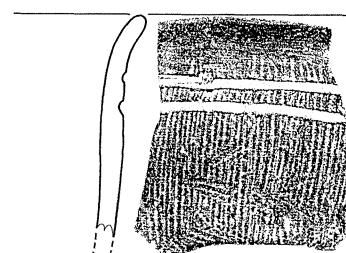
255



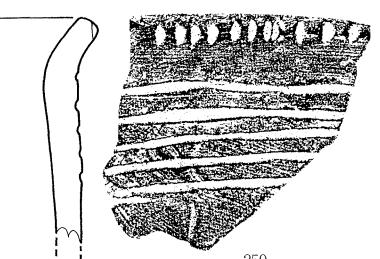
256



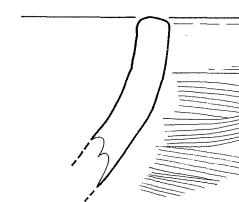
257 (S=1/4)



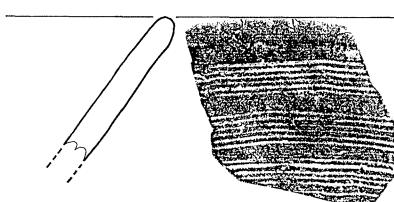
258



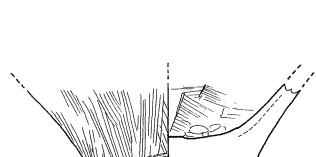
259



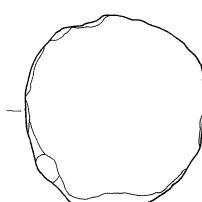
260



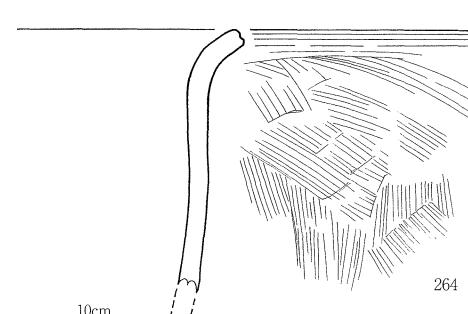
261



262 (S=1/4)



263



264

第55図 SD-801、SK-801出土遺物

第4章 まとめ

今回の調査は中垣内遺跡における第14次調査であり、調査面積は狭小ながらも中垣内遺跡の様相を明らかにするうえで一定の調査成果を得ることができた。以下、今回の調査成果について概括し、まとめとしたい。

1. 第1～4遺構面にかけては所謂、鋤溝を中心に検出している。第3遺構面では瓦器等の遺物が出土し、また第4遺構面では若干であるが黒色土器の出土が見受けられることから、概ね平安時代以降は耕作地であったものと考えられる。

中垣内遺跡では、弥生集落廃絶後に耕作地として今日に至る様相を示しており、その状況を追認するものであった。また、既往の調査では古墳時代の水田跡を確認する事例が多く見られるが、今回の調査では古墳時代に関連する遺構、遺物等は見受けられなかった。

2. 第5遺構面では土坑、ピット等を検出しているが、性格を明確に出来るものではなく、また少量の弥生土器片のみが出土する状況であった。調査面積が僅かであるため推定にならざるをえないが、中垣内遺跡における弥生集落廃絶過程の最終段階の様相を示している状況と思われる。
3. 第6遺構面では溝、土坑等、第7遺構面では大溝を検出し、遺物も比較的まとまって出土している。弥生前期の土器や中期前半の土器を多く混入する状況であるが、概ね弥生時代中期中頃から後半に比定されるもので、今回の調査では層位的に2面を確認した状況にある。

中期中頃から後半にかけての明確な集落跡としては、今回調査地のほぼ真西約130m地点における平成4年の調査（NGT92-1）で確認されているが、第7遺構面で検出した大溝（SD-701）が環濠的性格としての可能性があるならば、第7遺構面で示された集落域が第6遺構面においてさらに東方に広がる様相を層位的に示されていると言えよう。

4. 第8遺構面では溝、土坑等を検出し、その出土遺物から弥生時代前期から中期前半にかけての遺構面と考えられる。中期同様に前期集落についても平成4年の調査（NGT92-1）で確認されている他、今回調査地の南西50m地点における昭和63年の調査（NGT88-3、NGTIV）においても確認されており、さらに東方にむけて前期集落の広がりを確認することができた。

また、今回の調査では中期前半の遺構（SD-801）も確認でき、遺物についてもその他の遺構での混入品も含めかなり目立つものであった。中垣内遺跡の弥生集落のなかで、中期前半の集落についての様相は明確でなく、昭和62年の調査（NGT87-1、NGT1）での中期前半の壺棺の出土など、集落の存在を窺わせるような遺物だけが分散して出土する状況が窺えるものである。今回、遺構を確認できた成果は大きいが、その具体的な様相については今後の調査に期待したい。

附載 中垣内遺跡出土木製品および自然木の樹種同定

(財) 元興寺文化財研究所

木沢直子

中垣内遺跡より出土した木製品および自然木について樹種同定を行った結果を以下のとおり報告する。

1. 試料

No.1 高杯 No.2 鍬

上記2点のほかに、自然木（非加工材）60点についてサンプリングを行なった。各試料の樹種については別表1にも記載した。

2. 樹種同定の方法

樹種同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柾目面（放射断面）の3断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』(I)(II)に従った。

3. 同定結果

樹種が判明した試料のうち25点の木材組織顕微鏡写真を示した。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。なお、サンプリングを行なった自然木は木材組織の劣化が顕著なために樹種識別が困難であった試料も多く含まれていた。これらについては識別が可能な範囲で同定を行い、その結果を記した。同定は木沢直子（(財)元興寺文化財研究所）が行なった。

※ 樹木の性質、材の用途、出土事例等については後記の文献を参考とした。

※ *印は後頁に顕微鏡写真を掲載した試料を示す。

1). 木製品の樹種同定

No.1 高杯 (*)

クワ属 *Morus L.*

(くわ科 Moraceae)

直径約 $220\ \mu\text{m}$ の管孔が単独ないし2~3個複合し、1~5列で孔圈を形成する環孔材。孔圈外において小道管は2~6個が斜線状、接線状に複合して散在する。小道管内壁にラセン肥厚が見られる。道管は單穿孔を有し、周囲状柔細胞が発達している。放射組織は異性で1~6細胞列。柾目面において平伏細胞と直立細胞が見られる。

分布：温帯から亜熱帯：北海道・本州・四国・九州

樹形：落葉高木または低木。樹高12m、胸高直径60cmに達する

用途：床柱、床板、家具、器具、楽器、彫刻 等

出土事例：削物（槽、盤）、編み具・紡織具（木錘、緯打具）、農具（臼）等

No.2 鍬（*）

アカガシ亜属 *Quercus* L. Subgen. *Cyclobalanopsis* Oerst.

（ぶな科 Fagaceae）

広葉樹、放射孔材。直径約 $220 \mu m$ の管孔が単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔で道管放射組織間壁孔は大型の柵状を呈する。放射組織は概ね平伏細胞よりなる同性で、単列放射組織と広放射組織を有する。

分布：本州（宮城県、新潟県以南）・四国・九州

樹形：常緑高木。樹高 20m、胸高直径 70cm に達する

用途：器具、農具、家具、土木、建築材、薪炭 等

出土事例：建築部材、農具、工具、炭化材（燃料材）等

2) 自然木の樹種同定

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.

（いちい科 Taxaceae）

自然木 8（*）

仮道管と放射柔細胞からなる針葉樹。樹脂細胞、水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行が緩やかで晩材の幅は狭い。分野壁孔は小形のヒノキ型で1分野に4個見られる。放射組織は単列で2～8細胞高。仮道管の内壁に二重のラセン肥厚が見られる。

分布：本州（宮城県以南）、四国、九州

樹形：山林に散生する常緑高木。樹高 25m、胸高直径 2m に達する

用途：建築、彫刻、碁盤、将棋盤 等

出土事例：建築部材、工具柄、木簡、漁撈具（網枠）、弓 等

アカガシ亜属 *Quercus* L. Subgen. *Cyclobalanopsis* Oerst.

（ぶな科 Fagaceae）

自然木 11（*） 自然木 33 自然木 34（*）

広葉樹、放射孔材。自然木 11 は直径約 $110 \mu m$ の管孔が単独で放射方向に配列する。自然木 33 と 34 は劣化による木材組織の収縮が著しかったが直径 $80 \mu m$ の管孔が放射方向に配列する状態を確認することができる。道管は單穿孔で、道管放射組織間壁孔は大型の柵状を呈する。放射組織は概ね平伏細胞よりなる同性で、単列および広放射組織を有する。

シイ属 *Castanopsis* Spach

(ぶな科 Fagaceae)

自然木 10 (*)

広葉樹、環孔性の放射孔材。直径 $120 \mu m$ の管孔が孔圈部の接線方向に不連続に配列し、漸次径を減じて放射方向に集団をなす。晩材部では小型で薄壁の角張った小道管が集団をなし、火炎状に配列する。道管は单穿孔を有する。放射組織は平伏細胞よりなる同性で単列放射組織が見られる。シイ属はスダジイとツブラジイに分けられる。木材組織的な特徴においてツブラジイの識別は可能であるが自然木 10 は木材組織の収縮が著しく識別が困難であった。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky

分布：本州（関東以西）・四国・九州・沖縄

樹形：常緑高木。樹高 25m、径 1.5m に達する

スダジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky var. *Sieboldii* Nakai

分布：暖帯：本州（福島県、新潟県佐渡以南）・四国・九州・沖縄

樹形：常緑高木

用途：薪炭、建築、器具、家具、船舶 等

シイ属の出土事例：建築部材（柱材、梯子）、農具柄 等

ぶな科 Fagaceae

自然木 4

広葉樹、環孔材。劣化による木材組織の収縮が著しい。直径 $100 \mu m \sim 150 \mu m$ の管孔が年輪の始めに単列配列し、晩材では急激に直径が減じる。道管は单穿孔。放射組織は平伏細胞よりなる同性で単列放射組織と広放射組織を有する。孔圈外における小道管の配列が不明瞭であるため樹種の識別は困難であった。

分布：温帯から亜熱帯

樹形：落葉または常緑高木、まれに低木

エノキ *Celtis sinensis* Persoon

(にれ科 Ulmaceae)

自然木 18 (*) 自然木 22 自然木 24 自然木 26 自然木 27 (*)

自然木 28 (*) 自然木 30 (*) 自然木 35-1 自然木 35-2 自然木 36

自然木 37 自然木 38 (*) 自然木 39 自然木 42 自然木 43

自然木 44 自然木 48 自然木 58 自然木 59 自然木 60

広葉樹、環孔材。いずれの試料も直径 $150 \sim 200 \mu m$ の管孔が孔圈部で多列配列する。孔圈外の 小道管は斜線状、接線状に集合する。道管は单穿孔で、小道管にはラセン肥厚が見られる。放射組織は 1 ~ 2 細胞列と 7 ~ 9 細胞列が多く、幅の広い放射組織内には鞘細胞がある。

分布：本州（青森県の日本海岸まであるが福島県、新潟県以内に普通）・四国・九州

樹形：落葉高木。樹高 20 m、胸高直径 1.2 m

用途：建築、器具、家具、薪炭、ケヤキの模擬材として用いられる

出土事例：柱材、土木材、剝物（容器）等

コクサギ *Orixa japonica* Thunberg

(みかん科 Rutaceae)

自然木 17 (*) 自然木 29 (*) 自然木 31 (*) 自然木 32

広葉樹、紋様孔材。いずれの試料も直径 30 ~ 40 μ m の管孔が集団をなして斜線状、あるいは X 字状に配列する。道管は単穿孔。放射組織はほぼ同性で 1 ~ 2 細胞列である。

分布：本州、四国、九州

樹形：山野の林下に普通な落葉低木

用途：特になし

出土事例：土木材（杭材）、自然木（非加工材）

ウルシ属 *Rhus* L.

(うるし科 Anacardiaceae)

自然木 12 (*) 自然木 25 (*)

広葉樹、環孔材。いずれの試料も直径 200 μ m の管孔が単列～2、3列複合して配列し、孔圈外に向かって徐々に径を減じる。自然木 12 は特に年輪幅が狭く、自然木 25 は劣化による放射方向への収縮が顕著である。孔圈外では小道管が単列～4、5列複合して分布する。No. 25 にはピスフレックが見られる。道管は単穿孔を有し、内腔ではチロースが顕著である。小道管にはラセン肥厚が見られる。放射組織は異性で 1 ~ 2 細胞列が多く、時に 4 列見られる。

分布：北海道、本州、四国、九州

樹形：落葉または常緑高木

用途：建築材、器具材 等

出土事例：土木材（杭材）、建築部材、祭祀具、自然木（非加工材）等

モチノキ属 *Ilex* L.

(もちのき科 Aquifoliaceae)

自然木 41 (*)

広葉樹、散孔材。試料は劣化により木材組織が収縮している。直径 20 ~ 30 μ m の管孔が単独ないし 1 ~ 5 列で放射方向に複合して配列する。道管は階段穿孔で、道管および木纖維にラセン肥厚が見られる。放射組織は異性で 1 ~ 7 細胞列。放射柔細胞に大型の結晶細胞が存在する。モチノキ属には

タラヨウ、モチノキなどがある。試料の劣化による収縮のため樹種の識別は困難であった。

分布：北海道、本州、四国、九州、沖縄

樹形：常緑または低木

用途：器具、建築、薪炭 等

出土事例：木錘、雑具、井戸杵、土木材（杭材）、板材、自然木（非加工材）

アオキ *Aucuba japonica* Thunb.

（みずき科 Cornaceae）

自然木 19 (*) 自然木 45 (*) 自然木 52 自然木 57

広葉樹、散孔材。いずれの試料も直径約 $30 \mu m$ の管孔が単独、ないし 2～4 個複合して分布する。道管内壁にはラセン肥厚が見られる。道管は階段穿孔で、道管放射組織間壁孔は中型でやや橢円形のふるい状となる。放射組織は直立細胞と方形細胞からなる同性で 1～6 細胞列となる。放射組織には鞘細胞が見られる。

分布：北海道、本州、四国、九州、沖縄

樹形：林内に普通な常緑低木

用途：箸、杖 等

出土事例：自然木（非加工材）

ムラサキシキブ属 *Callicarpa* L.

（くまつづら科 Verbenaceae）

自然木 13 (*) 自然木 14 (*)

広葉樹、散孔材。直径約 $50 \mu m$ の管孔が 2～3 個、ときに 5 個、放射方向に複合する。道管は單穿孔である。放射組織は異性で 1～3 細胞列である。自然木 13 にはピスフレックが見える。

分布：北海道、本州、四国、九州、沖縄

樹形：落葉低木

用途：木釘 等

出土事例：木釘、刀子柄、土木材（杭材）、自然木（非加工材） 等

ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana* Hara

（すいかづら科 Caprifoliaceae）

自然木 7-2 (*) 自然木 9-1 (*) 自然木 9-2 (*)

広葉樹、散孔材。直径 $50 \sim 70 \mu m$ の管孔が 2～10 個、放射状、斜線状、団塊状に不規則に複合する。年輪の内境に沿って道管の分布数、直径はやや大きく、環孔材的傾向がある。道管は單穿孔。放射組織は異性で 1～5 細胞列であり、多くに鞘細胞が見られる。

分布：本州、四国、九州

樹形：山野に普通な落葉低木

用途：寄木、木象嵌 等

出土事例：自然木（非加工材）

広葉樹

自然木 2	自然木 5	自然木 6	自然木 7-1	自然木 20
自然木 21	自然木 23	自然木 35-3	自然木 46	自然木 47
自然木 49	自然木 50	自然木 51	自然木 53	自然木 54
自然木 55	自然木 56			

これらはいずれも劣化の程度が著しく、同定は困難であった。自然木 20 は散孔材、自然木 23、51、55 は環孔材である。

同定不可

自然木 3	自然木 15	自然木 16	自然木 40
-------	--------	--------	--------

4. 考察

樹種同定の結果、針葉樹材 1 種、広葉樹材 10 種（科は除く）を確認した。以下に、主な樹種と出土事例との比較を行ない、中垣内遺跡より出土した木製品および自然木の樹種同定結果について考察する。

No.1 高杯の用材であるクワ属は、建築部材（柱材、梯子）、土木材（杭）等に用いられ、利用頻度の高い有用材である。特に容器の用材としては多くの事例が確認されており、恩智遺跡（弥生時代中期）では未製品を含む 11 点の高杯片が出土し、これらはすべてヤマグワ^{*}であることが報告されている。また山賀遺跡（弥生時代前期）でもヤマグワ（クワ属）を用いた高杯 4 点が確認されている。このように、容器の用材としてクワ属を用いる事例は多く見られ、本遺跡より出土した高杯もこうした傾向に符合する結果である。

自然木（非加工材）では、サンプリングを行なった 63 点中に劣化が著しく樹種の識別が困難であった試料が 21 点含まれていた。これらを除く 42 点中最も数が多い樹種はエノキである。エノキは建築部材や容器（剣物）等の用材としても利用されることが多い。また鬼虎川遺跡（弥生時代中期）では杭材が、瓜生堂遺跡（弥生時代後期～庄内期）では杭材や柱材のほかに自然木が、宮ノ下遺跡（弥生時代）では自然木がそれぞれ出土している。次にアオキは瓜生堂遺跡では杭材および自然木が確認されているほか、コクサギやニワトコ等も杭材や自然木としての出土が散見される。これらは製品としての利用事例が少ない樹種である。モチノキ属は瓜生堂遺跡で杭材や板材と自然木が確認されている。唯一の針葉樹材であったカヤは建築部材や弓、容器の用材としての出土事例が多く、古代には仏像の

材としても用いられたことが知られている。鬼虎川遺跡や瓜生堂遺跡、宮の下遺跡では杭材や建築部材、自然木の樹種としても確認されており、中垣内遺跡周辺にもカヤが植生していたと考えられる。

以上より、今回の樹種同定によって得られた自然木の樹種は、いずれもこれまでに河内平野の複数の遺跡において確認されているという結果を得た。特に瓜生堂遺跡では杭材や板材など、加工の度合いが少ない樹種と自然木の樹種とがともに確認されている傾向にあり、遺跡周辺の植生が反映された結果と考えられる。今回のように出土自然木について樹種同定が行なわれる機会は少なく、今後こうした調査結果が積み重ねられることにより、木製品の用材と植生との関連について検討するうえで有効な資料となると考える。

※ クワ属にはヤマグワ、カラヤマグワ、ログワ等が含まれる。これらを木材組織の顕微鏡観察のみで識別することは困難な場合もあるため、本稿ではクワ属として記載した。

参考文献

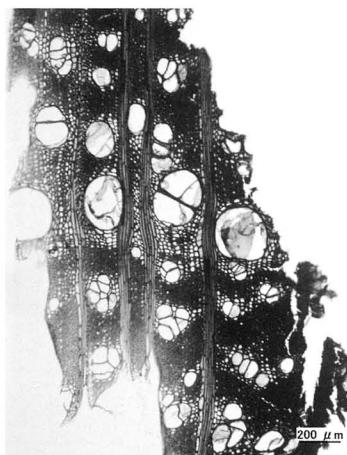
- 北村四郎・村田源 『原色日本植物図鑑・木本編』 II 1979年
島地謙・伊東隆夫 『図説木材組織』 1982年
島地謙・伊東隆夫 『日本の遺跡出土木製品総覧』 1988年
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載」 IV 『木材研究・資料』 第34号別刷 京都大学木質科学研究所 1998年
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載」 V 『木材研究・資料』 第35号別刷 京都大学木質科学研究所 1999年
『恩智遺跡』 一級河川恩智川改修工事に伴う恩智遺跡発掘調査報告書 瓜生堂遺跡調査会 1980年
松田隆嗣 「IV 山賀（その3）遺跡より出土した木製遺物の樹種について」『山賀（その3）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 1979年
中原計・秋山浩三 「樹種からみた集落環境と弥生木器生産－瓜生堂99・01調査区における木製品・自然木の同定検討から－」『瓜生堂遺跡1- 考察・分析・写真図版編-』（財）大阪府文化財センター調査報告書題106集 2004年
林昭三・島地謙・植田弥生 「IV. 出土木製品の樹種（第4次・5次）」『鬼虎川遺跡調査概要 I』
遺物編 木製品（財）東大阪市文化財協会 1988年
パリノ・サーヴェイ株式会社 「6 出土木製品の樹種」『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書』
第1分冊 東大阪市教育委員会・（財）東大阪市文化財協会 1996年

試料No・遺物名	樹種	備考
No.1 高杯	クワ属	*
No.2 鍬	アカガシ亜属	*
自然木2	広葉樹	
自然木3	同定不可	
自然木4	ぶな科	
自然木5	広葉樹	
自然木6	広葉樹	
自然木7-1	広葉樹	
自然木7-2	ニワトコ	*
自然木8	カヤ	*
自然木9-1	ニワトコ	*
自然木9-2	ニワトコ	*
自然木10	シイ属	*
自然木11	アカガシ亜属	*
自然木12	ウルシ属	*
自然木13	ムラサキシキブ属	*
自然木14	ムラサキシキブ属	*
自然木15	同定不可	
自然木16	同定不可	
自然木17	コクサギ	*
自然木18	エノキ	*
自然木19	アオキ	*
自然木20	広葉樹	
自然木21	広葉樹(散孔材)	
自然木22	エノキ	
自然木23	広葉樹(環孔材)	
自然木24	エノキ	
自然木25	ウルシ属	*
自然木26	エノキ	
自然木27	エノキ	*
自然木28	エノキ	*
自然木29	コクサギ	*
自然木30	エノキ	*

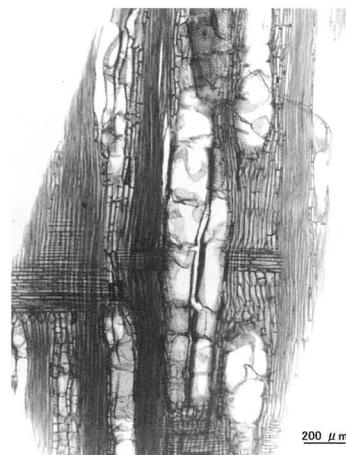
試料No・遺物名	樹種	備考
自然木31	コクサギ	*
自然木32	コクサギ	*
自然木33	アカガシ亜属	
自然木34	アカガシ亜属	*
自然木35-1	エノキ	
自然木35-2	エノキ	
自然木35-3	広葉樹	
自然木36	エノキ	
自然木37	エノキ	
自然木38	エノキ	*
自然木39	エノキ	
自然木40	同定不可	
自然木41	モチノキ属	*
自然木42	エノキ	
自然木43	エノキ	
自然木44	エノキ	
自然木45	アオキ	*
自然木46	広葉樹	
自然木47	広葉樹	
自然木48	エノキ	
自然木49	広葉樹	
自然木50	広葉樹	
自然木51	広葉樹(環孔材)	
自然木52	アオキ	
自然木53	広葉樹	
自然木54	広葉樹	
自然木55	広葉樹	
自然木56	広葉樹(環孔材)	
自然木57	アオキ	
自然木58	エノキ	
自然木59	エノキ	
自然木60	エノキ	

*印は顕微鏡写真を掲載した試料を示す

No1 高杯



木口面



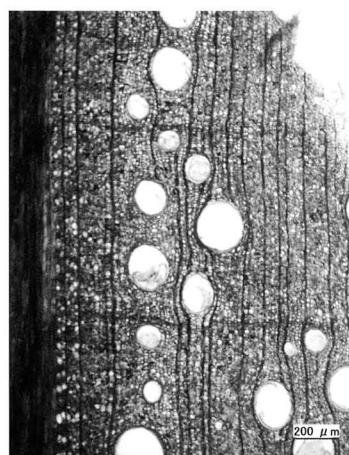
柾目面



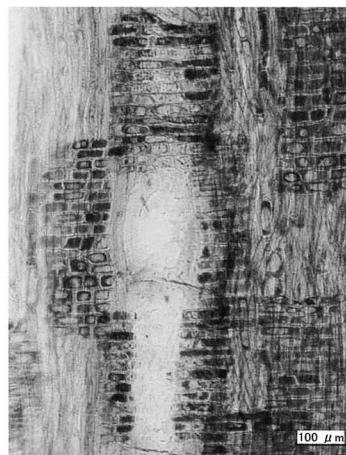
板目面

クワ属 *Morus* L.

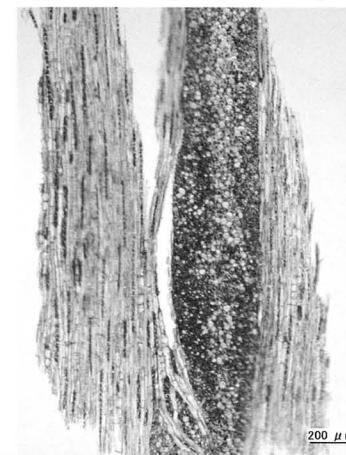
No2 錆



木口面



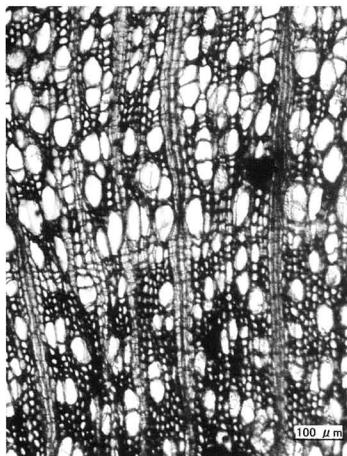
柾目面



板目面

アカガシ亜属 *Quercus* L. Subgen. *Cyclobalanopsis* Oerst.

自然木7-2



木口面



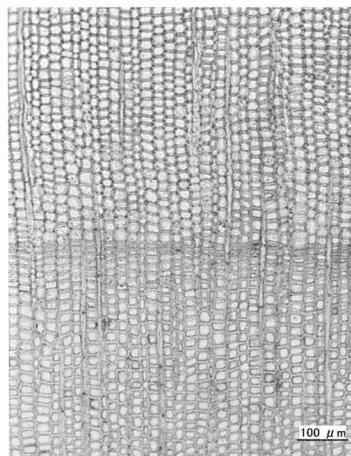
柾目面



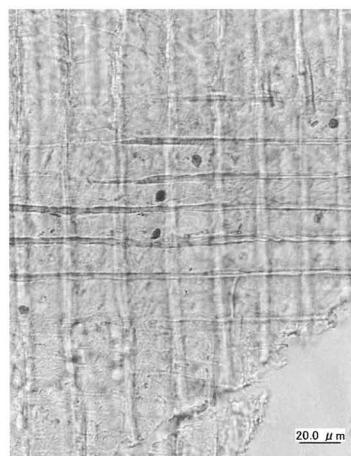
板目面

ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana* Hara

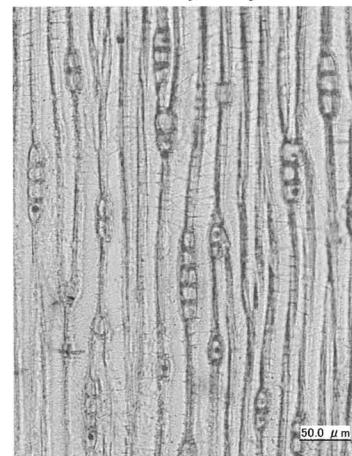
自然木 8



木口面



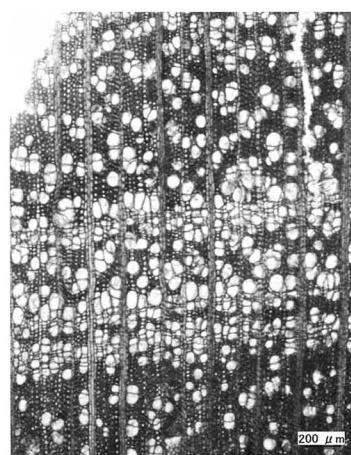
柾目面



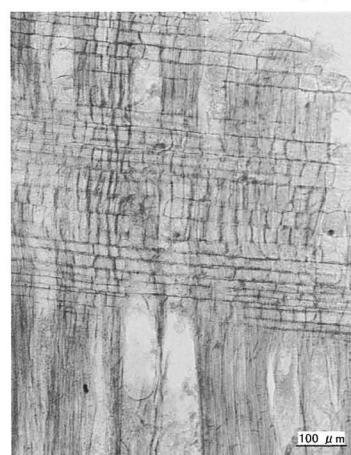
板目面

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.

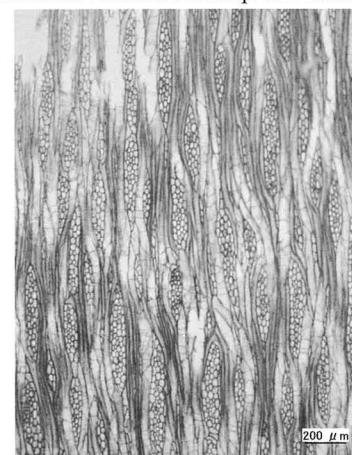
自然木 9-1



木口面



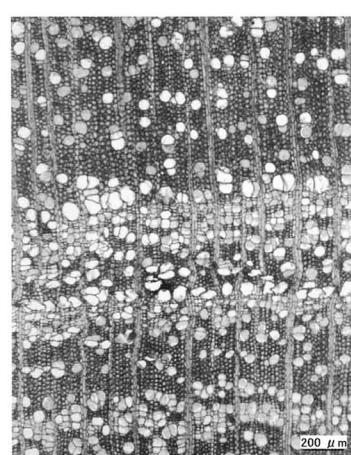
柾目面



板目面

ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana* Hara

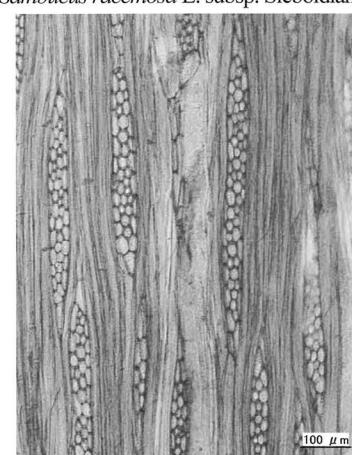
自然木 9-2



木口面



柾目面

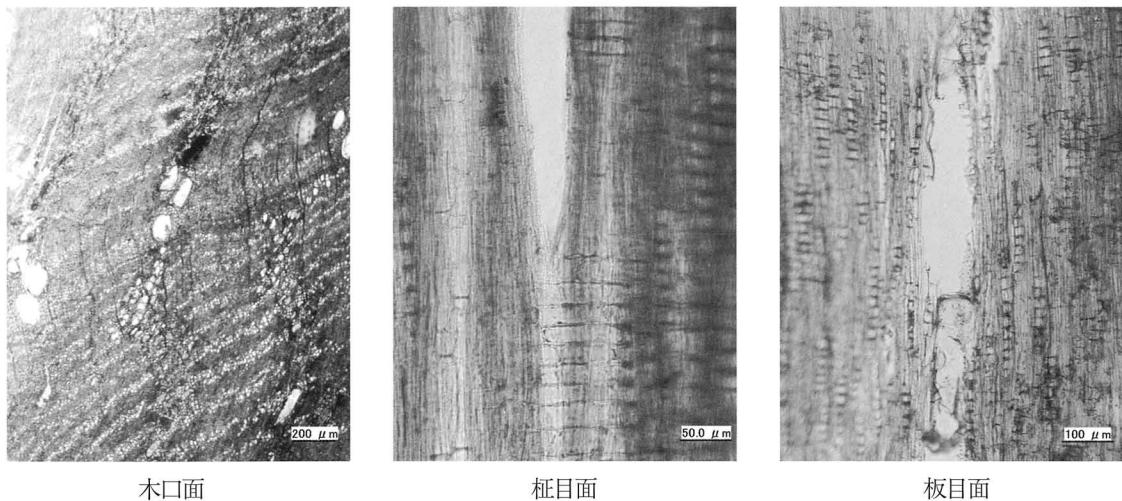


板目面

ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana* Hara

自然木 10

シイ属 *Castanopsis* Spach



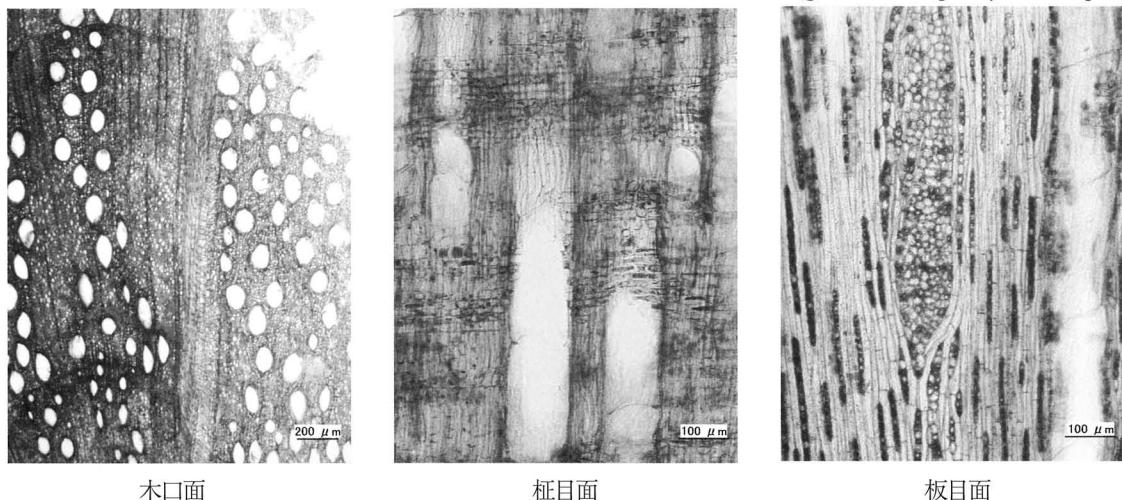
木口面

柾目面

板目面

自然木 11

アカガシ亜属 *Quercus* L. Subgen. *Cyclobalanopsis* Oerst.



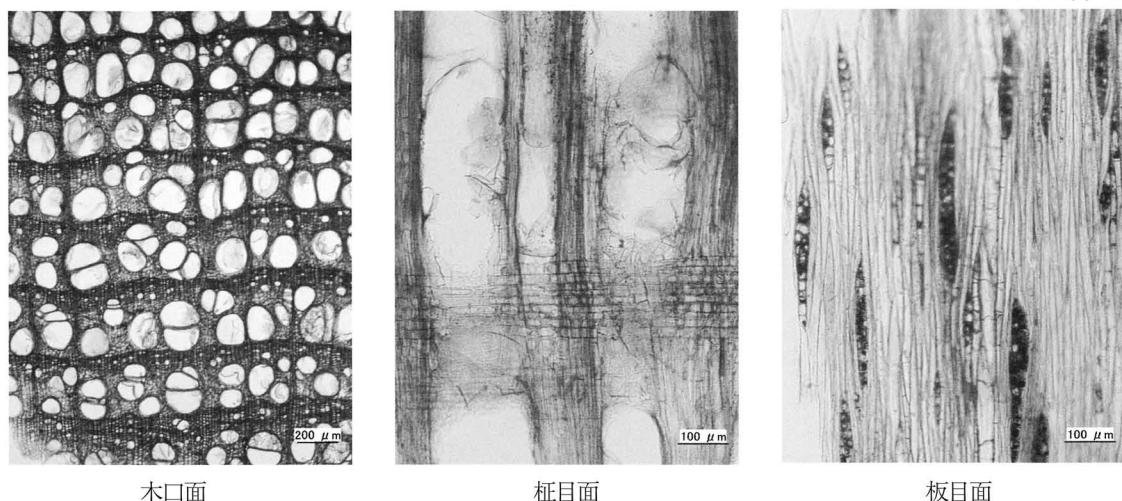
木口面

柾目面

板目面

自然木 12

ウルシ属 *Rhus* L.



木口面

柾目面

板目面

自然木 13

ムラサキシキブ属 *Callicarpa* L.



木口面



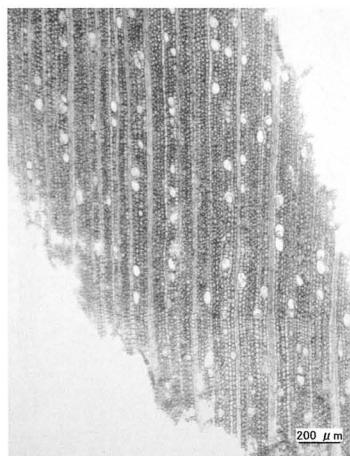
柾目面



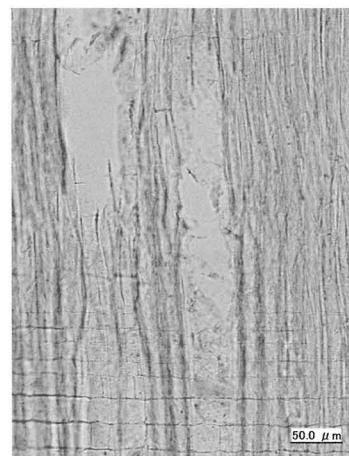
板目面

自然木 14

ムラサキシキブ属 *Callicarpa* L.



木口面



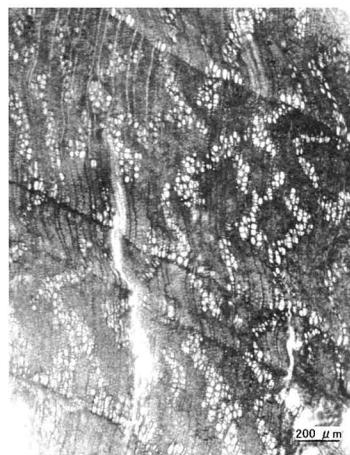
柾目面



板目面

自然木 17

コクサギ *Orixa japonica* Thunberg



木口面



柾目面

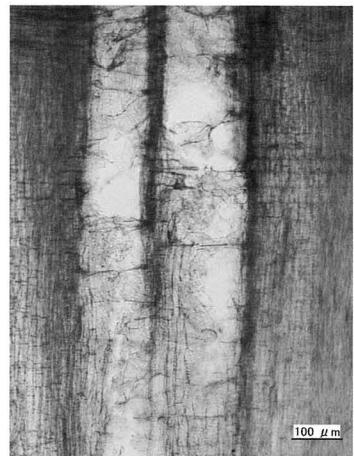


板目面

自然木 18



木口面



柾目面



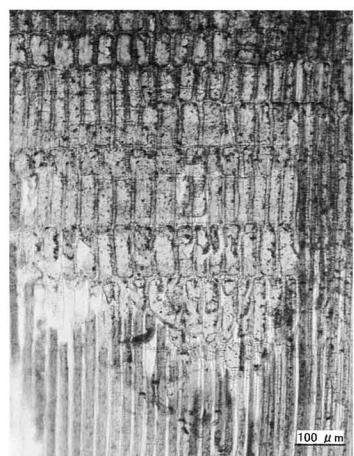
板目面

エノキ *Celtis sinensis* Persoon

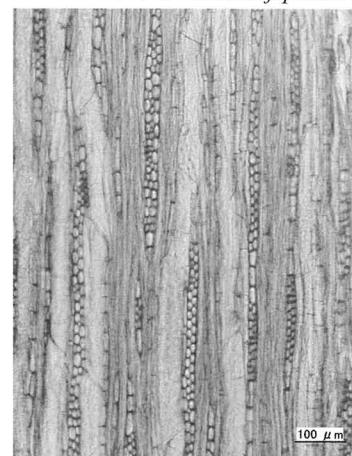
自然木 19



木口面



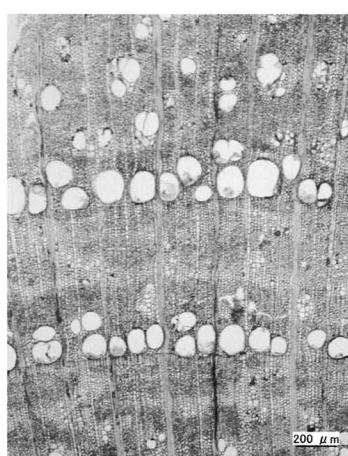
柾目面



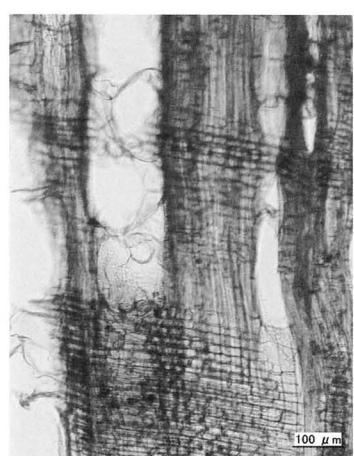
板目面

アオキ *Aucuba japonica* Thunb.

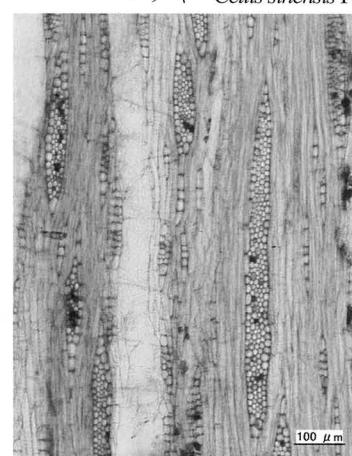
自然木 22



木口面



柾目面

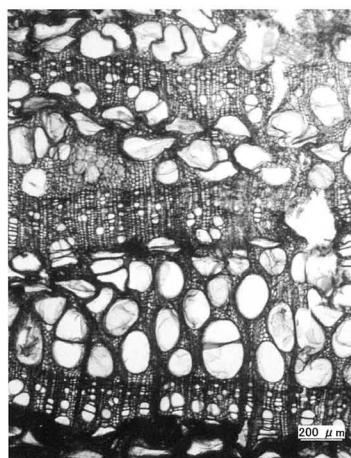


板目面

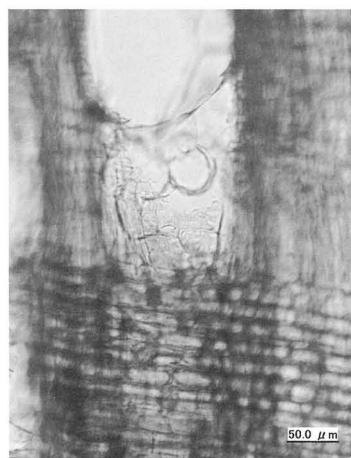
エノキ *Celtis sinensis* Persoon

自然木 25

ウルシ属 *Rhus L.*



木口面



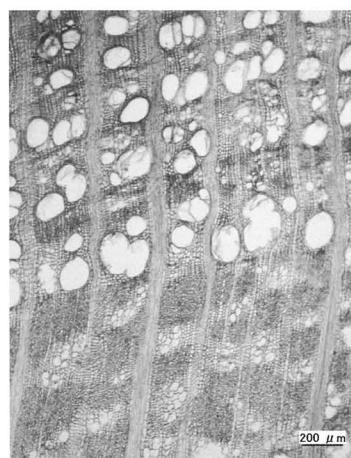
柾目面



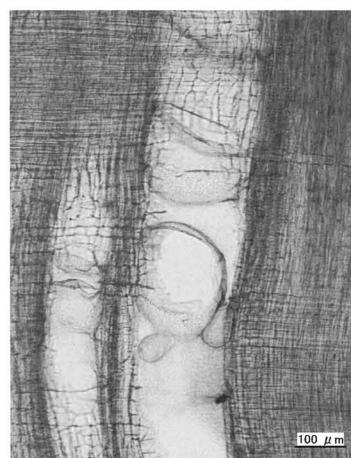
板目面

自然木 27

エノキ *Celtis sinensis* Persoon



木口面



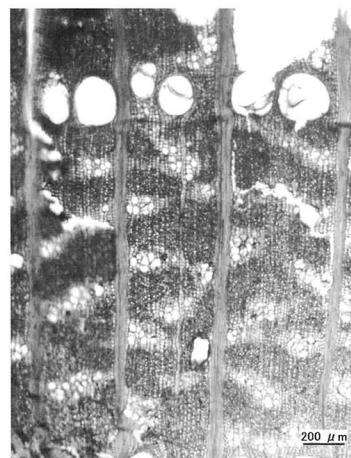
柾目面



板目面

自然木 28

エノキ *Celtis sinensis* Persoon



木口面



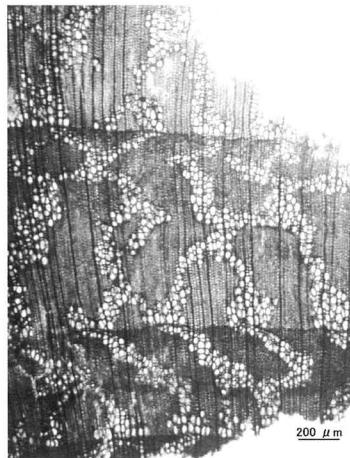
柾目面



板目面

自然木 29

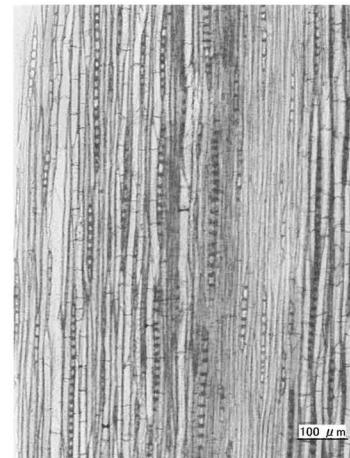
コクサギ *Orixia japonica* Thunberg



木口面



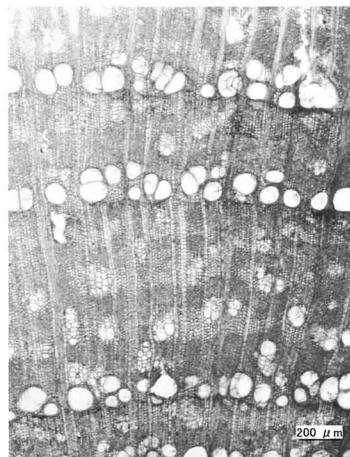
柾目面



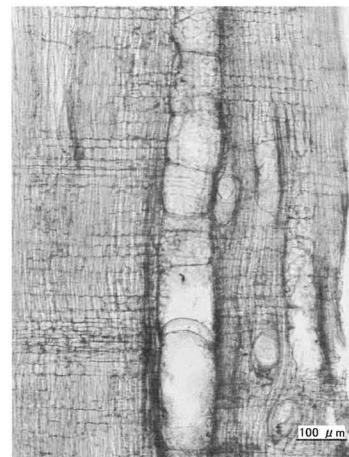
板目面

自然木 30

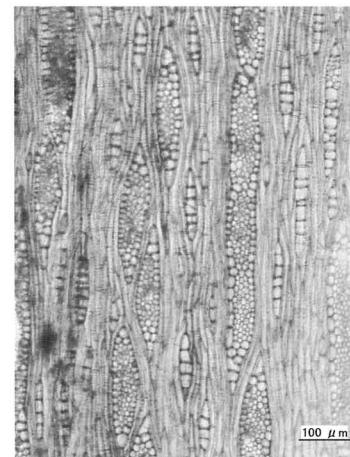
エノキ *Celtis sinensis* Persoon



木口面



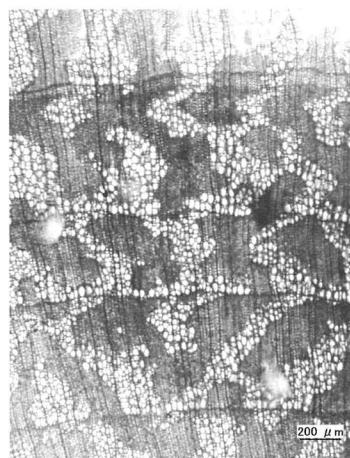
柾目面



板目面

自然木 31

コクサギ *Orixia japonica* Thunberg



木口面



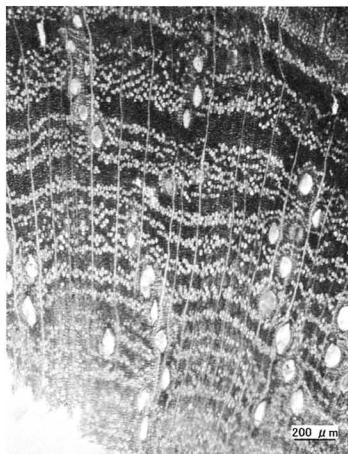
柾目面



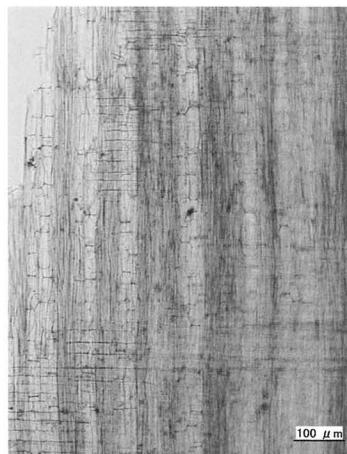
板目面

自然木 34

アカガシ亜属 *Quercus* L. Subgen. *Cyclobalanopsis* Oerst.



木口面



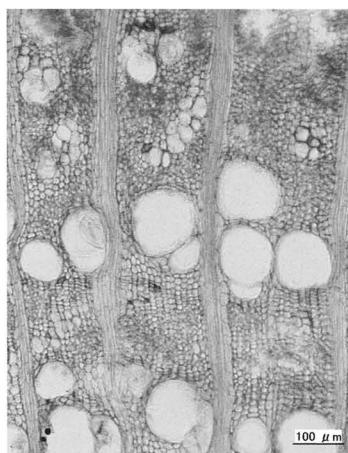
柾目面



板目面

自然木 38

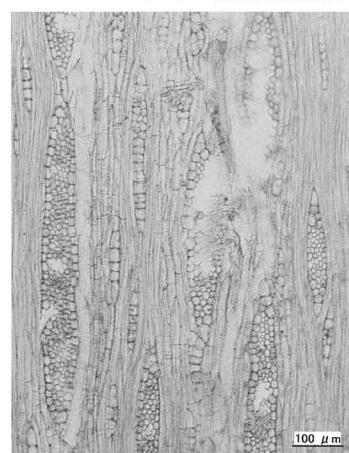
エノキ *Celtis sinensis* Persoon



木口面



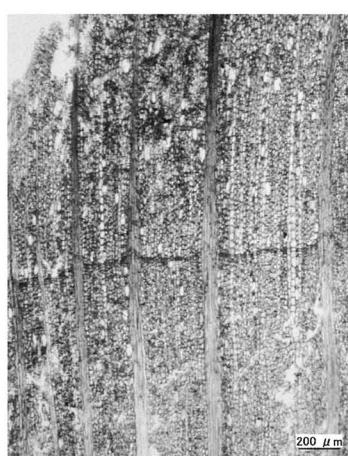
柾目面



板目面

自然木 41

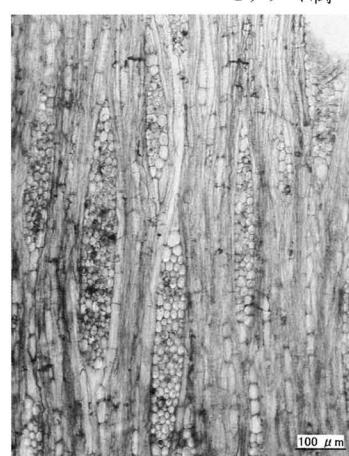
モチノキ属 *Ilex* L.



木口面



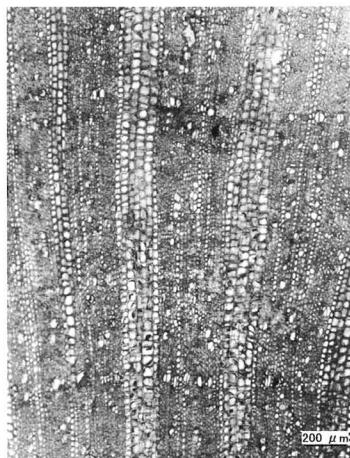
柾目面



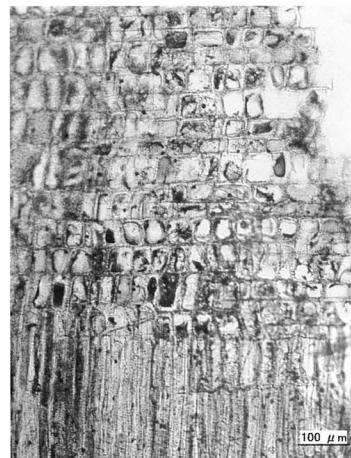
板目面

自然木 45

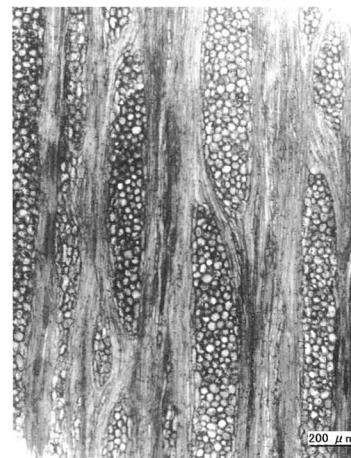
アオキ *Aucuba japonica* Thunb.



木口面



柾目面



板目面

出土遺物一覽表

擇図 番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
1	土師器皿	範囲確認調査出土遺物	器高(残) 1.1	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	良	密 クサリ礫を含む	外面ナデ 内面ナデ	
2	弥生土器壺	範囲確認調査出土遺物	口径(残) 19.2 器高(残) 5	外:にぶい赤褐 内:にぶい褐 断:明赤褐	不良	密 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面ヨコナデ。ユビオサエ後ハケ 内面ヨコナデ。磨滅	
3	弥生土器壺	範囲確認調査出土遺物	器高(残) 4.5	外:黒褐 内:褐 断:褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ハケ後7条一単位の櫛描直線文 内面ナデ	
4	弥生土器壺	範囲確認調査出土遺物	器高(残) 3.1	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄橙 断:灰黄褐	良	やや粗 長石、石英、雲母を多く含む	外面櫛描による直線文など 内面磨滅	
5	弥生土器甕	範囲確認調査出土遺物	器高(残) 4.9	外:灰褐 内:黒褐 断:灰褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面口縁部キザミ目。綫方向のハケ後ハラ描沈線(7条以上)。口縁付近、ユビオサエ後ナデ消し 内面ハケ	
6	弥生土器甕	範囲確認調査出土遺物	器高(残) 5.6	外:黒 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面口縁部キザミ目。4条のヘラ 描き沈線。ナデ。煤付着 内面板ナデ。ナデ	
7	弥生土器甕	範囲確認調査出土遺物	器高(残) 8.1	外:灰黄褐 内:暗灰黄 断:黄灰	良	やや粗 長石、石英、雲母を多く含む	外面口縁部キザミ目。4条の櫛描 沈線。ヨコナデ。板ナデ。煤付着 内面ヨコナデ。板ナデ	
8	弥生土器瓶	範囲確認調査出土遺物	底径 器高(残) 6.4 3.7	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:褐灰	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ユビオサエ後ナデ。ナデ 内面ユビオサエ後ナデ	焼成後穿孔
9	弥生土器転用土製円板	範囲確認調査出土遺物	長幅 厚重 5 4.8 0.8 23.7	外:灰黄 内:灰黄 断:灰黄	良	やや粗 長石、石英を多く含む	外面磨滅 内面ナデ	打ち欠き
10	弥生土器転用土製円板	範囲確認調査出土遺物	長幅 厚重 6.6 5.2 0.8 36.8	外:にぶい褐 内:黒褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ 内面ナデ。煤付着	打ち欠き
11	石器 石鎚	SD-701	長幅 厚重 6.4 2.5 0.6 7.7			サヌカイト		剥離は押圧によるもの。 腹面左側に微細剥離痕
12	石器 磨製石包丁	SD-701	長幅 厚重 13 4 0.6 56.2			綠泥片岩		
13	磁器(染付) 装飾品?	基本層序 第I層	長幅(残) 厚重 4.5 1.9 0.7 10.5	外: 内: 断:灰白	良	密		染付により鬼(?)の意匠
14	弥生土器壺	基本層序 第VI層	器高(残) 1.2	外:灰オーリープ 内:黄褐 断:黑	良	密 長石、石英、角閃石を含む	外面口縁部に廉状文。ナデ 内面円形浮文	
15	石器 磨製石包丁	基本層序 第VI層	長幅 厚重 3.8 4.5 0.6 9.5			不明		表裏とも層状に剥離。表面の一部に煤付着
16	錢貨	基本層序 第III層	長幅 厚 2.5 2.5 0.1	外: 内: 断:				宋錢。元豐通寶。 初鑄 1078年
17	弥生土器転用土製円板	基本層序 第VI層	長幅 厚重 3.9 3.7 0.9 15.6	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、クサリ礫を含む	外面ナデ 内面ユビオサエ。ナデ	打ち欠き
18	弥生土器壺	基本層序 第VII層	器高(残) 3.3	外:暗灰黄 内:にぶい黄 断:にぶい黄	良	密 長石、石英、角閃石を含む	外面ミガキ 内面ミガキ	
19	弥生土器壺	基本層序 第VII層	器高(残) 4.3	外:黒 内:にぶい褐 断:にぶい橙	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ。煤付着 内面板ナデ	
20	弥生土器壺	基本層序 第VII層	器高(残) 5.3	外:にぶい黄橙 内:灰黄 断:灰黄	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面ナデ後割付線。その上に突帶 を貼り付け、キザミ目をつけて いる 内面ナデ	
21	弥生土器壺	基本層序 第VII層	器高(残) 3.6	外:黒 内:暗灰黄 断:暗灰黄	良	やや粗 長石、石英を含む	外面ヨコナデの上からキザミ目突 帶を貼り付けている。煤付着 内面ユビオサエ後ナデ	
22	弥生土器壺	基本層序 第VII層	器高(残) 3.4	外:にぶい黄褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	粗 長石、石英、雲母、角閃石を含む	外面ナデ後櫛描後ミガキ。櫛描間 をミガキ調整している。黒斑 内面ユビオサエ後板ナデ	

插図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
23	弥生土器 甕	基本層序 第Ⅶ層	口径(推) 器高(残) 3.9	外:にぶい黄橙 内:にぶい橙 断:にぶい黄橙	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 雲母を多く含む	外面口縁部にキザミ目。1条の沈線。ユビオサ工後ヨコナデ 内面ユビオサ工後ナデ	
24	弥生土器 甕	基本層序 第Ⅶ層	器高(残) 2.4	外:にぶい橙 内:にぶい黄橙 断:灰黄	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫を 含む	外面ハケ目。口縁部にキザミ目 内面ハケ目	No.063と同一個体か?
25	弥生土器 甕	基本層序 第Ⅷ層	器高(残) 5.7	外:にぶい赤褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面板ナデ。取手がつく 内面板ナデ	
26	弥生土器 転用 土製円板	基本層序 第Ⅶ層	長幅 厚重 5.6 4.5 1 26.7	外:褐 内:黄褐 断:灰黄	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 角閃石、雲母を含む	外面磨滅 内面磨滅	打ち欠き
27	石器 スクレイパー	基本層序 第Ⅶ層	長(残) 幅 厚重 3.7 5.8 1 18.6			サヌカイト		背面左側に自然面を持つ。 腹面側に使用痕
28	弥生土器 蓋	基本層序 第Ⅷ層	器高(残) 2.5	外:灰黄褐 内:黄灰 断:黄灰	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ 内面ヨコナデ。煤付着	
29	弥生土器 甕	基本層序 第Ⅷ層	器高(残) 2.9	外:にぶい褐 内:にぶい黄 断:灰	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 角閃石、雲母を含む	外面磨滅。底部はナデ 内面ユビオサ工	底部に焼成後穿孔
30	弥生土器 壺	基本層序 第Ⅸ層	底径 器高(残) 9.7 8	外:にぶい橙 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面ハケ後ナデ。底部ユビオサ工 内面ユビオサ工後ナデ	
31	弥生土器 転用 土製円板	基本層序 第Ⅸ層	長幅 厚重 5.8 6.1 1 34.9	外:にぶい黄 内:にぶい黄 断:灰黄	良	密 長石、石英、クサリ礫、 角閃石、雲母を含む	外面10条の沈線。ミガキ 内面ユビオサ工後ナデ	打ち欠き
32	石器 スクレイパー	基本層序 第Ⅹ層	長幅 厚重 4.1 5.8 1 20.8			サヌカイト		
33	石器 剥片	基本層序 第Ⅹ層	長幅 厚重 7 9.2 0.9 120.8			サヌカイト		
34	弥生土器 壺	側溝	口径(推) 器高(残) 8.2 7	外:オリーブ黒 内:黒 断:褐灰	良	密 長石、石英、クサリ礫を 含む	外面ヨコナデ。ナデ後7条一単位・ 8条一単位の櫛描直線文。黒斑 内面ヨコナデ。ユビオサ工後ナデ。 黒斑	
35	弥生土器 甕	側溝	口径(推) 器高(残) 19.4 10.4	外:黒褐 内:暗褐 断:褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面ユビオサ工後ヨコナデ。ミガ キ。煤付着 内面ユビオサ工後ナデ	二次焼成
36	弥生土器 甕	側溝	器高(残) 7.8	外:にぶい黄褐 内:暗褐 断:黑褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面ヨコナデ。ハケ。煤付着 内面ヨコナデ。ハケ。煤付着	
37	弥生土器 甕	側溝	底径 器高(残) 5.5 4.5	外:灰黄褐 内:暗褐 断:灰	良	やや粗 長石、石英、雲母を含む	外面ミガキ。ナデ。工具痕。黒斑 内面ユビオサ工後ナデ	二次焼成
38	弥生土器 甕	側溝	底径 器高(残) 9.6 6.1	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙 断:褐灰	良	密 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面ユビオサ工後ナデ。ユビオサ 工 内面ユビオサ工後ナデ	
39	弥生土器 転用 土製円板	側溝	長幅 厚重 6.7 6.6 1.1 60.5	外:黄褐 内:黄褐 断:黄褐	良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲 母を多く含む	外面ナデ 内面磨滅	打ち欠き
40	弥生土器 転用 土製円板	側溝	長幅 厚重 7.4 6.7 1 43.6	外:暗灰黄 内:黄灰 断:黄灰	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ 内面ナデ	打ち欠き
41	石器 石鏃未製品	側溝	長幅 厚重 4.1 2.5 0.6 7.4			サヌカイト		
42	石器 石槍	側溝	長幅 厚重 12.2 4.4 1 61.5			サヌカイト		尖頭部片面に使用痕。両 側の刃部に微細剥離痕
43	弥生土器 壺	S D -601	器高(残) 1.9	外:にぶい黄橙 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 角閃石、雲母を含む	外面不明 内面不明	口縁部にキザミ目
44	弥生土器 壺	S D -601	器高(残) 2.7	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面口縁部に1条のヘラ描き沈線 後キザミ目。ユビオサ工後ナデ 内面ナデ	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
45	弥生土器壺(無頸壺)	S D-601	器高(残) 2.5	外:灰黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密長石、石英、クサリ礫を含む	外面施文 内面ユビオサエ。ナデ	口縁部は内外面ともヨコナデ
46	弥生土器壺	S D-601	器高(残) 5	外:にぶい黄褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	粗長石、石英、クサリ礫、雲母を含む	外面櫛描流水文 内面板ナデ。磨滅	
47	弥生土器壺	S D-601	器高(残) 2.8	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:灰黄褐	良	やや粗長石、石英、角閃石、雲母を多く含む	外面口縁部にキザミ目。ユビオサエ後強いヨコナデ 内面ヨコナデ	
48	弥生土器甕	S D-601	器高(残) 4.1	外:黄褐 内:にぶい褐 断:黄褐	良	粗長石、石英を含む	外面ハケ目。ヨコナデ。縦方向の粗いヘラミガキ 内面磨滅	
49	弥生土器高杯o r鉢	S D-601	器高(残) 4.3	外:灰黄褐 内:にぶい黄褐 断:灰	良	密長石、石英、クサリ礫、雲母を含む	外面ナデ 内面ナデ	
50	弥生土器高杯o r鉢	S D-601	器高(残) 6.3	外:にぶい黄橙 内:明赤褐 断:橙	不良	やや粗長石、石英、クサリ礫、雲母を含む	外面1条の沈線。ハケ目。煤付着 内面不明	二次焼成
51	弥生土器甕蓋	S D-601	器高(残) 7.9	外:黄褐 内:浅黄 断:浅黄	良	密長石、石英を含む	外面ユビオサエ後ナデ 内面ユビオサエ。板ナデ。ナデ。 煤付着	
52	弥生土器壺	S D-601	底径(推) 器高(残) 8.1 4.2	外:暗灰黄 内:黄褐 断:暗灰黄	良	密長石、石英、角閃石を含む	外面タタキ後板ナデ。底部はナデ 内面ユビオサエ後ナデ	
53	弥生土器壺	S D-601	底径(推) 器高(残) 9.2 5.5	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	やや粗長石、石英、角閃石、雲母を多く含む	外面板ナデ 内面磨滅	
54	弥生土器甕	S D-601	底径(推) 器高(残) 9 3.2	外:にぶい黄橙 内:灰黄褐 断:褐灰	良	やや粗長石、石英、雲母を多く含む	外面ユビオサエ後縦方向の板ナデ 内面ユビオサエ後ナデ	粘土の継ぎ目がある
55	弥生土器底部	S D-601	底径(推) 器高(残) 6.6 3	外:褐 内:明褐 断:明褐	良	粗長石、石英、クサリ礫、雲母を含む	外面ユビオサエ後ナデ。底部はオサエ 内面磨滅	
56	弥生土器壺	S D-601	底径(推) 器高(残) 6.2 2.7	外:にぶい黄褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	密長石、石英、雲母を含む	外面ナデ。底部はユビオサエ後ナデ後ヘラミガキ 内面ユビオサエ	円板に転用するため縁を打ち欠いた可能性がある
57	弥生土器壺	S D-601	底径(推) 器高(残) 6.6 1.8	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	粗長石、石英、雲母を含む	外面ナデ 内面ナデ	
58	弥生土器壺	S K-602	器高(残) 1.8	外:にぶい黄橙 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	粗長石、石英、雲母を含む	外面5条の沈線(現存) 内面磨滅	
59	弥生土器壺	S K-603	器高(残) 3.1	外:にぶい黄褐 内:灰黄 断:にぶい黄橙	不良	やや粗長石、石英、雲母を多く含む	外面ナデ 内面ナデ	全体的に劣化が激しい
60	弥生土器壺	S K-603	器高(残) 2	外:にぶい黄褐 内:暗褐 断:にぶい黄褐	不良	粗長石、石英、クサリ礫を含む	外面口縁部に2条の凹線あり。ナデ 内面ナデ	二次焼成。穿孔あり
61	弥生土器壺(無頸壺)	S K-602	器高(残) 2.3	外:暗灰黄 内:にぶい黄 断:にぶい黄	良	やや粗長石、石英を含む	外面ナデ 内面ナデ	
62	弥生土器甕	S K-604	器高(残) 2.2	外:灰黄褐 内:灰黄 断:黄灰	良	やや粗長石、石英を含む	外面ユビオサエ。ナデ 内面ユビオサエ。ナデ	
63	弥生土器甕	S K-604	器高(残) 4.4	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:にぶい黄橙	不良	やや粗長石、石英、クサリ礫を含む	外面ハケ目。黒斑 内面不明	
64	弥生土器甕	S K-605	器高(残) 3.5	外:黒褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	不良	粗長石、石英、クサリ礫、角閃石を含む	外面ヨコナデ 内面磨滅	
65	弥生土器壺	S K-605	器高(残) 5.5	外:褐灰 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	やや粗長石、石英、クサリ礫を含む	外面縦方向のハケ後6条一単位の 櫛描直線文 内面ユビオサエ後ナデ。黒斑	
66	弥生土器甕	S K-605	器高(残) 4	外:暗褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	やや粗長石、石英、角閃石を含む	外面不明。底部にユビオサエ 内面ユビオサエ	

插図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
67	弥生土器 甕	S K-605	底径 器高(残) 8.6	外:にぶい黄 内:暗灰黄 断:暗灰黄	良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲 母を多く含む	外面ハケ目。オサエ痕あり。黒斑 内面板ナデ	
68	弥生土器 甕	S K-605	底径 器高(残) 7.6	外:灰黄褐 内:にぶい黄橙 断:灰黄褐	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 角閃石、雲母を多く含む	外面ユビオサエ。ナデ 内面板ナデ	焼成後穿孔
69	弥生土器 甕	S K-605	底径 器高(残) 8.3 5.6	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:暗灰黄	良	粗 長石、石英、クサリ礫、 角閃石、雲母を多く含む	外面ユビオサエ後ナデ 内面板ナデ	
70	弥生土器 甕	S K-605	底径 器高(残) 9.2 2.6	外:にぶい黄褐 内:にぶい褐 断:にぶい黄褐	良	粗 長石、石英、角閃石、雲 母を多く含む	外面ユビオサエ 内面板ナデ	
71	弥生土器 甕	S K-605	底径(推) 器高(残) 6.4 4.1	外:灰黄褐 内:にぶい黄褐 断:灰黄褐	良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲 母を多く含む	外面ナデ 内面板ナデ	
72	弥生土器 甕	S K-605	底径(推) 器高(残) 5.2 4.5	外:褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、角閃石を含 む	外面ユビオサエ 内面板ナデ	
73	弥生土器 転用 土製円板	S K-605	長 幅 厚 重 3.4 3.8 1 15.9	外:黄灰 内:黒褐 断:暗灰黄	良	密 長石、石英、クサリ礫を 含む	外面ナデ 内面板ナデ	打ち欠き
74	弥生土器 壺	S K-605	器高(残) 3.1	外:黒褐 内:褐 断:褐	良	密 長石、雲母を含む	外面ナデ 内面板ナデ	焼成後穿孔。転用土製品 の可能性あり
75	石器 支脚	S K-605	長 幅 厚 重 13.2 7.4 6.6 704.7			凝灰岩		
76	弥生土器 壺	S K-606	器高(残) 2.9	外:にぶい橙 内:にぶい橙 断:にぶい黄	不良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面口縁部キザミ目。ヨコナデ 内面磨滅	二次焼成。
77	弥生土器 壺	S K-606	器高(残) 2.3	外:浅黄 内:にぶい黄橙 断:灰黄褐	不良	粗 長石、石英、チャート、 クサリ礫を多く含む	外面磨滅。口縁部に1条の沈 線 内面磨滅	
78	弥生土器 壺	S K-606	器高(残) 3.9	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙 断:暗灰	良	粗 長石、石英、雲母を含む	外面口縁部廉状文。ナデ後頸部に 櫛描文 内面磨滅	
79	弥生土器 壺	S K-606	器高(残) 2.9	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	不良	やや粗 長石、石英、角閃石を含 む	外面磨滅。口縁部に1条の沈 線 内面磨滅	
80	弥生土器 壺	S K-606	器高(残) 2.2	外:暗褐 内:黒褐 断:黒褐	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 角閃石を多く含む	外面ナデ 内面磨滅	
81	弥生土器 鉢	S K-606	器高(残) 2	外:黄褐 内:にぶい黄褐 断:黒褐	良	密 長石、雲母を含む	外面ハケ。竹管文 内面板ナデ	
82	弥生土器 壺	S K-606	器高(残) 4.5	外:黒褐 内:黒褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、角閃石を多 く含む	外面廉状文 内面板ナデ	
83	弥生土器 甕	S K-606	器高(残) 7.3	外:灰黄 内:灰黄 断:明黄褐	良	やや粗 長石、石英、雲母を含む	外面5条の沈線。ハケ後ナデ 内面板ナデ	
84	弥生土器 甕	S K-606	器高(残) 5.7	外:暗褐 内:黄褐 断:黄褐	良	粗 長石、石英、雲母を含む	外面ヨコナデ。板ナデ。ハケ。 ミガキ。黒斑 内面ヨコナデ。ユビオサエ後板ナ デ	
85	弥生土器 把手付鉢	S K-606	器高(残) 5.2	外:にぶい褐 内:にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ナデ 内面板ナデ	
86	弥生土器 鉢	S K-606	器高(残) 4.6	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:灰黄褐	良	密 長石、石英を含む	外面口縁部キザミ目。線刻。ナデ。 ミガキ 内面ハケ	
87	弥生土器 蓋	S K-606	底径(推) 器高(残) 4.8 6	外:明赤褐 内:にぶい黄橙 断:褐灰	良	密 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面ユビオサエ後板ナデ 内面板ナデ	二次焼成
88	弥生土器 甕	S K-606	器高(残) 3.5	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫を 含む	外面ユビオサエ後ナデ 内面板ナデ	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
89	弥生土器壺	S K-606	底径(推)4.5 器高(残)1.7	外:にぶい赤褐 内:灰黄褐 断:にぶい黄橙	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ユビオサエ後ナデ。板ナデ 内面ユビオサエ後ナデ	
90	弥生土器壺	S K-606	底径(推)8.8 器高(残)2.3	外:明褐 内:にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	良	粗 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面板ナデ。ナデ。 内面ユビオサエ	
91	弥生土器壺	S X-601	器高(残)2.2	外:黄褐 内:暗灰黃 断:黑褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ナデ 内面ナデ	
92	石器 砥石	S K-606	長幅厚重 16 8.1 8.3 1540		0	砂岩		
93	土製品 投弾(?)	S X-601	長幅厚重 4.8 3 2.5 28.3	外:黄褐 内:- 断:-	良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面穴状のへこみがある。ナデ	
94	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)5.4	外:にぶい赤褐 内:灰黄褐 断:橙	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面ミガキ。削り出し突帯に竹管 文 内面ユビオサエ後ナデ	
95	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)8.8	外:浅黄 内:浅黄 断:浅黄	良	やや粗 長石、石英、角閃石、 チャートを含む	外面板ナデ。貼付突帯にキザミ目。 黒斑 内面 オサエ後ナデ	
96	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)4.3	外:灰黄褐 内:にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	良	粗 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面沈線上にキザミ目のある貼付 突帯が3条。板ナデ 内面板ナデ	
97	弥生土器壺	S D-701 第1層	口径(推)22.8 器高(残)7.6	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、チャート、 角閃石、雲母を多く含む	外面板ナデ。ハケ目 内面板ナデ。ユビオサエ	
98	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)3.4	外:オリーブ褐 内:黄褐 断:にぶい黄橙	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面強いヨコナデ。ユビオサエ 内面ナデ	
99	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)4.8	外:にぶい黄 内:灰黄褐 断:黄褐	良	やや粗 長石、石英、雲母を多く 含む	外面口縁部にヨコナデ後板状工具 にてキザミ目後沈線1条。ナデ 内面ナデ。ユビオサエ痕	
100	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)2.7	外:灰黄褐 内:黑 断:黑褐	良	密 長石、石英、クサリ礫、 角閃石、雲母を含む	外面廉状文。貼付浮文。文様間に ミガキあり 内面板ナデ黒斑	No.075と同一個体の可 能性が高い
101	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)5.2	外:にぶい黄橙 内:灰白 断:にぶい黄橙	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面波うち気味の直線文 内面ユビオサエ	
102	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)10	外:灰黄 内:暗灰黄 断:暗灰黄	良	密 長石、石英、クサリ礫を 含む	外面タテ左上がりの斜め方向のハ ケ後流水文 内面ユビオサエ後ナデ	
103	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)7.1	外:灰黄褐 内:黑 断:黑	良	密 長石、石英を含む	外面横描廉状文。文様間にミガキ 内面ユビオサエ後ナデ。黒斑	No.077と同一個体の可 能性が高い
104	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)6.1	外:灰黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石石英を含む	外面10条の沈線(現存)。キザミ 目。ヨコナデ。 内面ハケ目。ナデ	内外面煤付着
105	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)4	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	不良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面5条のヘラ描き沈線。ナデ後 ミガキ。煤付着 内面ユビオサエ後ナデ	
106	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)6.4	外:にぶい黄 内:にぶい黄 断:灰黄	良	やや粗 長石、石英、雲母を多く 含む	外面キザミ目。8条の沈線 内面ナデ	
107	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)7	外:にぶい褐 内:にぶい褐 断:にぶい褐	良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面ナデ。ハケ目。煤付着 内面磨滅	
108	弥生土器壺	S D-701 第1層	器高(残)6.4	外:暗灰黄 内:にぶい黄 断:浅黄	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 角閃石を含む	外面ユビオサエ後ヨコナデ。ヘラ 描沈線後ハケ 内面ヨコナデ。ユビオサエ後板ナ デ	
109	弥生土器壺(広口壺)	S D-701 第1層	器高(残)4.1	外:褐 内:褐 断:にぶい褐	良	密 長石、石英、角閃石を含 む	外面流水文 内面ナデ	
110	弥生土器 高杯 or 鉢	S D-701 第1層	口径(推) 器高(残)12.6 3.3	外:にぶい黄褐 内:にぶい褐 断:にぶい褐	良	密 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面ナデ。ヨコナデ 内面ナデ。ヨコナデ	

插図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
111	弥生土器 高杯 or 鉢	SD-701 第1層	器高(残) 3.2	外:灰黄褐 内:黄褐 断:褐灰	良	密 長石、石英、角閃石を含む	外面ナデ。板ナデ。煤付着 内面ナデ	
112	弥生土器 高杯 or 鉢	SD-701 第1層	器高(残) 3.6	外:黒褐 内:暗オリーブ 褐 断:暗オリーブ褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面板ナデ。ヨコナデ。黒斑 内面ヨコナデ	
113	弥生土器 壺	SD-701 第1層	器高(残) 4.8	外:にぶい橙 内:オリーブ黒 断:黄灰	不良	やや粗 長石、石英を含む	外面口縁部に波状文。ハケ目後波状文 内面ユビオサエ。黒斑	
114	弥生土器 鉢	SD-701 第1層	器高(残) 3.8	外:にぶい褐 内:にぶい黄橙 断:褐灰	良	やや粗 長石、石英、雲母を含む	外面ナデ。ミガキ 内面ナデ	
115	弥生土器 鉢	SD-701 第1層	器高(残) 3.1	外:褐灰 内:褐灰 断:にぶい赤褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ。黒斑 内面ヨコナデ	
116	弥生土器 不明	SD-701 第1層	底径(推) 器高(残) 5.4 2.5	外:明黄褐 内:にぶい黄 断:にぶい黄	良	やや粗 長石、石英、雲母を含む	外面ハケ目。底部に木葉痕あり 内面磨滅	
117	弥生土器 壺	SD-701 第1層	底径(推) 器高(残) 8.6 2.6	外:にぶい黄 内:明黄褐 断:暗灰黄	良	やや粗 長石、石英、チャートを多く含む	外面ユビオサエ後ナデ。底部木葉痕 内面不明	
118	弥生土器 高杯	SD-701 第1層	器高(残) 10	外:にぶい黄橙 内:- 断:黒	良	密 長石、石英、チャートを含む	外面ユビオサエ後ミガキ。ナデ 内面磨滅	
119	弥生土器 把手付鉢	SD-701 第1層	底径(推) 器高(残) 4 3.1	外:褐灰 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ユビオサエ。貼付把手。黒斑 内面ユビオサエ後板ナデ。黒斑	
120	弥生土器 蓋	SD-701 第1層	口径(推) 器高(残) 12 1.4	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面ユビオサエ後ナデ 内面ユビオサエ後ナデ	
121	弥生土器 転用 土製円板	SD-701 第1層	長幅 厚重 4.2 3.9 0.7 10.4	外:灰黄褐 内:にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	良	やや粗 長石、石英、雲母を含む	外面磨滅 内面磨滅	打ち欠き後、研磨
122	弥生土器 転用 土製円板	SD-701 第1層	長幅 厚重 3.6 3.4 0.8 10	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ナデ 内面ナデ	打ち欠き後研磨
123	弥生土器 転用 土製円板	SD-701 第1層	長幅 厚重 5.8 5.8 1.6 46.7	外:にぶい黄褐 内:黒 断:にぶい黄褐	不良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面ユビオサエ。放射状の工具痕あり。煤付着 内面ナデ?磨滅	高杯の充填部を円板に打ち欠く
124	弥生土器 転用 土製円板	SD-701 第1層	長幅 厚重 4.9 5.6 1.3 37.8	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄橙 断:灰黄褐	良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲母を多く含む	外面ナデ 内面板ナデ	端部は打ち欠き後研磨
125	石器 磨製石包丁	SD-701 第1層	長(残) 幅(残) 厚重 6.6 5.3 0.9 42.1			結晶片岩		
126	石器 石鎌	SD-701 第1層	長幅 厚重 3.2 1.5 0.5 1.6			サヌカイト		剥離は押圧によるもの。 両面素材面残さず調整
127	石器 微細剥離痕のある剥片	SD-701 第1層	長幅 厚重 8.5 3.4 1 21.7					縦長剥片を使用
128	石器 楔形石器	SD-701 第1層	長幅 厚重 4.1 6.1 1.1 53.9			サヌカイト		
129	弥生土器 壺	SD-701 第3層	器高(残) 4.8	外:黄褐 内:黄褐 断:オリーブ褐	良	密 長石、石英、角閃石を含む	外面流水文 内面ユビオサエ後ナデ	
130	弥生土器 壺	SD-701 第3層	器高(残) 5.1	外:暗灰黄 内:暗灰黄 断:暗灰黄	良	密 長石、石英、角閃石を含む	外面ナデ。流水文 内面ユビオサエ後ナデ	
131	弥生土器 壺	SD-701 第3層	器高(残) 8.7	外:にぶい黄褐 内:灰黄褐 断:黒	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面廉状文。ナデ。煤付着 内面ユビオサエ後ナデ	
132	弥生土器 甕	SD-701 第3層	器高(残) 6.5	外:黒褐 内:灰黄 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面口縁部にキザミ目。3条の沈線の下に板ナデ。煤付着 内面ナデ。2本の平行な工具痕	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
133	弥生土器 甕	SD-701 第3層	器高(残) 5.5	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙 断:黒褐	良	密 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面ユビオサエ。板ナデ 内面ユビオサエ後板ナデ	
134	弥生土器 甕(瀬戸内系)	SD-701 第3層	器高(残) 6.6	外:黄褐 内:黄褐 断:暗灰黄	良	密 長石、石英、角閃石、雲 母を多く含む	外面ユビオサエ後ヨコナデ。ハケ 目後幅広のヘラミガキ。煤付着 内面ユビオサエ後板ナデ	
135	弥生土器 壺	SD-701 第3層	底径 高(残) 8.5 3.8	外:暗褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、角閃石を多 く含む	外面ユビオサエ後ナデ。底部工具 痕。赤色顔料付着か? 内面ユビオサエ後板ナデ	
136	弥生土器 蓋	SD-701 第3層	器高(残) 1.5	外:灰黄褐 内:黒褐 断:黒褐	良	密 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面ユビオサエ後ミガキ 内面ユビオサエ。黒斑	
137	弥生土器 壺	SD-701 第2層	口径(推) 器高(残) 24.4 3	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙 断:灰白	不良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面磨滅 内面磨滅	
138	弥生土器 壺	SD-701 第2層	口径(推) 器高(残) 13 3.6	外:にぶい赤褐 内:にぶい赤褐 断:黒褐	不良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面1条の沈線(2条以上ある) 内面不明	穿孔1ヶ所。二次焼成
139	弥生土器 壺	SD-701 第2層	器高(残) 2.2	外:灰黄褐 内:暗灰黄 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、雲母を多く 含む	外面1条の沈線後、キザミ目。ミ ガキ 内面ミガキ	
140	弥生土器 壺	SD-701 第2層	器高(残) 7.2	外:灰黄褐 内:褐灰 断:灰黄褐	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 雲母を多く含む	外面板ナデ。1条の沈線。黒斑 内面強い板ナデ	
141	弥生土器 壺(広口壺)	SD-701 第2層	器高(残) 3.2	外:にぶい褐 内:にぶい褐 断:にぶい褐	不良	やや粗 長石、石英、雲母を多く 含む	外面ナデ 内面ナデ	二次焼成
142	弥生土器 壺	SD-701 第2層	器高(残) 5.1	外:暗褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ。ハケ後ミガキ。5条 のヘラ描き沈線 内面板ナデ。ハケ後ミガキ	
143	弥生土器 壺	SD-701 第2層	器高(残) 4.5	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	粗 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面ハケ目の後ナデ消し。さらに 割付線をしてキザミ目突帯。キザ ミ目は3つ一度に施文している 内面板ナデ後ナデ	
144	弥生土器 壺	SD-701 第2層	器高(残) 5.3	外:灰黄褐 内:にぶい黄橙 断:黄灰	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ミガキ。黒斑 内面板ナデ	
145	弥生土器 壺	SD-701 第2層	器高(残) 5.2	外:暗灰黄 内:黄灰 断:黄灰	良	密 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面7条の沈線。ナデ 内面ナデ。黒斑	
146	弥生土器 壺	SD-701 第2層	口径(推) 器高(残) 24.4 3.5	外:にぶい褐 内:にぶい黄褐 断:黒褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面口縁部に波状文の後刺突文。 ユビオサエ後横方向のミガキ 内面ナデ	
147	弥生土器 壺	SD-701 第2層	器高(残) 1.6	外:暗灰黄 内:黒褐 断:黄褐	良	密 長石、石英を含む	外面ナデ 内面ナデ。黒斑	
148	弥生土器 壺	SD-701 第2層	器高(残) 4.5	外:にぶい黄橙 内:暗灰 断:にぶい黄橙	良	やや粗 長石、石英、雲母を含む	外面口縁部に廉状文 内面ナデ	
149	弥生土器 壺	SD-701 第2層	器高(残) 4.7	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	不良	密 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面口縁部にヘラ描き沈線1条を はさんで上下にキザミ目。キザ ミ目は上下別に施す 内面ミガキ	
150	弥生土器 甕	SD-701 第2層	器高(残) 6.5	外:褐灰 内:黒 断:褐灰	良	やや粗 長石、石英、角閃石を含 む	外面ヨコナデ。ユビオサエ後ナデ。 黒斑 内面ヨコナデ。ユビオサエ後ナデ	
151	弥生土器 甕	SD-701 第2層	器高(残) 7.5	外:褐灰 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面口縁付近はユビオサエ後ナ デ。板ナデ。黒斑 内面ユビオサエ後ナデ	
152	弥生土器 甕	SD-701 第2層	器高(残) 5.8	外:オリーブ黒 内:暗灰黄 断:灰黄	良	密 長石、石英を多く含む	外面ナデ。煤付着 内面ユビオサエ後板ナデ	
153	弥生土器 甕	SD-701 第2層	器高(残) 2.8	外:黒褐 内:オリーブ褐 断:黄褐	良	密 長石、石英を含む	外面1条の沈線。ナデ。ユビオサ エ後ナデ。煤付着 内面ユビオサエ。ナデ	
154	弥生土器 甕	SD-701 第2層	器高(残) 3.1	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄橙	良	やや粗 長石、クサリ礫、雲母を 含む	外面4条の沈線(現存)。煤付着 内面ナデ	

插図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
155	弥生土器 甕	SD-701 第2層	器高(残) 3.1	外:灰 内:オリーブ黒 断:黒褐	良	密 石英、角閃石を含む	外面1条の沈線。ナデ。ユビオサ 工後ナデ 内面板ナデ。ナデ	
156	弥生土器 甕	SD-701 第2層	器高(残) 4.1	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:褐灰	良	密 長石、角閃石、雲母を含 む	外面ユビオサ工後ヨコナデ。4条 の沈線 内面ユビオサ工後ナデ	
157	弥生土器 甕	SD-701 第2層	器高(残) 5	外:にぶい黄 内:にぶい黄 断:灰黄	良	やや粗 長石、石英、チャート、 角閃石、雲母を含む	外面口縁部にキザミ目。8条の沈 線(現存) 内面ユビオサ工後板ナデ	
158	弥生土器 鉢	SD-701 第4層	器高(残) 6.1	外:黄灰 内:暗灰黄 断:暗灰黄	良	密 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面ミガキ。ナデ。黒斑 内面ユビオサ工後ナデ	
159	弥生土器 把手付鉢	SD-701 第4層	器高(残) 3.3	外:褐灰 内:にぶい黄 断:暗灰黄	良	密 長石、石英を含む	外面ユビオサ工 内面ユビオサ工後ナデ。爪痕	
160	弥生土器 高杯 or 鉢	SD-701 第4層	器高(残) 3.3	外:黄灰 内:黒褐 断:暗灰黄	良	密 雲母を含む	外面3条(現存)の沈線。ナデ。 横方向のミガキ 内面横方向のミガキ	
161	弥生土器 把手付鉢	SD-701 第4層	器高(残) 3.1	外:黒褐 内:黄灰 断:黒褐	良	密 長石、石英を含む	外面ナデ。ハケ目 内面ユビオサ工後ナデ	
162	弥生土器 鉢	SD-701 第4層	器高(残) 8.8	外:灰黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	粗 長石、石英、クサリ礫、 角閃石、雲母を含む	外面板ナデ。把手がつく 内面板ナデ	
163	弥生土器 高杯	SD-701 第4層	器高(残) 4.4	外:灰黄褐 内:オリーブ褐 断:灰黄褐	良	密 長石、石英を含む	外面ミガキ 内面ミガキ	
164	弥生土器 壺	SD-701 第4層	底径 器高(残) 4.1	外:暗オリーブ 褐 内:オリーブ褐 断:オリーブ褐	良	密 長石、石英を含む	外面ユビオサ工後ミガキ 内面ユビオサ工後ナデ。板ナデ。 黒斑	
165	弥生土器 壺	SD-701 第4層	底径(推) 器高(残) 12.6	外:灰褐 内:灰黄 断:灰黄	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ユビオサ工後ナデ。縦方向の 板ナデ。黒斑 内面ユビオサ工。ナデ。	
166	弥生土器 壺	SD-701 第4層	底径 器高(残) 8.9 7.4	外:にぶい赤褐 内:にぶい赤褐 断:にぶい赤褐	良	やや粗 長石、石英、角閃石雲母 を含む	外面磨滅 内面ユビオサ工後粗い工具痕	
167	弥生土器 壺	SD-701 第4層	底径 器高(残) 7.3 3	外:にぶい黄褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 角閃石を含む	外面ハケ後ミガキ 内面ユビオサ工後ナデ。	雑な作り
168	弥生土器 壺	SD-701 第4層	底径(推) 器高(残) 9.3 3.6	外:にぶい黄 内:にぶい黄 断:にぶい黄	良	やや粗 長石、石英を多く含む	外面ユビオサ工後ミガキ。黒斑 内面ユビオサ工後ナデ。板ナデ	
169	弥生土器 壺	SD-701 第4層	底径(推) 器高(残) 14.6 6.4	外:にぶい黄褐 内:黒 断:黒褐	良	やや粗 長石、石英、チャート、 雲母を多く含む	外面板ナデ。底部に焼成前に何か に当たったへこみあり 内面板ナデ。煤付着	
170	弥生土器 壺	SD-701 第4層	底径(推) 器高(残) 7.3 6.2	外:灰黄褐 内:にぶい黄褐 断:灰黄褐	良	やや粗 長石、石英、角閃石を多 く含む	外面不明だが一部ユビオサエ。底 部に工具痕 内面ユビオサ工後縦方向の板ナデ 後ミガキ。底部は雑な作り	
171	弥生土器 壺	SD-701 第4層	底径(推) 器高(残) 9.6 4.4	外:灰黄褐 内:煤付着のた め不明 断:黄灰	良	やや粗 長石、石英、角閃石を多 く含む	外面ユビオサエ。板ナデ。ナデ消 し。ナデ。黒斑 内面ユビオサ工後板ナデ。煤付着	
172	弥生土器 甕	SD-701 第4層	底径 器高(残) 6.2 3.5	外:黒褐 内:オリーブ褐 断:オリーブ褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲 母を多く含む	外面ミガキ。ユビオサ工後ミガキ。 煤付着 内面ユビオサ工後板ナデ	
173	弥生土器 壺	SD-701 第4層	底径 器高(残) 5 3.4	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、 雲母を多く含む	外面ユビオサ工後ミガキ。黒斑。 ユビオサエ 内面ナデ	
174	弥生土器 壺	SD-701 第4層	底径(推) 器高(残) 12.7 4.7	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:にぶい黄橙	良	やや粗 長石、石英、チャート、 角閃石、雲母を多く含む	外面ナデ 内面オサエ後ナデ	
175	弥生土器 甕	SD-701 第4層	底径 器高(残) 7.6 5.3	外:にぶい黄褐 内:灰黄褐 断:黒褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲 母を多く含む	外面ユビオサ工後ナデ。黒斑 内面ユビオサ工後板ナデ。黒斑	
176	弥生土器 鉢	SD-701 第4層	底径(推) 器高(残) 6.4 4.5	外:褐 内:褐 断:褐	不良	やや粗 長石、石英、角閃石、ク サリ礫、雲母を含む	外面ハケナデ消し 内面不明。煤付着	底部ドーナツ状に形成

番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
177	弥生土器 転用 土製円板	S D-701 第4層	長幅 厚重 4.45 4.3 0.75 17.5	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面磨滅 内面磨滅	打ち欠き
178	弥生土器 転用 土製円板	S D-701 第4層	長幅 厚重 6.1 6.5 0.9 52.1	外:黒褐 内:暗褐 断:暗褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ナデ 内面板ナデ	打ち欠き。二次焼成を受け磨滅
179	石器 磨製石包丁	S D-701 第4層	長(残) 幅(残) 厚重 4 1.7 0.7 7.5			粘板岩 o r 片岩		
180	石器 磨製石斧	S D-701 第4層	長幅 厚重 6.5 6.3 2.3 118.3			閃綠岩		
181	石器 楔形石器	S D-701 第4層	長幅 厚重 5.1 3.8 1.6 34.6					
182	石器 二次加工及び 研磨痕ある 剥片	S D-701 第4層	長幅 厚重 3.8 3.4 0.9 10.4			サスカイト		剥片の末端部分に研磨みられる。その研磨部分を切る剥離が存在。
183	弥生土器 壺	S D-701 第4層	口径(推) 器高(残) 13 5.1	外:褐灰 内:褐灰 断:褐灰	良	密 長石、石英を含む	外面板ナデ。口縁部分ヨコナデ 内面ユビオサエ後ナデ。口縁部分ヨコナデ。黒斑	
184	弥生土器 壺	S D-701 第4層	器高(残) 4.1	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面沈線による割付線を施した後、突帯を貼付け、キザミ目を施す(現存で4帯) 内面ナデ	
185	弥生土器 壺	S D-701 第4層	器高(残) 5.6	外:灰黄褐 内:暗灰黃 断:暗灰黃	良	密 長石、石英を含む	外面1条の沈線。ハケ後板ナデ。 ナデ消し。黒斑 内面ユビオサエ後板ナデ。黒斑	
186	弥生土器 鉢	S D-701 第4層	器高(残) 4.9	外:にぶい褐 内:にぶい赤褐 断:にぶい褐	良	密 長石、石英、クサリ礫、角閃石を含む	外面流水文 内面ユビオサエ後ナデ	
187	弥生土器 甕	S D-701 第4層	器高(残) 2.6	外:黒褐 内:黒褐 断:黄灰	良	密 長石、石英、角閃石を含む	外面口縁部にキザミ目。ナデ。ハケ目をナデ消す。黒斑 内面板ナデ。黒斑	内外黒斑
188	弥生土器 甕	S D-701 第4層	器高(残) 4.5	外:黄灰 内:暗黄灰 断:暗黄灰	良	密 長石、石英、角閃石を含む	外面ヨコナデ。煤付着 内面ユビオサエ後ナデ	
189	弥生土器 甕	S D-701 第4層	底径 器高(残) 9.2 3.7	外:暗灰黃 内:黒褐 断:暗灰黃	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面ユビオサエ後ハケ目後ラミガキ。底部にユビオサエと植物による圧痕。黒斑 内面板ナデ後ハラミガキ。底部にユビオサエ後板ナデ後ラミガキ。黒斑	粘土の継ぎ目に相沿って剥落している。
190	弥生土器 転用 土製円板	S D-701 第4層	長幅 厚重 4.75 4.5 0.9 25	外:にぶい黄褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	粗 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面磨滅 内面磨滅	
191	石器 磨製石斧	S D-701 第4層	長(残) 幅(残) 厚重 3 3 27 27.5			閃綠岩		斑晶みられる。バルブの発達弱い
192	石器 二次加工ある 剥片	S D-701 第4層	長幅 厚重 5 4.6 0.7 16.8			サスカイト		背面左側に自然面を持つ。末端が蝶番状となってしまったので側面に主に加工を加えたのか。バルブの発達は強い
193	弥生土器 壺	S D-701 第5層	器高(残) 3.8	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、雲母を多く含む	外面ナデ。ミガキ。オサエ痕 内面ナデ、ユビオサエ	
194	弥生土器 壺	S D-701 第5層	器高(残) 7.9	外:暗灰黃 内:暗灰黃 断:暗灰黃	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面板ナデ後、3条のヘラ描き沈線が現存だが下に1条以上の沈線があったと考えられる。板ナデ後、幅広のミガキ 内面ナデ	
195	弥生土器 壺	S D-701 第5層	器高(残) 4.5	外:灰黄褐 内:褐 断:にぶい黄橙	不良	やや粗 長石、石英、チャートを含む	外面板ナデ 内面板ナデ	被熱のため内面劣化激しい
196	弥生土器 壺	S D-701 第5層	器高(残) 3.7	外:灰黄褐 内:にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	不良	密 長石、石英、チャート、クサリ礫を含む	外面ユビオサエ後、ナデ後、ヘラ状工具によるナデつけ。ナデつけは放射状に入る 内面ユビオサエの痕跡あり	
197	弥生土器 壺	S D-701 第5層	器高(残) 4.7	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英を含む	外面ナデ後貼付突帯の割付線後突 帶貼付し、キザミ目を施す。(現存4帯) 内面ユビオサエ後、ナデ	
198	弥生土器 壺	S D-701 第5層	器高(残) 8.7	外:灰黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面5条の沈線(現存)。板ナデ 後ミガキ。黒斑 内面板ナデ。磨滅	

掲図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
199	弥生土器壺	SD-701 第5層	器高(残) 3.7	外:灰黄褐 内:黄灰 断:暗灰黄	良	やや粗 長石、石英、角閃石を多く含む	外面流文 内面ユビオサエ後、板ナデ	
200	弥生土器壺	SD-701 第5層	器高(残) 5.4	外:にぶい黄褐 内:灰黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ナデ後、流水文。1条の貼付 突帯 内面ユビオサエ後ハケ目	
201	弥生土器壺	SD-701 第5層	器高(残) 7.7	外:にぶい黄 内:にぶい黄 断:にぶい黄	良	密 長石、石英、クサリ礫、 角閃石、雲母を含む	外面流文 内面ユビオサエ後ミガキ	
202	弥生土器壺	SD-701 第5層	器高(残) 6.4	外:褐 内:灰黄褐 断:灰黄	良	密 長石、石英、クサリ礫、 角閃石を含む	外面タテ左斜め方向のハケ目後流 水文。文様間をミガキ。黒斑 内面ユビオサエ後板ナデ	
203	弥生土器甕	SD-701 第5層	器高(残) 5	外:暗灰黄 内:にぶい黄 断:にぶい黄	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面半裁竹管による2条の沈線。 ユビオサエ 内面板ナデ	内外面煤付着
204	弥生土器甕	SD-701 第5層	器高(残) 5.8	外:にぶい褐 内:褐 断:褐灰	良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面キザミ目。ユビオサエ後、ナ デ。板ナデ後、ナデ消し。3条の ヘラ描き沈線 内面ユビオサエ後ナデ。磨滅	煤付着
205	弥生土器甕	SD-701 第5層	器高(残) 3.9	外:灰黄褐 内:にぶい黄橙 断:灰	良	密 長石、石英、雲母、角閃 石を含む	外面ユビオサエ後、板ナデ 内面ナデ	
206	弥生土器鉢	SD-701 第5層	器高(残) 3	外:暗灰黄 内:黄褐 断:黄灰	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面口縁部にキザミ目。ナデ 内面板ナデ後ナデ	
207	弥生土器甕	SD-701 第5層	器高(残) 3.8	外:にぶい褐 内:にぶい褐 断:にぶい褐	良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲 母を含む	外面口縁部にキザミ目。ハケ。ナ デ。ヨコナデ 内面ナデ	
208	弥生土器鉢	SD-701 第5層	器高(残) 4.5	外:浅黄 内:にぶい黄 断:にぶい黄	良	密 長石、石英、クサリ礫、 雲母を含む	外面ユビオサエ後、ナデ 内面ユビオサエ	口縁部、キザミ目
209	弥生土器甕	SD-701 第5層	器高(残) 7.1	外:暗褐 内:にぶい褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ 内面ユビオサエ	煤付着
210	弥生土器甕	SD-701 第5層	器高(残) 4.8	外:にぶい褐 内:灰褐 断:にぶい黄橙	良	密 長石、石英、クサリ礫、 角閃石を含む	外面板ナデ。ヨコナデ。ナデ 内面板ナデ。ヨコナデ	二次焼成
211	弥生土器甕	SD-701 第5層	器高(残) 5.2	外:暗黄灰 内:暗黄灰 断:黄褐	良	密 長石、石英、クサリ礫、 角閃石を含む	外面ハケ目後ナデ消し。口縁にユ ビオサエ。煤付着 内面板ナデ。口縁にユビオサエ	
212	弥生土器鉢	SD-701 第5層	器高(残) 5.4	外:にぶい黄橙 内:黄褐 断:黄灰	良	密 長石、石英、角閃石を含 む	外面ハケ目。ヨコナデ 内面口縁部にはハケ目の後ヨコナ デ。板ナデ後ナデ	
213	弥生土器甕	SD-701 第5層	器高(残) 5.2	外:暗灰黄 内:にぶい黄橙 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、クサリ礫、 角閃石、雲母を含む	外面板ナデ 内面ユビオサエ	煤付着
214	弥生土器甕	SD-701 第5層	器高(残) 5.4	外:にぶい黄褐 内:褐灰 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、角閃石を含 む	外面ユビオサエ後板ナデ。黒斑 内面ナデ	
215	弥生土器甕	SD-701 第5層	口径 底径 器高 14.9 5.4 21.8	外:灰黄褐 内:浅黄 断:にぶい黄橙	良	密 長石、石英を含む	外面ハケ目。ユビオサエ後ケズリ 後ミガキ。煤付着 内面ユビオサエ後ナデ。煤付着	
216	弥生土器壺	SD-701 第5層	底径(残) 器高(残) 9.3 4.6	外:灰黄褐 内:灰黄褐 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、雲母を多く 含む	外面ユビオサエ後、ハケ目 内面工具痕。底部にユビオサエ	
217	弥生土器壺	SD-701 第5層	底径(推) 器高(残) 15.0 3.6	外:にぶい黄 内:にぶい黄 断:褐灰	良	やや粗 長石、石英、雲母片を含 む	外面ユビオサエ後ナデ。黒斑 内面ユビオサエ	
218	石器 微細剥離痕のある剥片	SD-701 第5層	長 幅 厚 重 2.7 4 0.9 9.5			サスカイト		剥片の末端をエッヂにして使用していたのか。バルブは良く発達
219	石器 擦石	SD-701 第5層	長(残) 幅(残) 厚 重 8 11.9 21 141.2			砂岩		
220	弥生土器壺	SD-701 最下層	器高(残) 4.7	外:黑褐 内:暗灰黄 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、角閃石を含 む	外面ユビオサエ後ハケ目後ナデ 内面ハケ目	

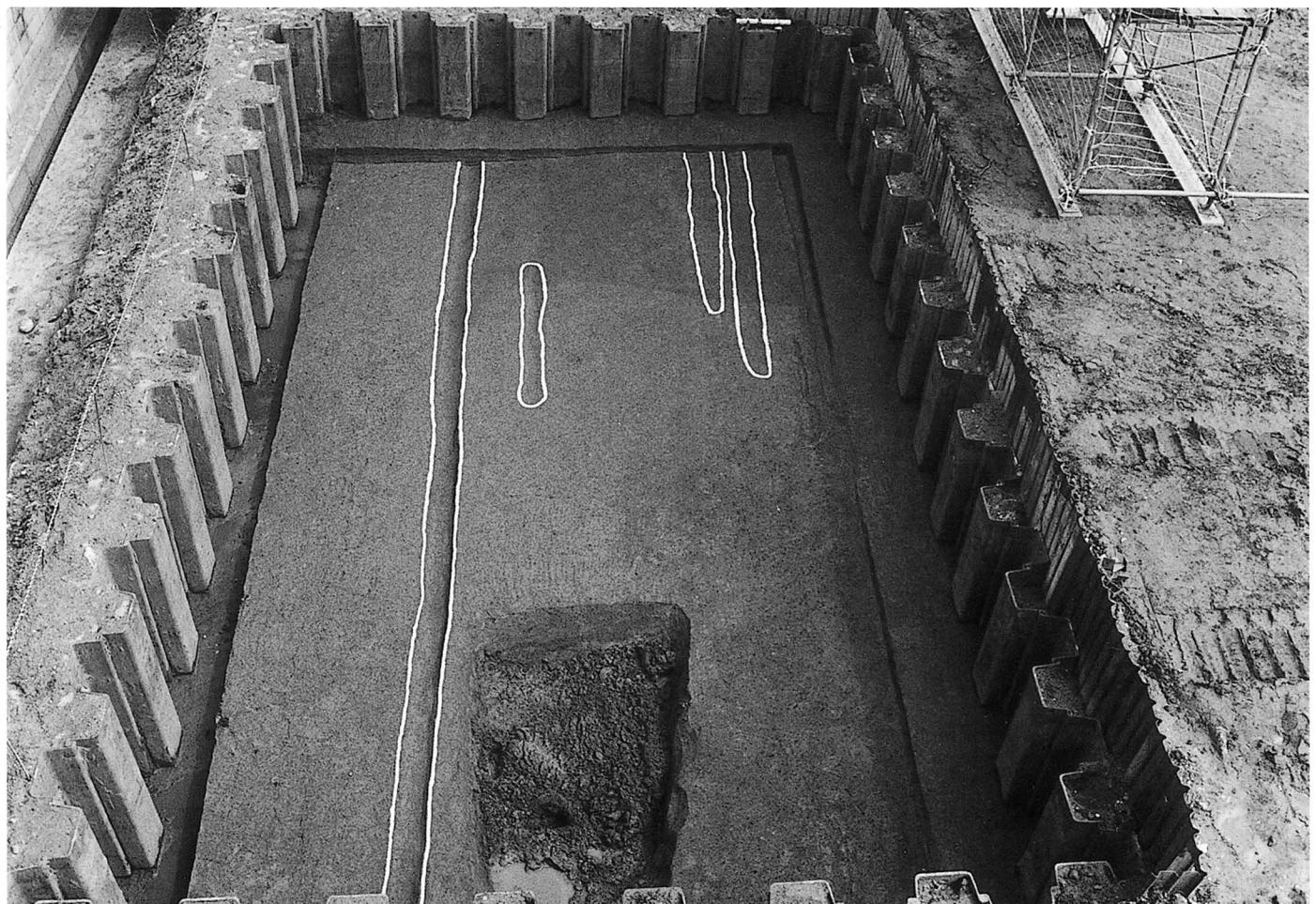
挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
221	弥生土器壺	SD-701 最下層	器高(残) 4.7	外:オリーブ褐色 内:オリーブ褐色 断:黒	良	密 長石、石英、クサリ礫、角閃石を含む	外面口縁部に1条の沈線。ユビオサエ後ナデ 内面不明	
222	弥生土器壺	SD-701 最下層	器高(残) 4.5	外:灰黄褐色 内:灰黄褐色 断:にぶい黄褐色	良	密 長石、石英を含む	外面ユビオサエ後ハケ目 内面ナデ	
223	弥生土器壺	SD-701 最下層	器高(残) 3.2	外:灰黄褐色 内:暗灰黄褐色 断:暗灰黄褐色	良	やや粗 長石、石英、雲母を含む	外面ヨコナデ。口縁部にハケ目 内面ナデ	
224	弥生土器壺	SD-701 最下層	器高(残) 2.4	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色 断:にぶい黄褐色	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を多く含む	外面ヨコナデ 内面ナデ	
225	弥生土器壺	SD-701 最下層	器高(残) 2.5	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色 断:にぶい黄橙色	良	粗 長石、石英、クサリ礫、雲母を含む	外面板ナデ。口縁部に指先による キザミ目状のオサエがある 内面ナデ	
226	弥生土器甕	SD-701 最下層	器高(残) 4	外:黒褐色 内:黄褐色 断:黄褐色	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ。口縁部はユビオサエ 後ナデ。煤付着 内面板ナデ	
227	弥生土器壺	SD-701 最下層	器高(残) 6.8	外:黒褐色 内:黄褐色 断:黄褐色	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ハケ目の後、櫛描流水文。流 水文の間に施文後のミガキ。黒斑 内面板ナデ。磨滅	
228	弥生土器壺	SD-701 最下層	器高(残) 4.8	外:暗褐色 内:灰黄褐色 断:灰黄褐色	良	密 長石、石英、クサリ礫、角閃石を含む	外面流水文。黒斑 内面ユビオサエ後ナデ	
229	弥生土器壺	SD-701 最下層	器高(残) 5	外:暗灰黃褐色 内:暗灰黃褐色 断:にぶい黄褐色	良	やや粗 長石、石英を含む	外面直線文の間に波状文 内面ユビオサエ後ナデ	
230	弥生土器甕	SD-701 最下層	器高(残) 7.2	外:灰褐色 内:明赤褐色 断:灰褐色	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面口縁部付近にユビオサエ後ヨ コナデ。体部に3条の沈線。ナデ 内面ユビオサエ後板ナデ	二次焼成
231	弥生土器甕	SD-701 最下層	器高(残) 9.4	外:黒褐色 内:黒褐色 断:灰黄褐色	良	密 長石、石英、クサリ礫、雲母を含む	外面5条のヘラ描沈線。ハケ目 内面ユビオサエ後ナデ	内外面煤付着
232	弥生土器甕	SD-701 最下層	器高(残) 3.1	外:黒褐色 内:暗灰黃褐色 断:暗灰黃褐色	不良	粗 長石、石英、雲母を含む	外面口縁部にキザミ目。4条の沈 線(現存) 内面ユビオサエ。ナデ。	
233	弥生土器甕	SD-701 最下層	器高(残) 7.6	外:灰黄褐色 内:黄灰色 断:にぶい黄褐色	良	密 長石、石英、クサリ礫、角閃石を含む	外面10条の沈線。ヨコナデ。ナ デ 内面板ナデ。煤付着	
234	弥生土器鉢	SD-701 最下層	器高(残) 5.4	外:灰褐色 内:にぶい黄褐色 断:にぶい黄褐色	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面ユビオサエ後ヨコナデ。磨滅 内面ミガキ	口縁部に1cmあたり2 ~3個のキザミ目あり。 磨滅によりはつきりしな い。
235	弥生土器甕	SD-701 最下層	器高(残) 6.5	外:黄褐色 内:暗灰黃褐色 断:暗灰黃褐色	良	密 長石、石英、クサリ礫、角閃石、雲母を含む	外面板ナデ。口縁付近はユビオサ エ後ナデ 内面ユビオサエ後板ナデ。黒斑	
236	弥生土器鉢	SD-701 最下層	器高(残) 5.9	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色 断:灰黄褐色	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面貼り付けの把手のようなもの がある。ユビオサエ後板ナデ 内面板ナデ	
237	弥生土器甕	SD-701 最下層	器高(残) 4.7	外:にぶい黄褐色 内:オリーブ褐色 断:黒褐色	良	やや粗 長石、石英、角閃石を含む	外面口縁部はユビオサエ後ナデ。 ハケ目 内面ユビオサエ後ナデ	
238	弥生土器甕	SD-701 最下層	器高(残) 6	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄橙色 断:黑褐色	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ。煤付着 内面ユビオサエ後板ナデ	
239	弥生土器甕	SD-701 最下層	器高(残) 6.5	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄橙色 断:にぶい黄橙色	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、雲母を多く含む	外面板ナデ。煤付着 内面ユビオサエ後ナデ	
240	弥生土器甕	SD-701 最下層	器高(残) 5.3	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色 断:暗灰黃褐色	良	やや粗 長石、石英、チャート、クサリ礫、雲母を含む	外面口縁部にキザミ目。粗いハケ 目。煤付着 内面粗いハケ目。煤付着	No.215と同一個体か?
241	弥生土器甕	SD-701 最下層	底径(推) 器高(残) 5	外:黄褐色 内:オリーブ黒褐色 断:灰	良	密 長石、石英、角閃石、雲母を含む	外面ユビオサエ後ハケ目。底部は ナデ 内面ユビオサエ後ナデ。黒斑	
242	弥生土器壺	SD-701 最下層	底径(推) 器高(残) 4.4	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色 断:にぶい黄褐色	良	密 長石、クサリ礫、雲母を含む	外面ユビオサエ後ミガキ。底部は ナデ。一部黒斑あり 内面ユビオサエ後板ナデ。一部に 黒斑あり	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	色調	焼成	胎土	技法の特徴	備考
243	弥生土器壺	SD-701 最下層	底径 3.7 器高(残) 2.1	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	良	やや粗 長石、石英、角閃石、雲母を多く含む	外面ユビオサエ後ハケあるも、磨滅のためはつきりしない 内面ユビオサエ後ナデ	
244	弥生土器甕	SD-701 最下層	底径 6.2 器高(残) 4.9	外:黄褐 内:黄褐 断:にぶい黄	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫を含む	外面ユビオサエ。黒斑 内面ユビオサエ後ナデ	
245	弥生土器鉢	SD-701 最下層	器高(残) 4	外:にぶい褐 内:灰褐 断:にぶい褐	良	密 長石、石英、クサリ礫を含む	外面板ナデ。把手がつく 内面ナデ	二次焼成
246	弥生土器壺	SD-701 最下層	底径(推) 14 器高(残) 4.8	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、チャート、雲母を含む	外面ユビオサエ。板ナデ 内面ユビオサエ。ナデ。板ナデの工具痕	
247	弥生土器壺	SD-701 最下層	底径(推) 9.7 器高(残) 4.5	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、雲母を多く含む	外面ユビオサエ後ナデ。 底部ナデ 内面ユビオサエ後ナデ(板ナデか?)	
248	弥生土器甕	SD-701 最下層	底径(推) 6 器高(残) 8.2	外:灰黄褐 内:黒褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ハケ目 内面ユビオサエ後ナデ。煤付着	
249	弥生土器甕	SD-701 最下層	底径(推) 16.4 器高(残) 5.3	外:灰褐 内:にぶい橙 断:灰	不良	やや粗 長石、石英、クサリ礫、雲母を多く含む	外面ユビオサエ。底部ナデ 内面ユビオサエ痕	
250	弥生土器 転用 土製円板	SD-701 最下層	長幅 7.6 厚重 6.6 7.1 71.1	外:暗灰黄 内:オリーブ褐 断:オリーブ褐	良	密 長石、角閃石、雲母を含む	外面ナデ 内面ナデ。黒斑	
251	弥生土器 転用 土製円板	SD-701 最下層	長幅 7 厚重 6.9 1.3 56.4	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄橙 断:灰黄褐	良	密 長石、石英、クサリ礫、角閃石、雲母を含む	外面ナデ後貼付突帶。指先による キザミ目状圧痕あり 内面磨滅	
252	木製品 高杯	SD-701 第2層	底径 10.8 器高(残) 4.0			クワ属		
253	木製品 鉢(未製品)	SD-701 第2層	長幅 27.7 厚 10.25 1.5			アカガシ亜属		
254	弥生土器壺	SD-801	器高(残) 7.5	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ 内面ユビオサエ後ナデ	
255	弥生土器壺	SD-801	器高(残) 4	外:にぶい黄 内:暗灰黄 断:暗灰黄	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面ヨコナデ。ハケ後ナデ 内面板ナデ	
256	弥生土器壺	SD-801	器高(残) 6.4	外:暗褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英を含む	外面流水文 内面ユビオサエ後ナデ	
257	弥生土器壺	SD-801	口径(推) 27 器高(残) 6.2	外:灰黄褐 内:暗灰黄 断:黑褐	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫を含む	外面ハケ後ミガキ後2条の沈線(現存)。ヨコナデ。ユビオサエ。黒斑 内面板ナデ	
258	弥生土器甕	SD-801	器高(残) 6	外:暗褐 内:にぶい黄褐 断:にぶい黄褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面2条の沈線。ヨコナデ。ハケ目 内面ミガキ	
259	弥生土器甕	SD-801	器高(残) 6	外:黒褐 内:灰黄褐 断:にぶい黄	良	密 長石、石英を含む	外面5条の沈線。ハケ。ヨコナデ。 煤付着 内面ヨコナデ。板ナデ	
260	弥生土器鉢	SD-801	器高(残) 4.5	外:褐灰 内:にぶい黄褐 断:灰黄	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫を含む	外面ヨコナデ。ハケ目ナデ消し。 ハケ。煤付着 内面ユビオサエ後ミガキ	
261	弥生土器鉢	SD-801	器高(残) 3.8	外:黒褐 内:黒褐 断:灰黄褐	良	密 長石、雲母を含む	外面6条一単位の櫛描き沈線3本。 ナデ 内面板ナデ	
262	弥生土器壺	SD-801	口径 器高(残) 9.3 9.5	外:にぶい黄橙 内:灰黄褐 断:黄灰	良	やや粗 長石、石英、クサリ礫を含む	外面ハケ。黒斑。底部ユビオサエ 後ナデ。工具痕 内面ユビオサエ後ハケ	
263	弥生土器 転用 土製円板	SD-801	長幅 5 厚重 4.8 0.9 24.6	外:灰黄褐 内:暗灰黄 断:オリーブ褐	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面板ナデ 内面板ナデ	打ち欠き
264	弥生土器甕	SK-801	器高(残) 7	外:にぶい橙 内:にぶい橙 断:にぶい橙	良	密 長石、石英、雲母を含む	外面口縁部に1条の沈線。板ナデ 内面板ナデ。煤付着	

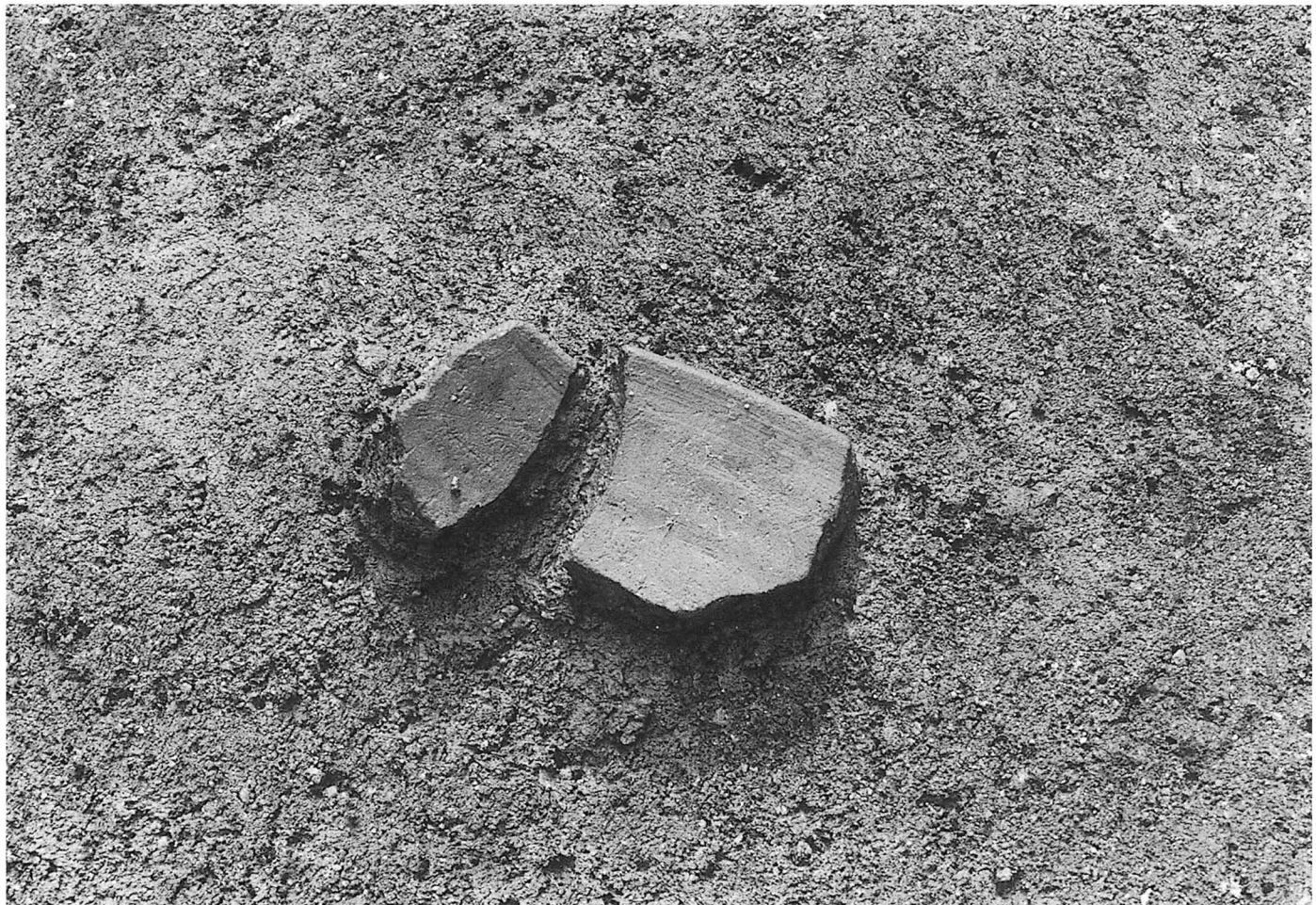
写 真 図 版



1. 第1遺構面全景（南より）



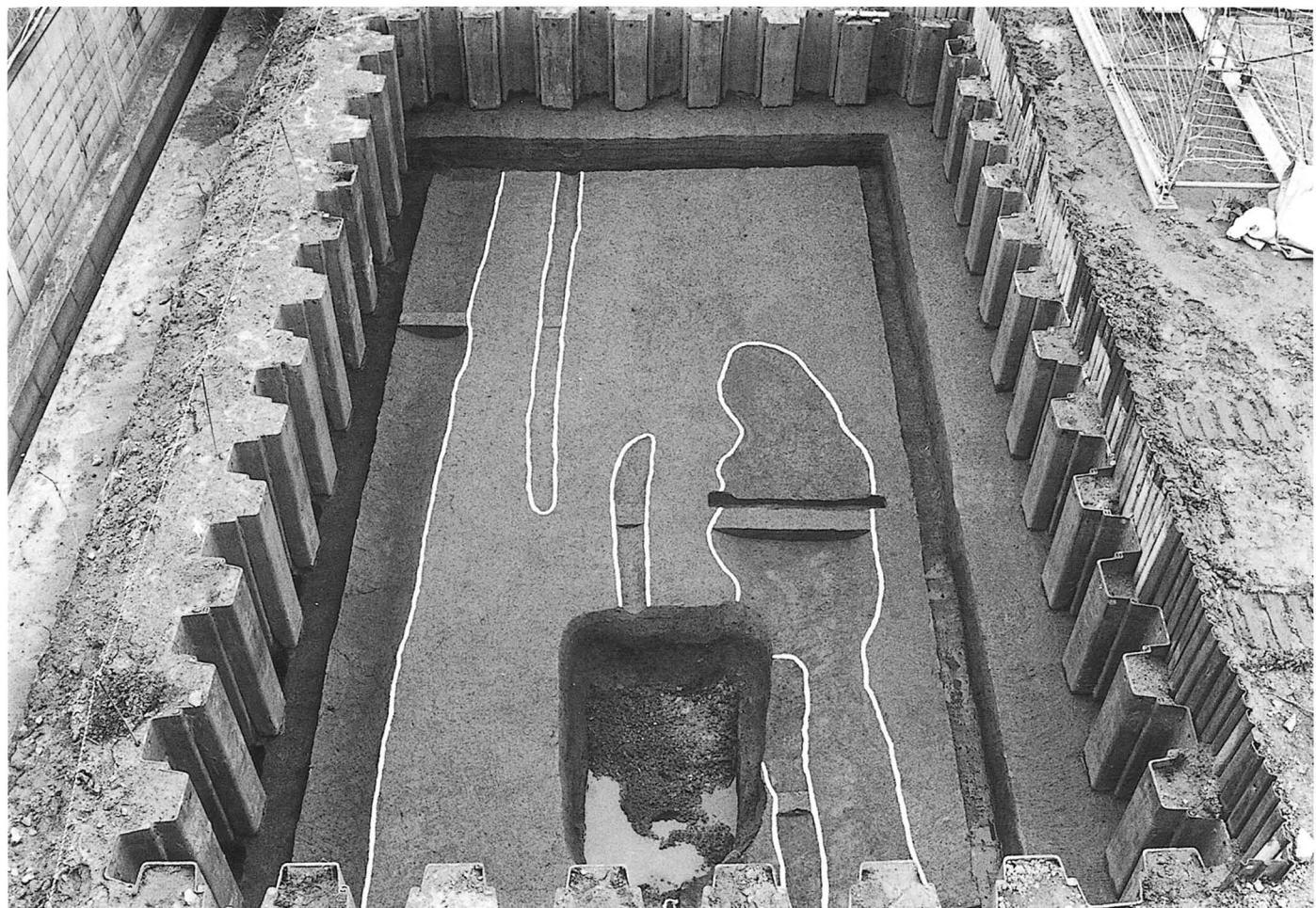
2. 第2遺構面全景（南より）



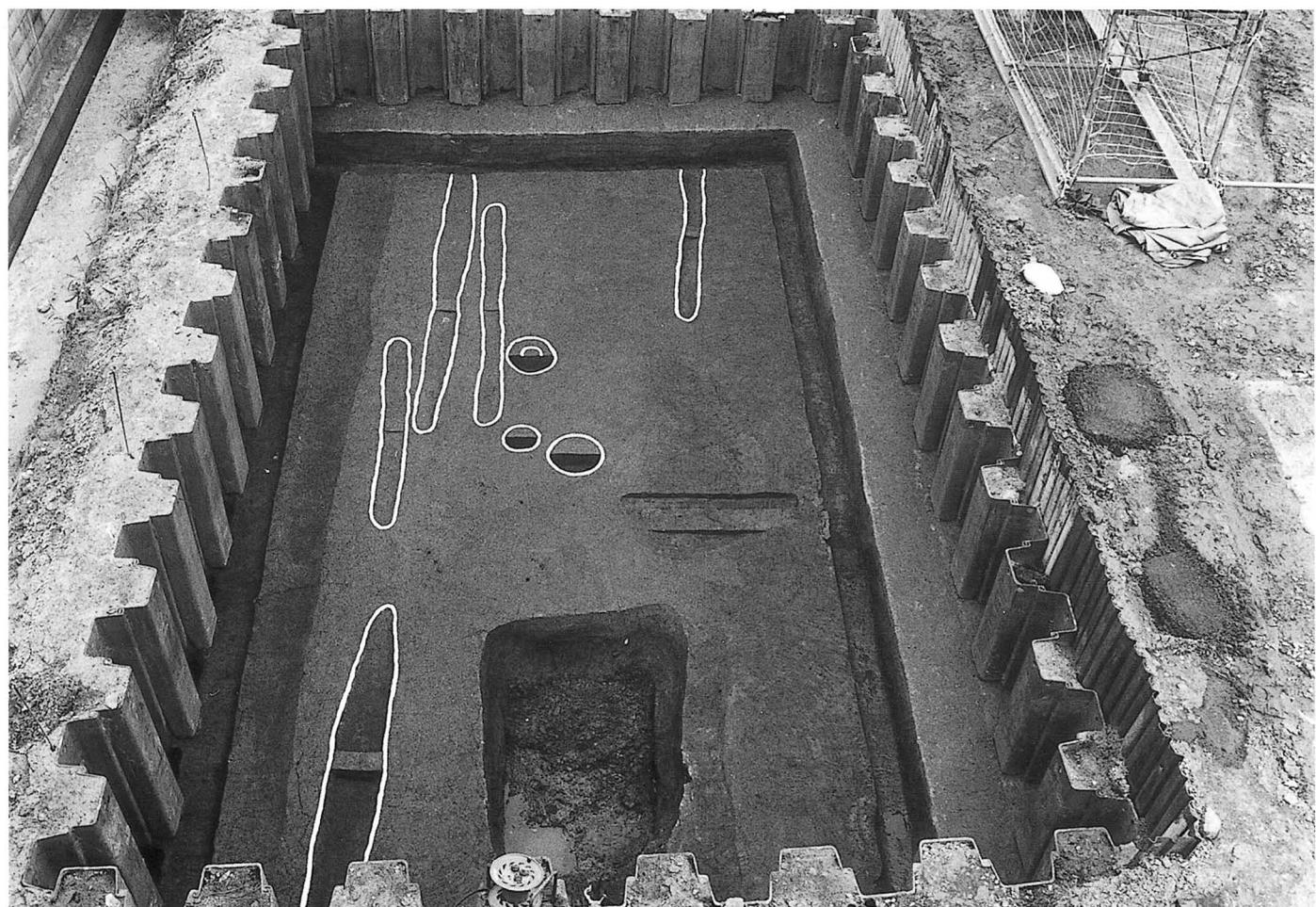
1. 基本層序第Ⅲ層遺物出土状況（1）



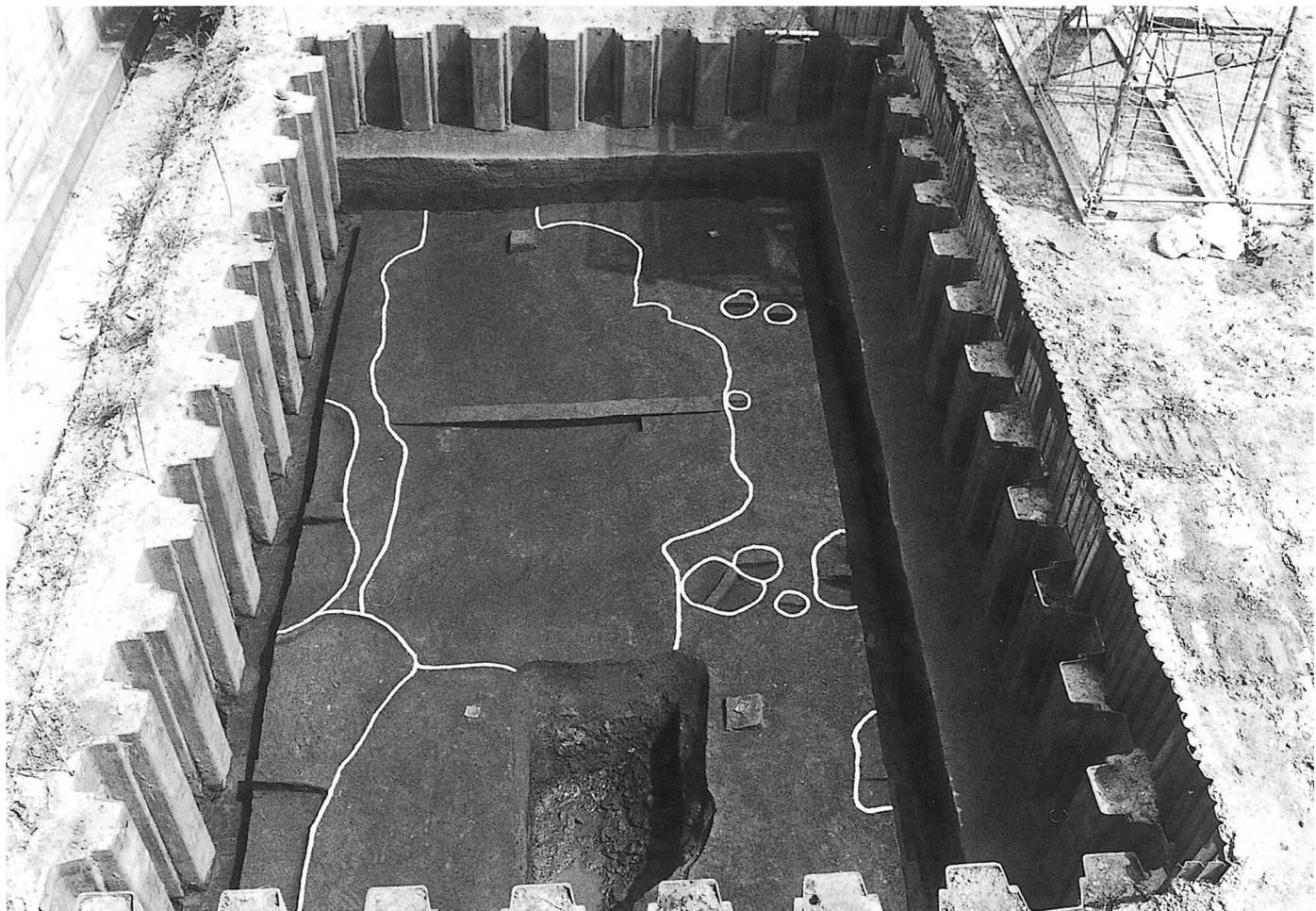
2. 基本層序第Ⅲ層遺物出土状況（2）



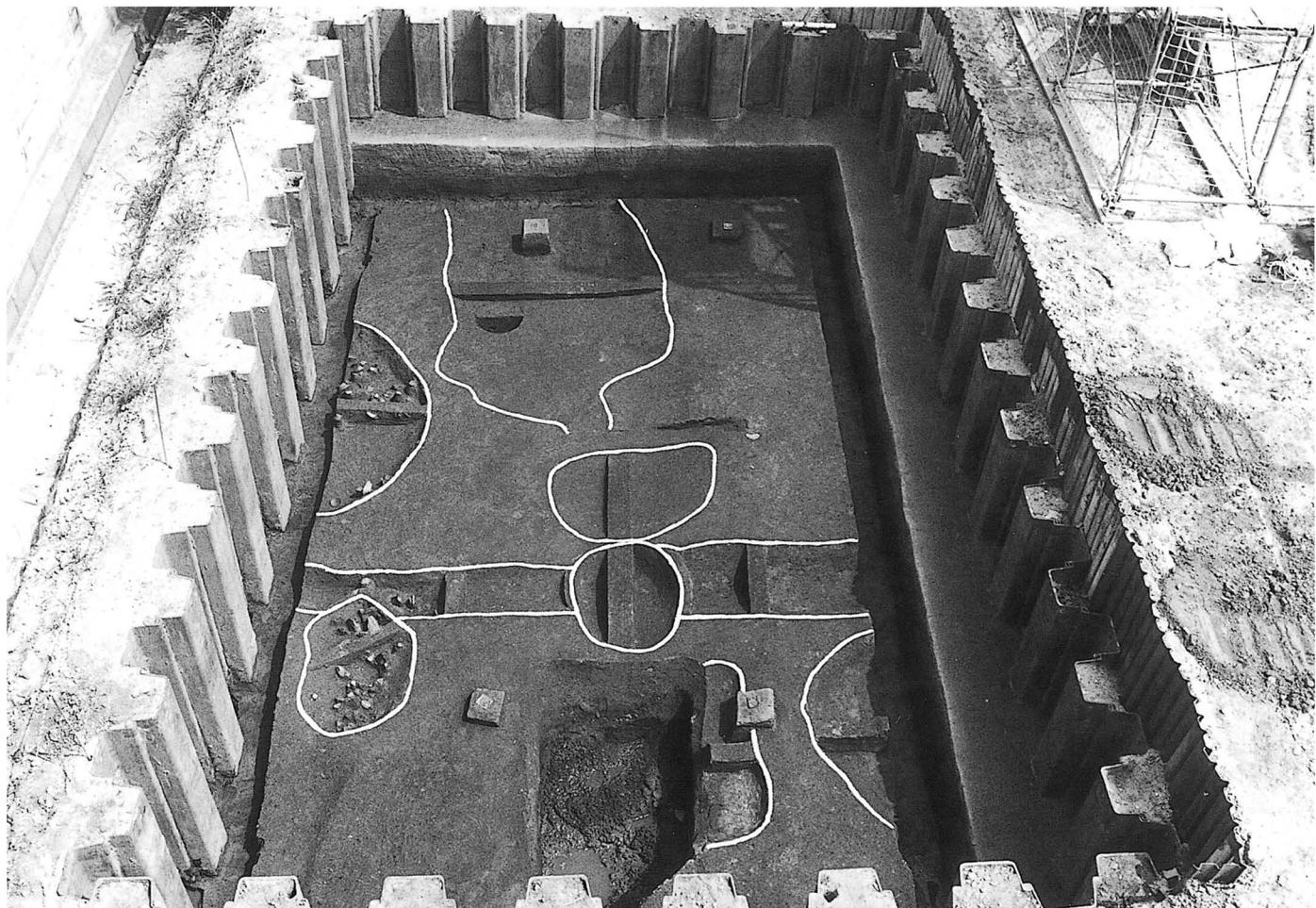
1. 第3遺構面全景（南より）



2. 第4遺構面全景（南より）



1. 第5遺構面全景（南より）



2. 第6遺構面全景（南より）



1. SD-601・SK-603遺物出土状況（東より）



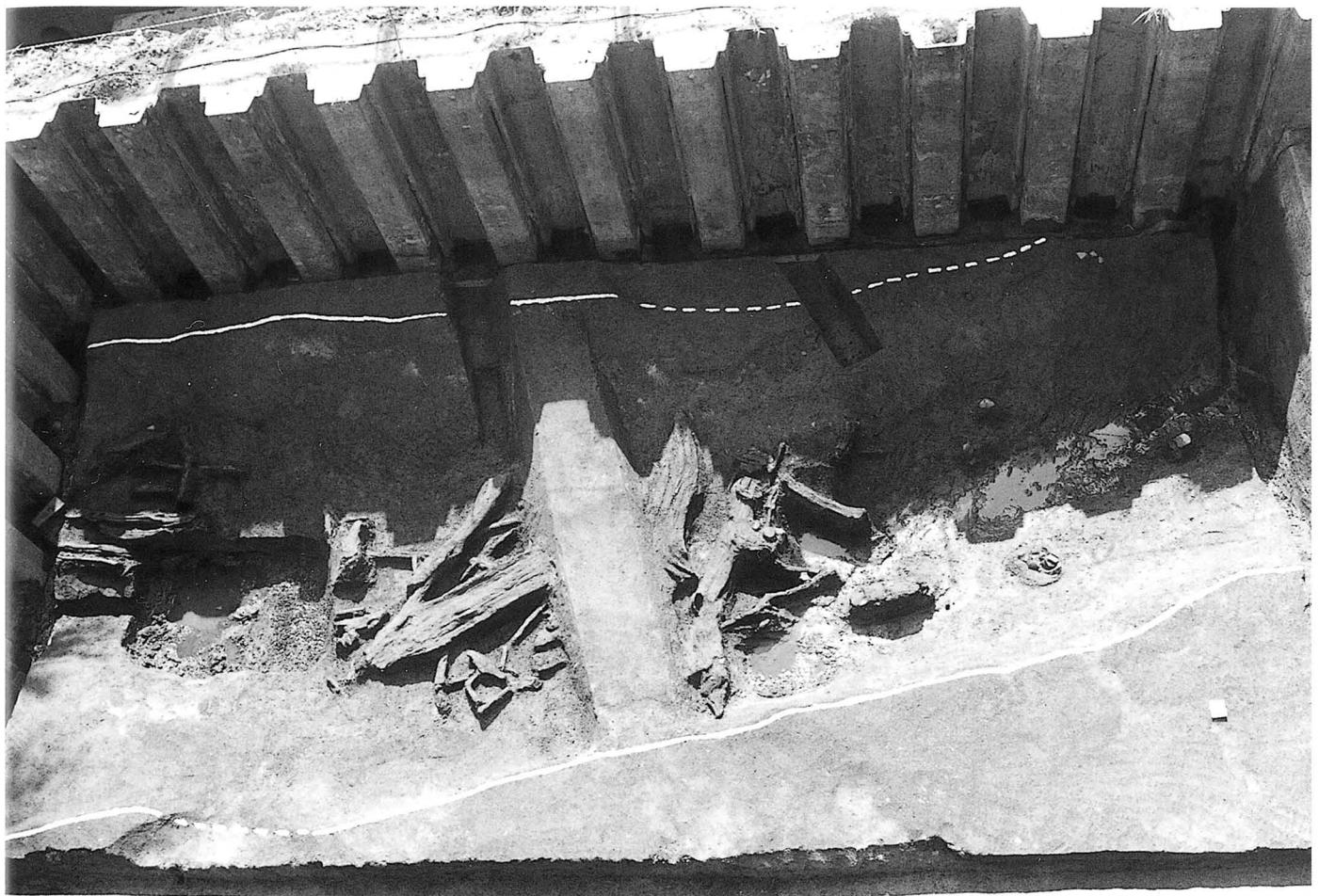
2. SK-605遺物出土状況（東より）



1. SD-701 (南より)



2. SD-701断面 (南より)



1. SD-701遺物出土状況（1）



1. SD-701遺物出土状況（2）



1. SD-701遺物出土状況（3）



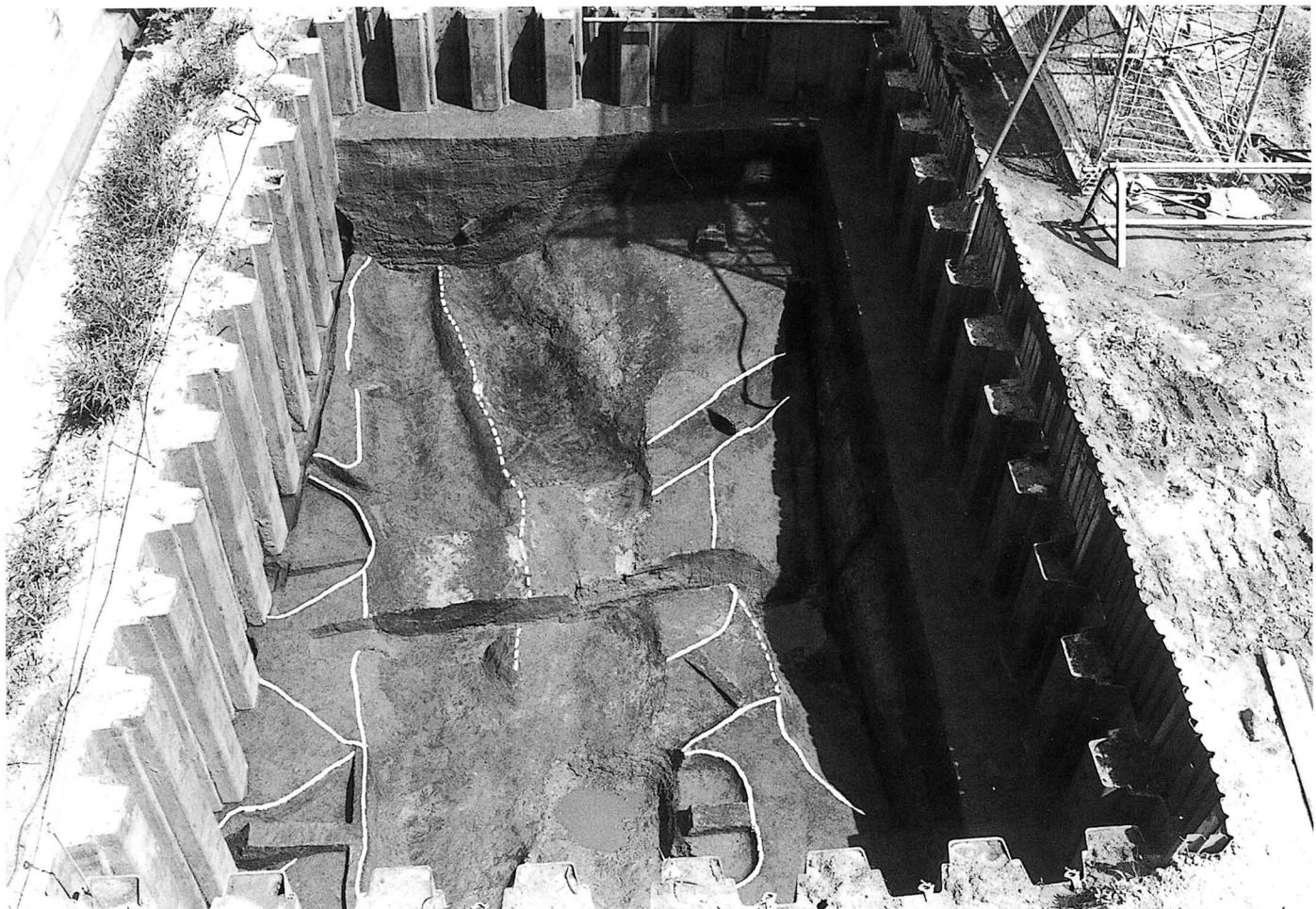
2. SD-701遺物出土状況（4）



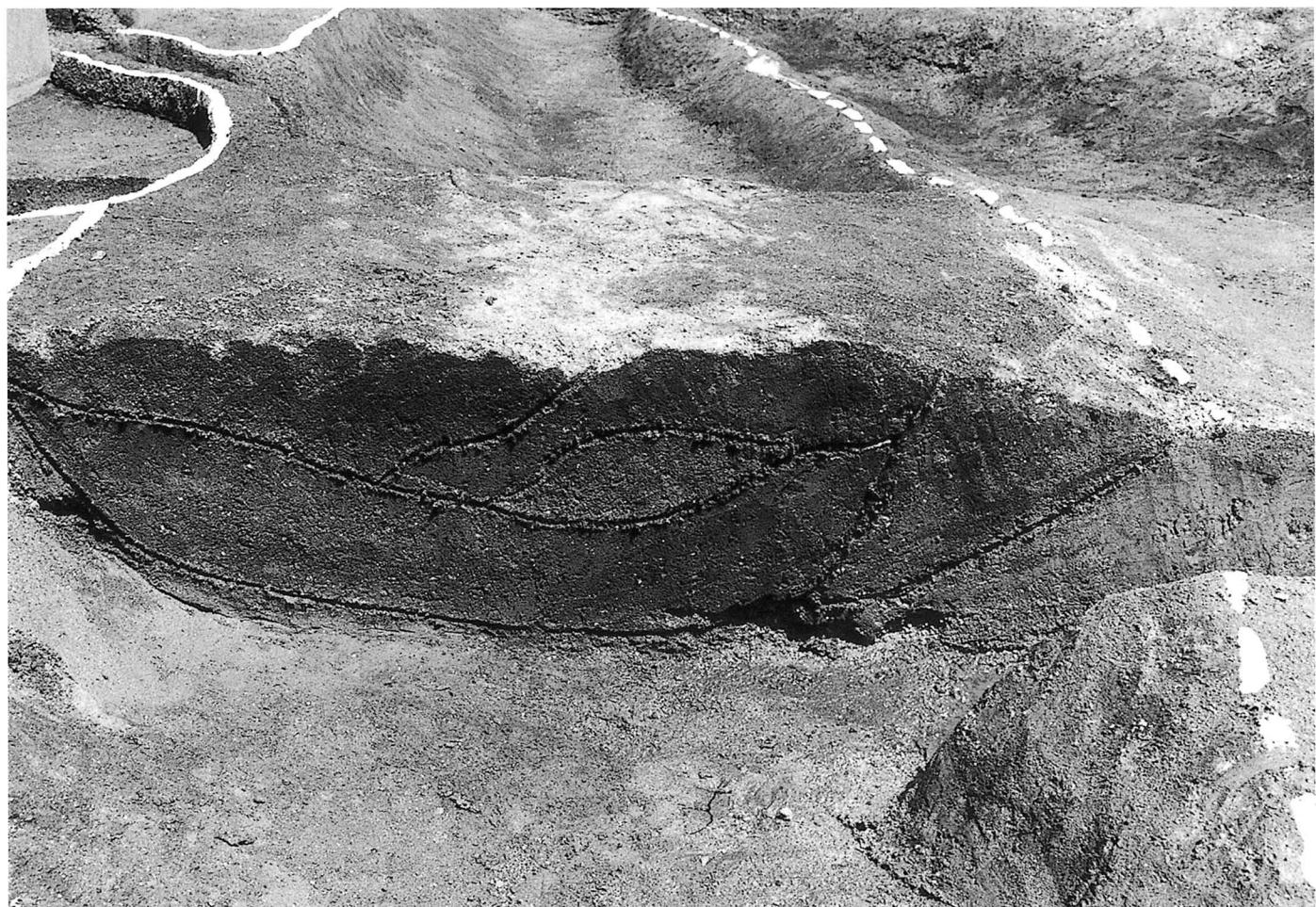
1. SD-701 遺物出土状況 (5)



2. SD-701 遺物出土状況 (6)

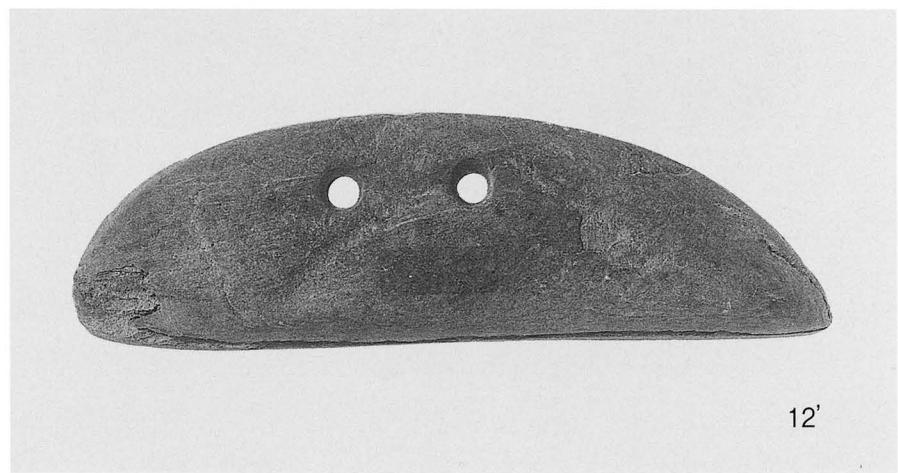
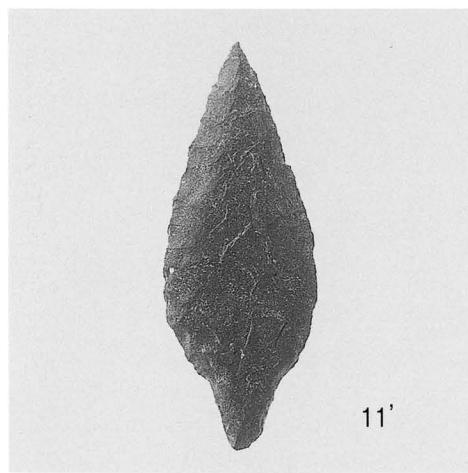
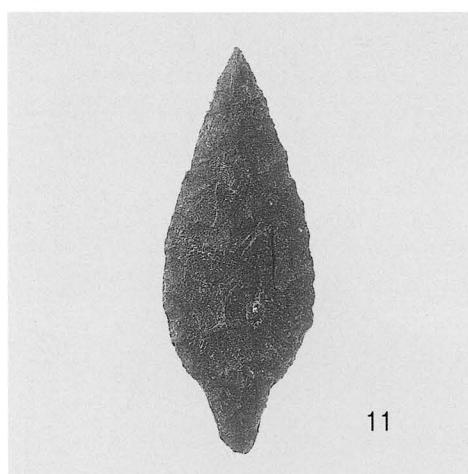
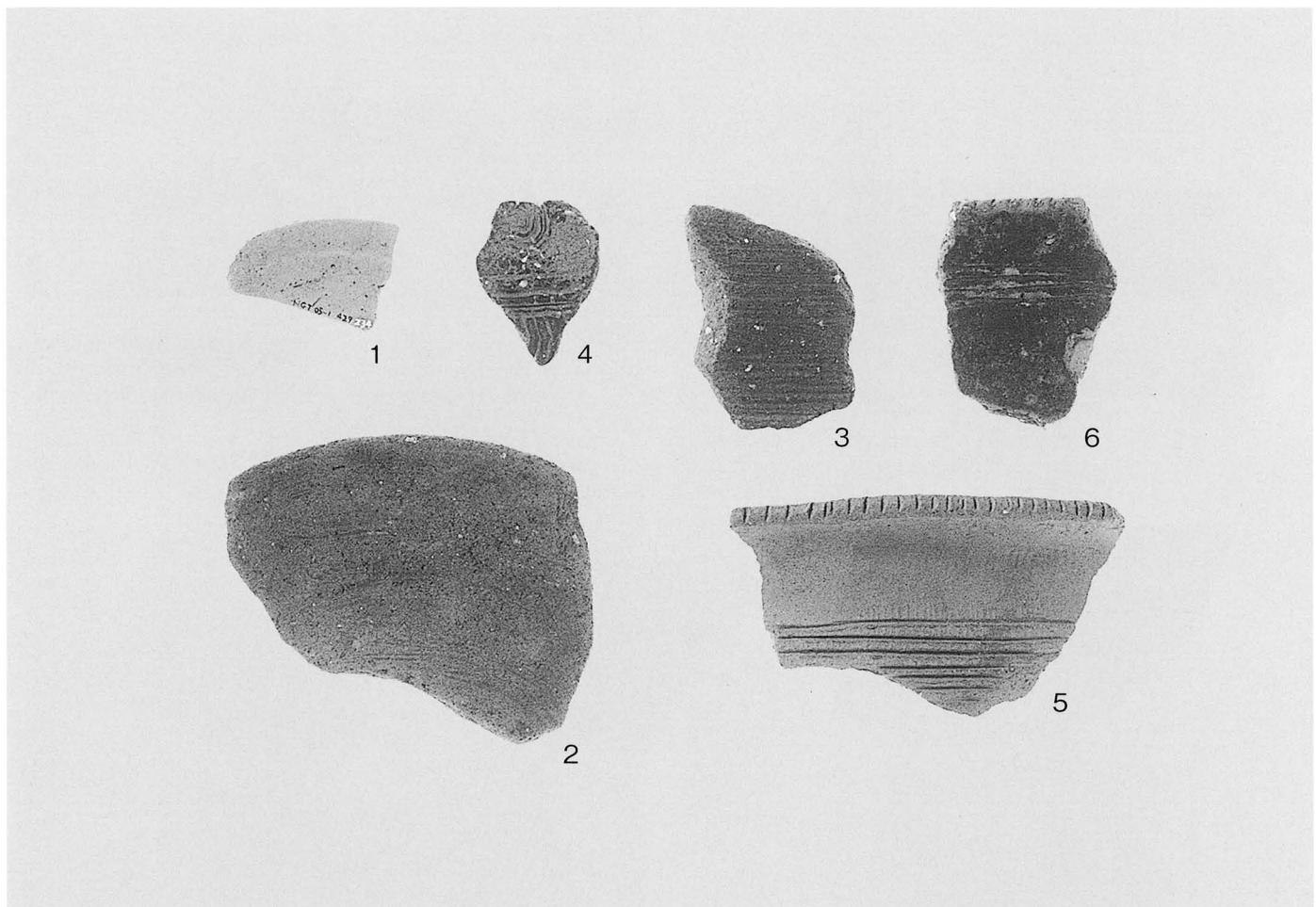


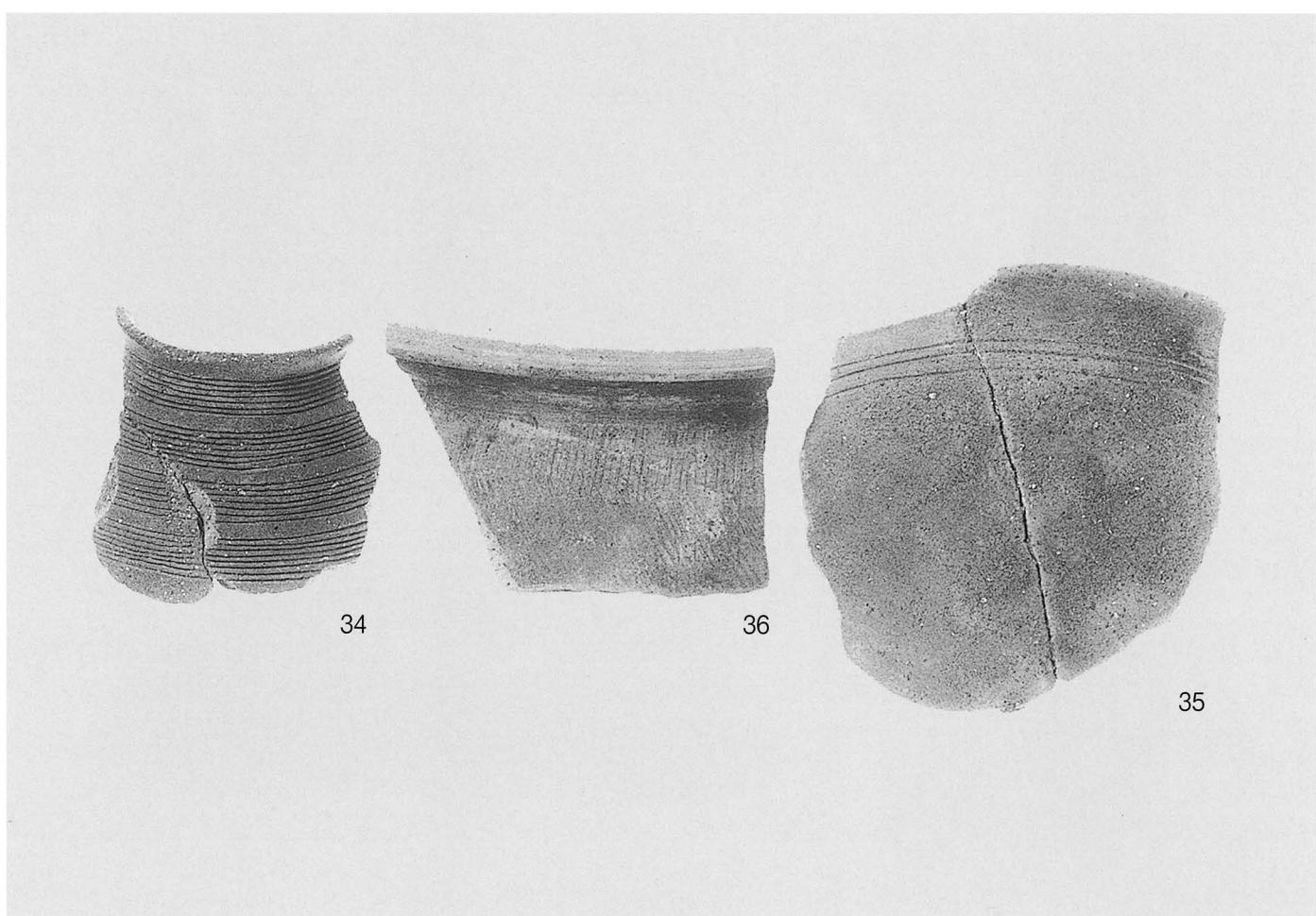
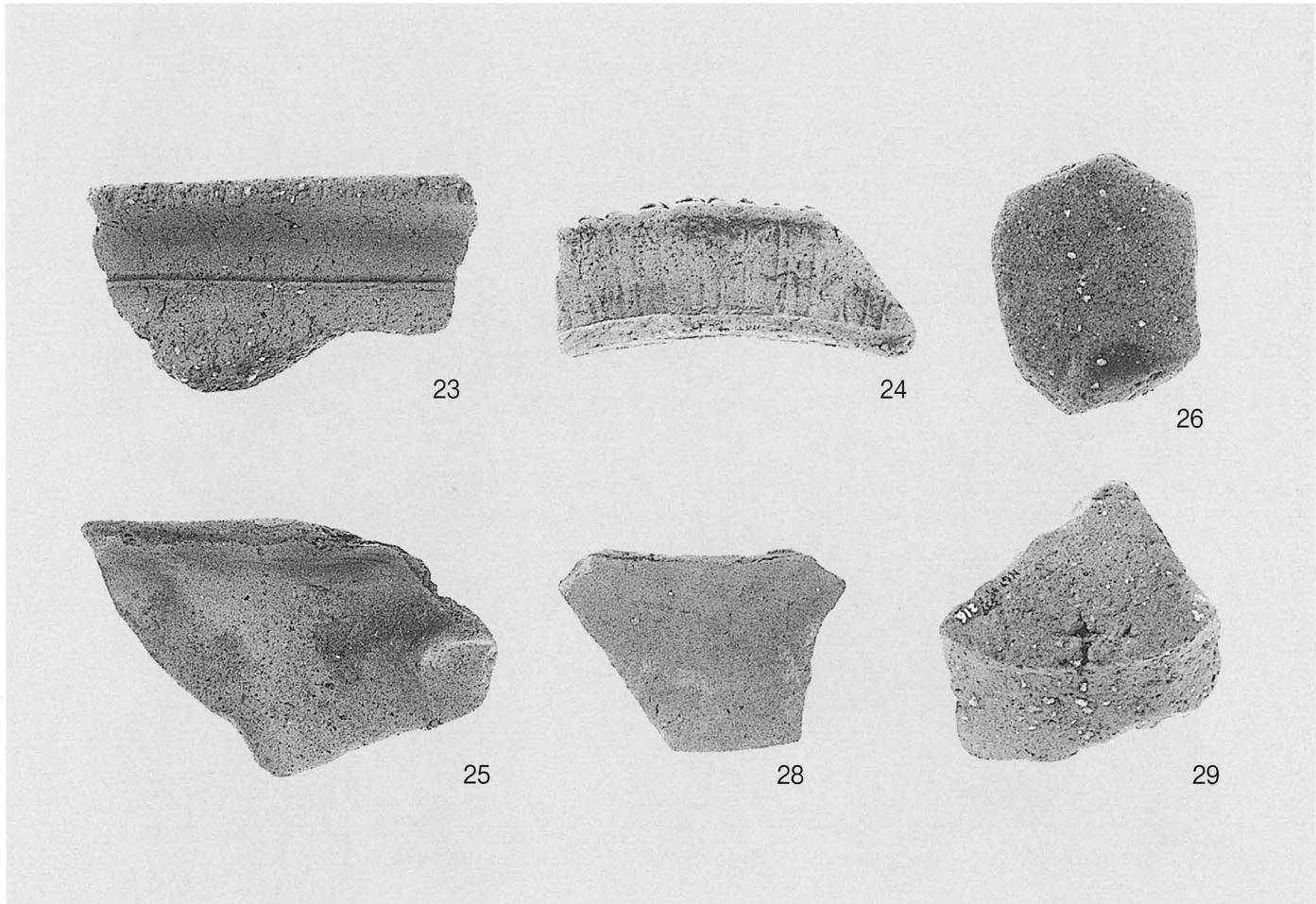
1. 第8遺構面全景（南より）



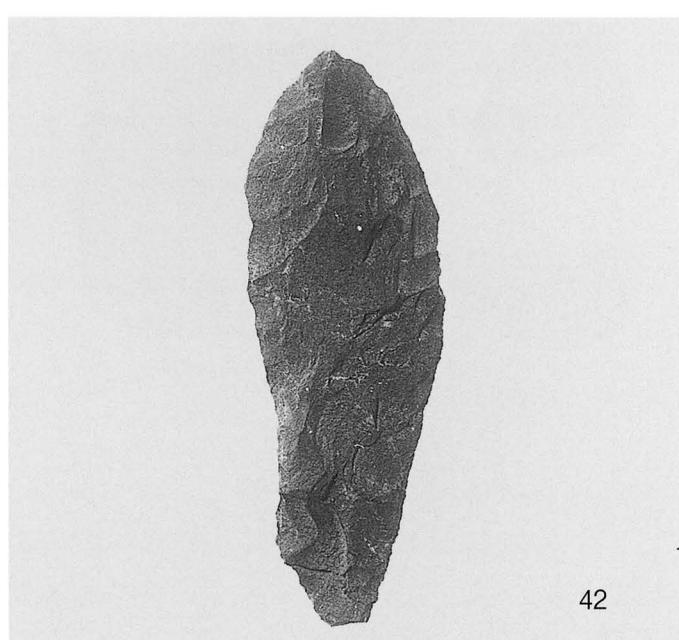
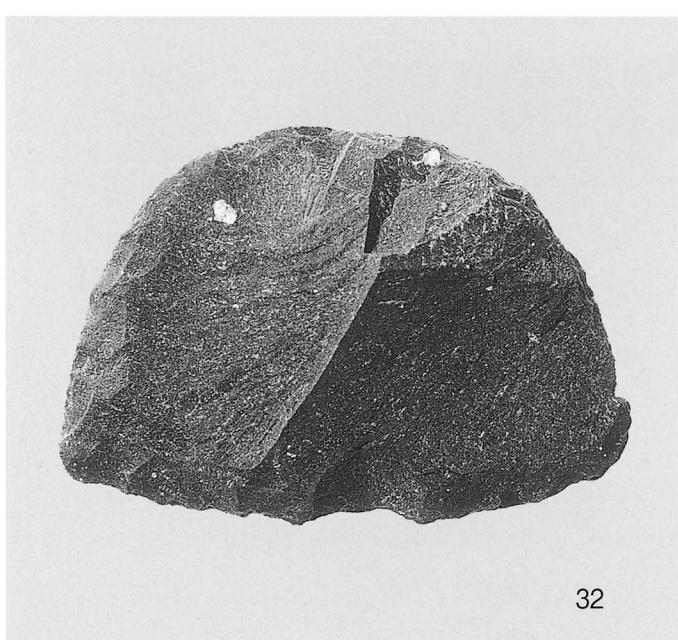
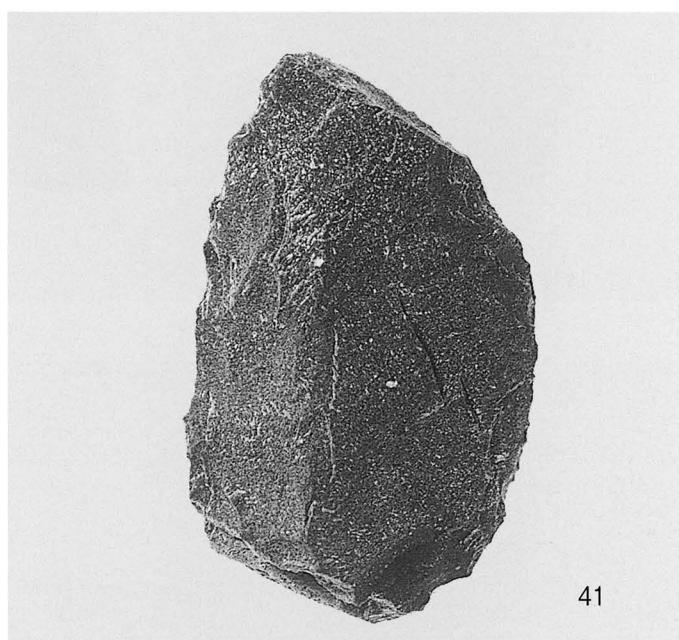
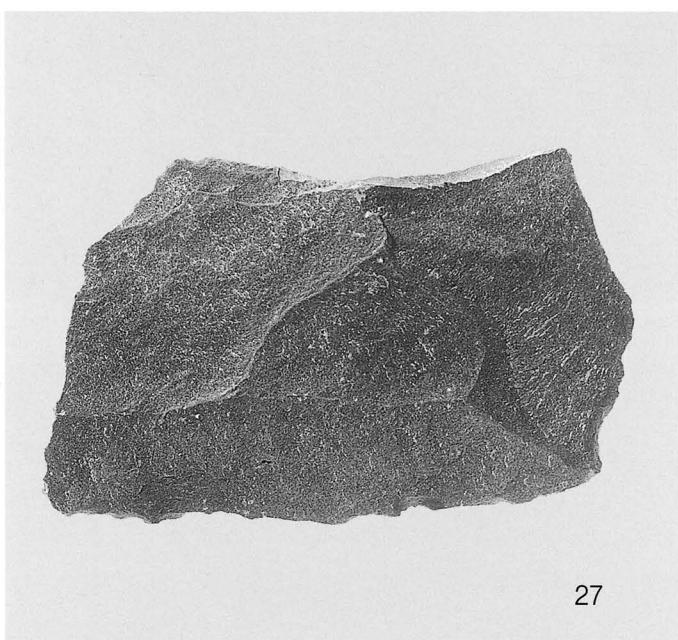
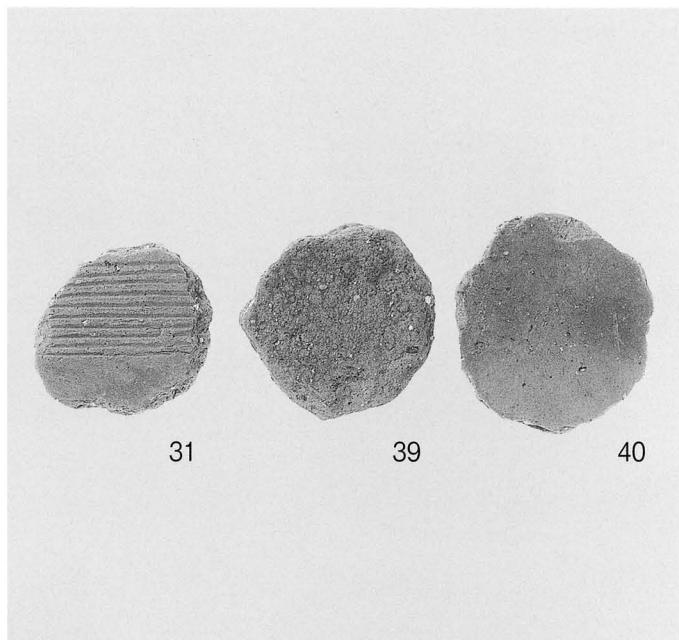
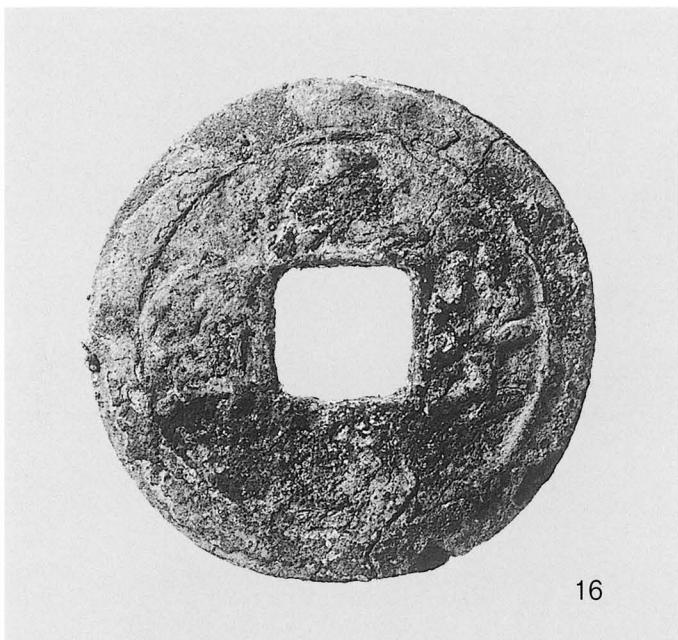
2. SD-801断面（南より）

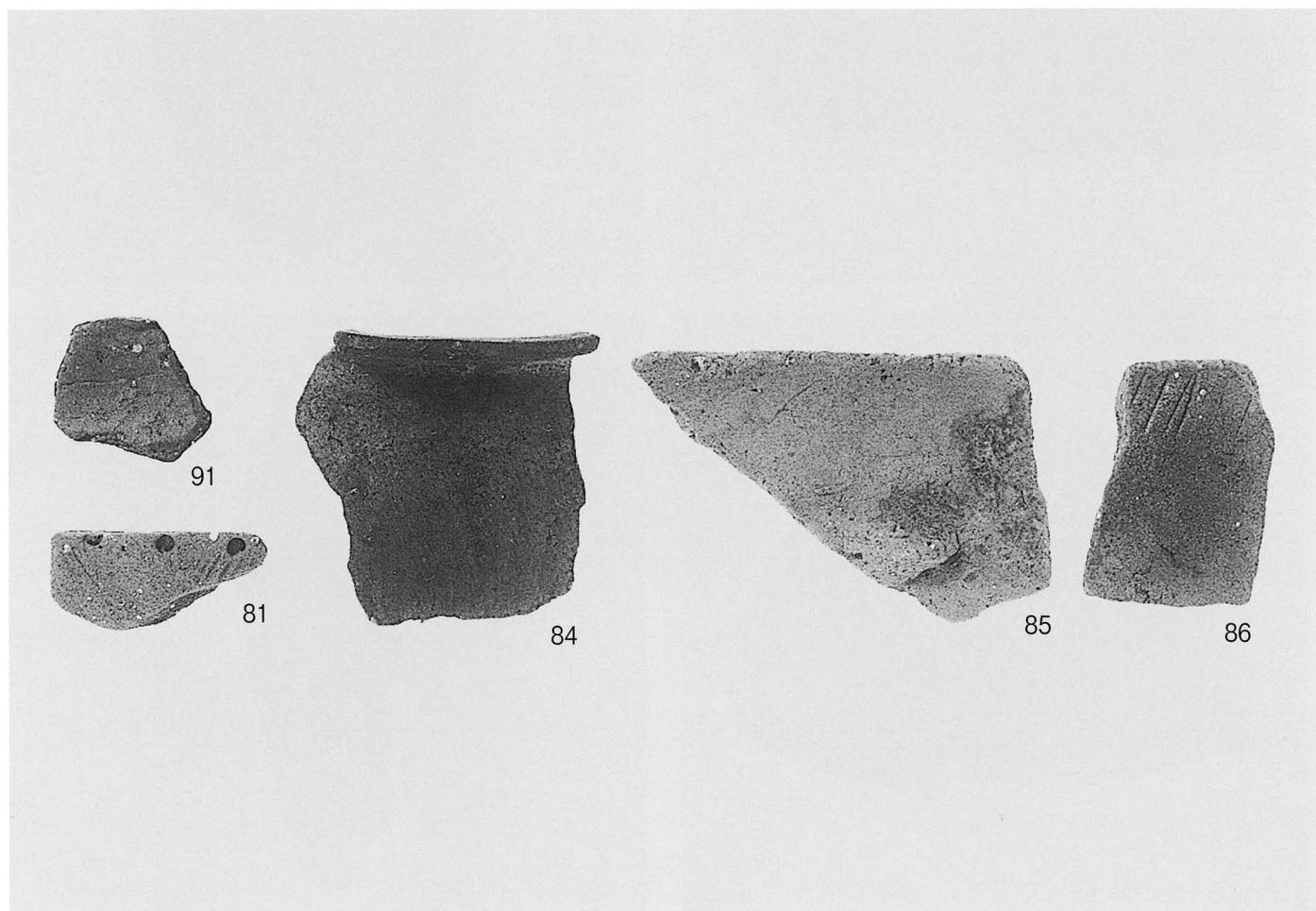
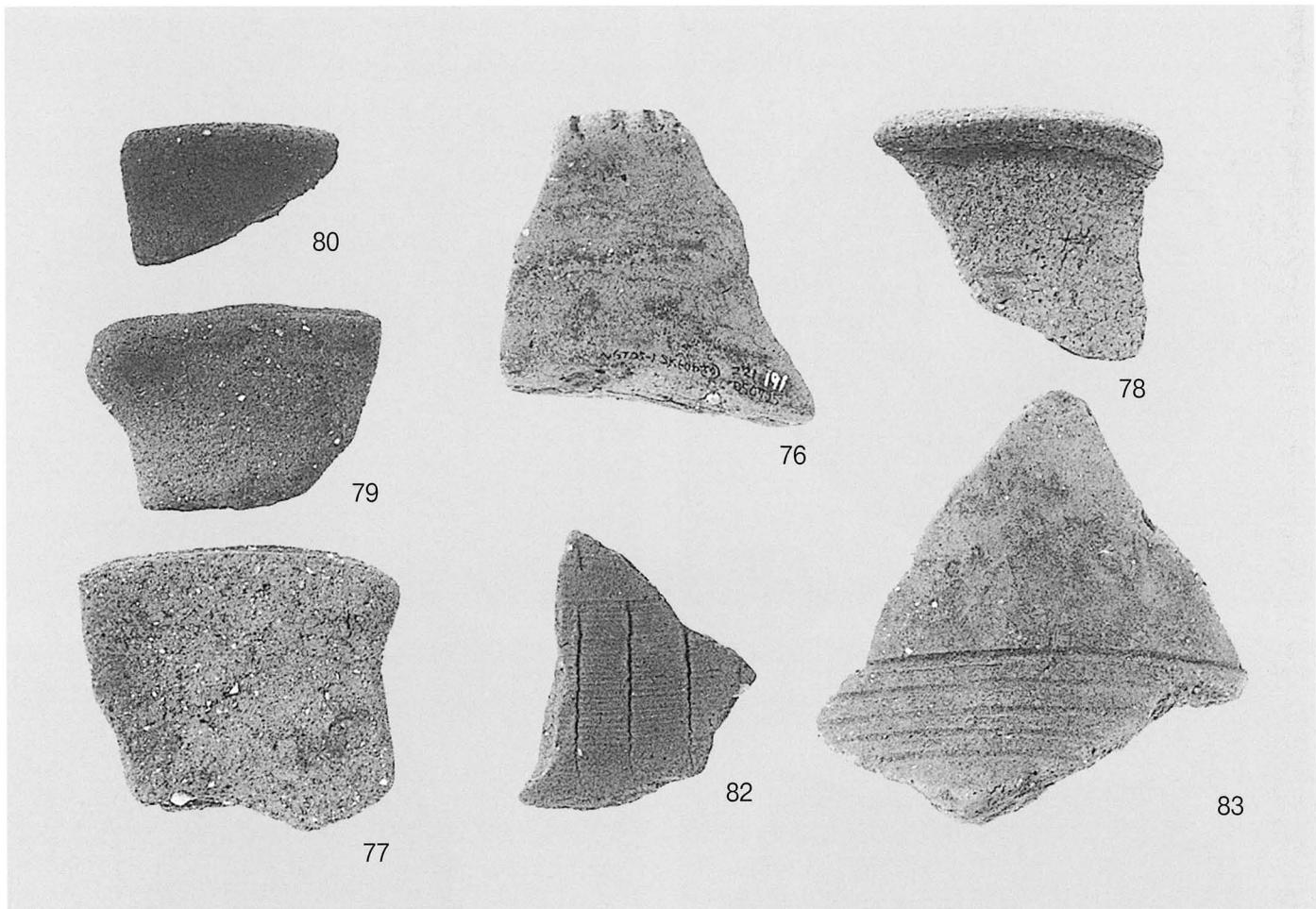
図版 11
出土遺物(1)





図版 13
出土遺物(3)





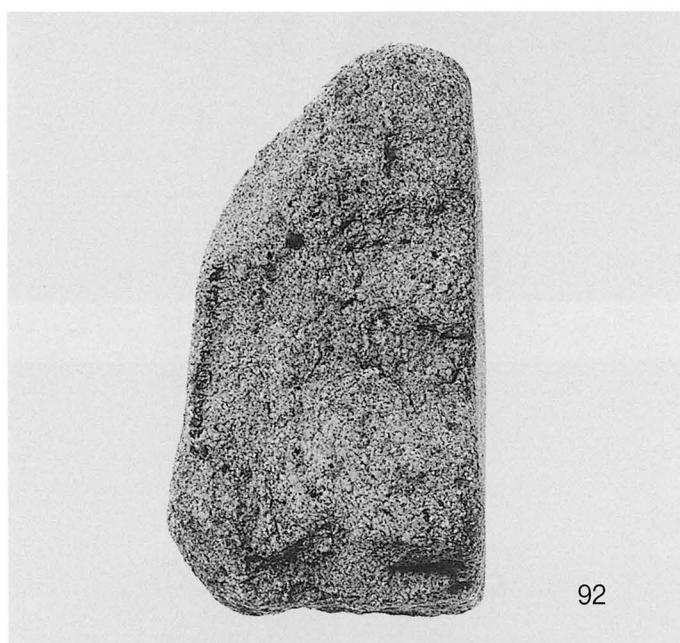
図版 15 出土遺物(5)



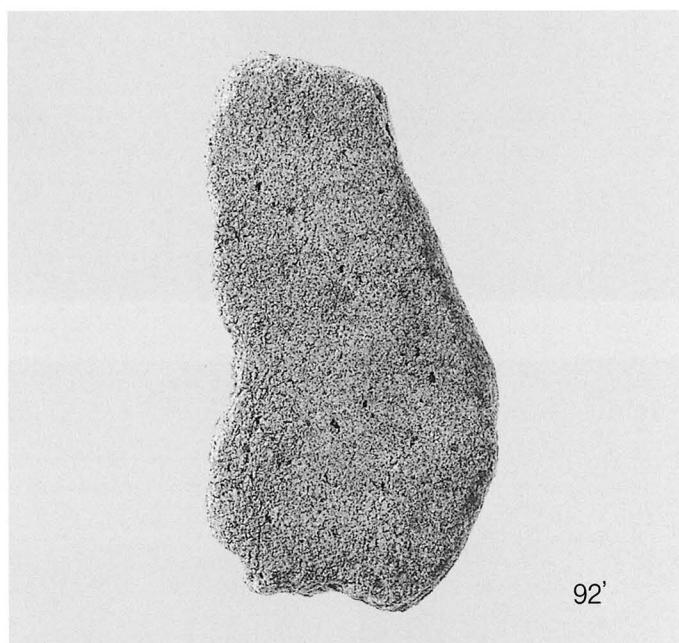
75



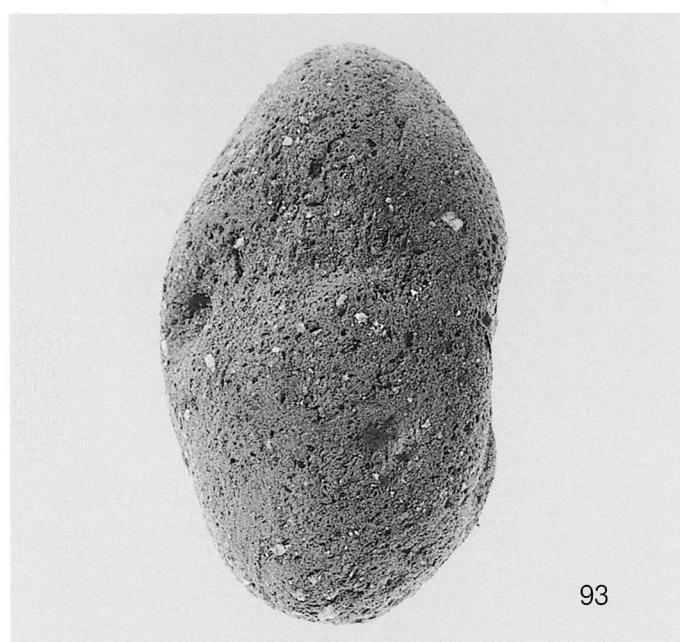
75'



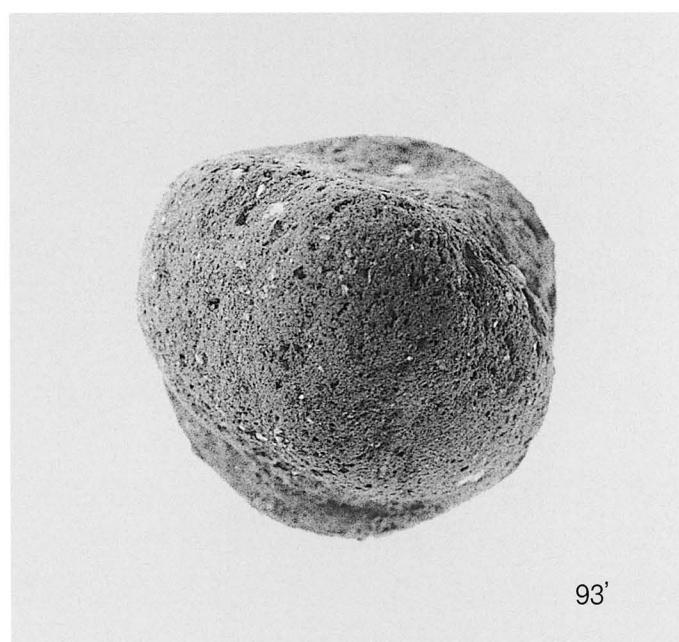
92



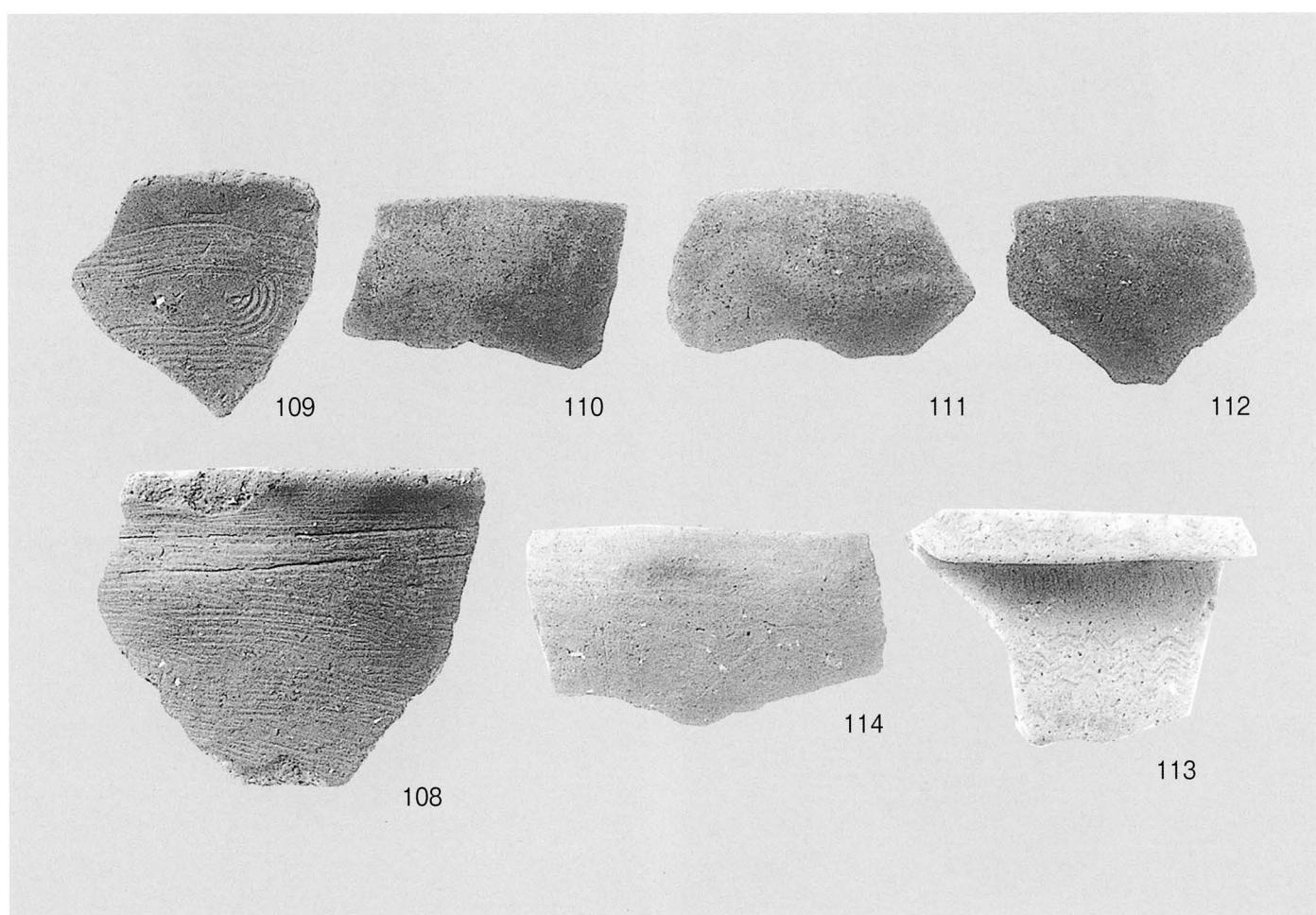
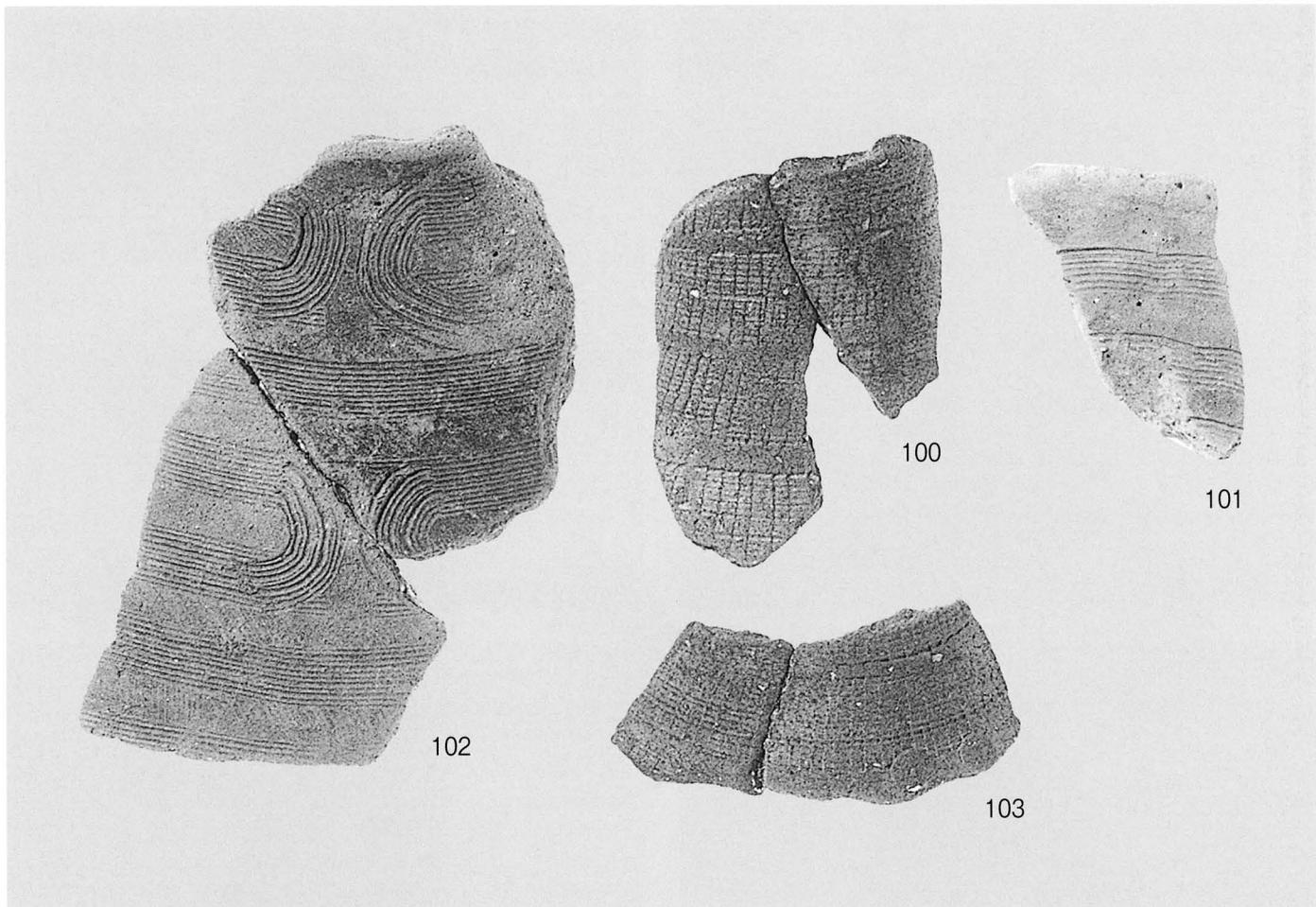
92'



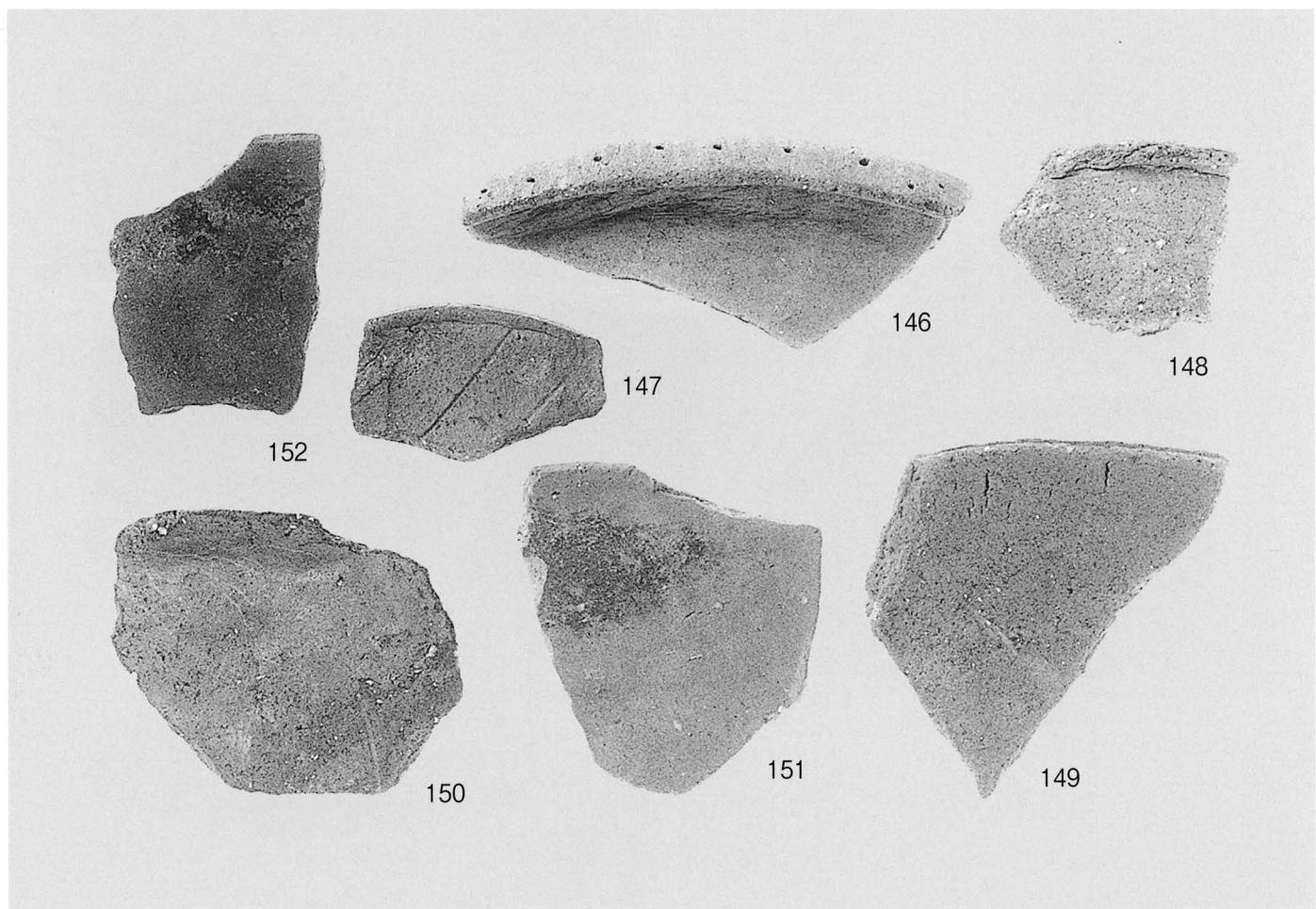
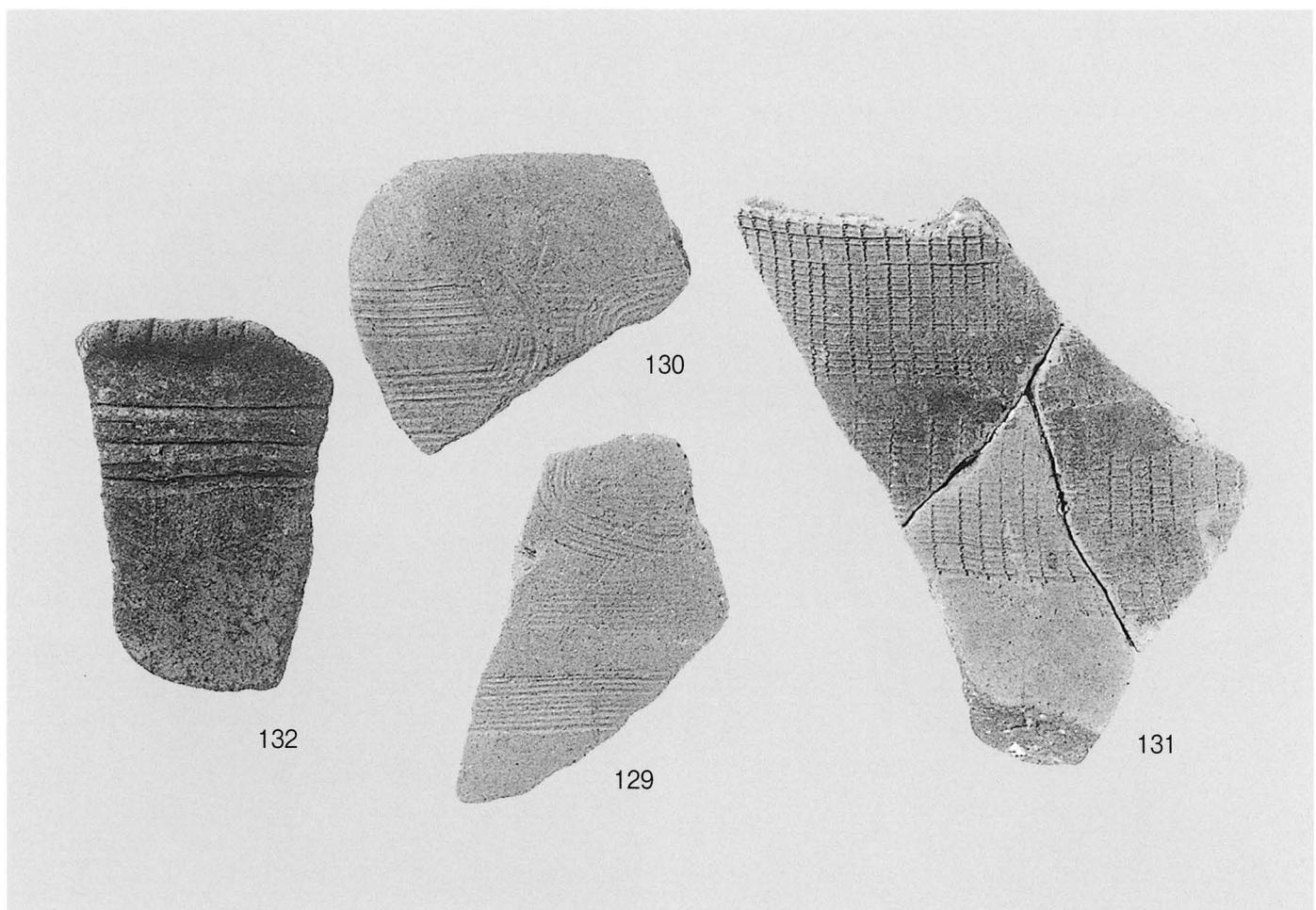
93

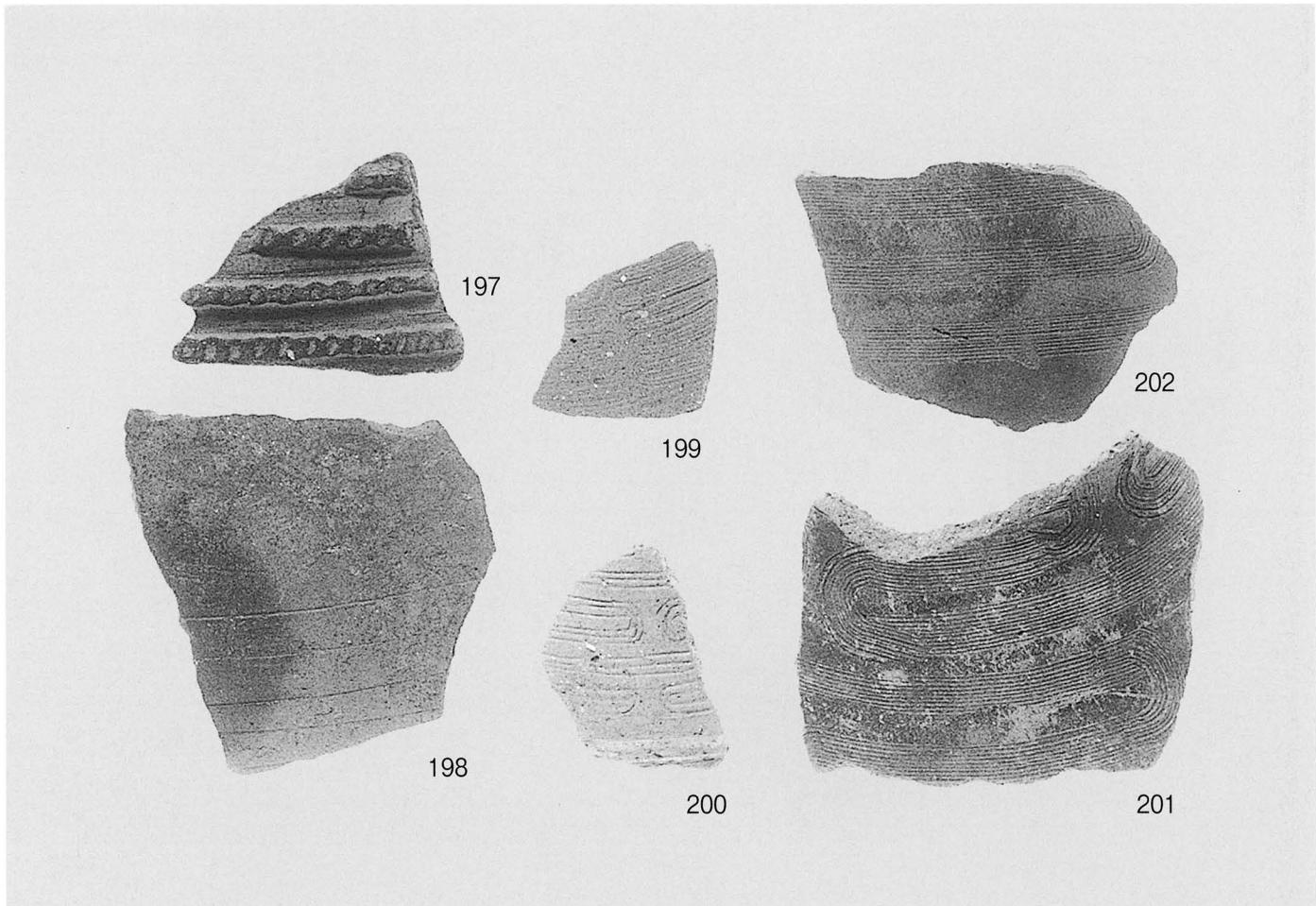


93'

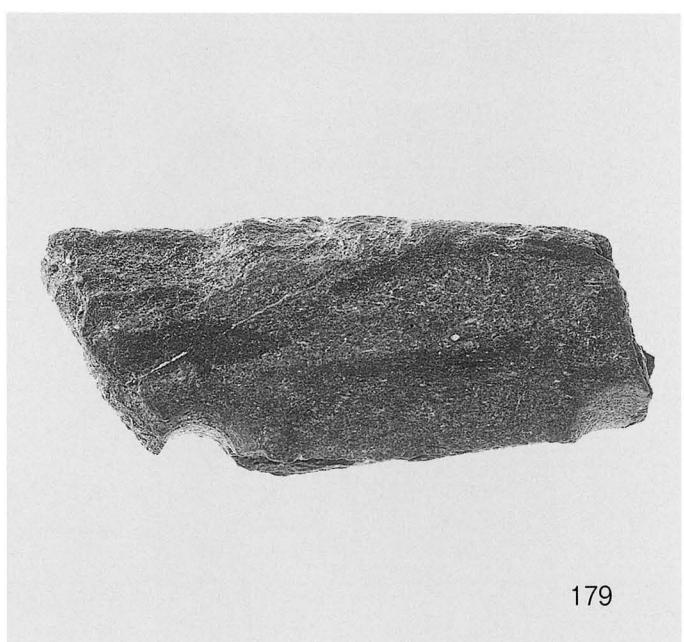
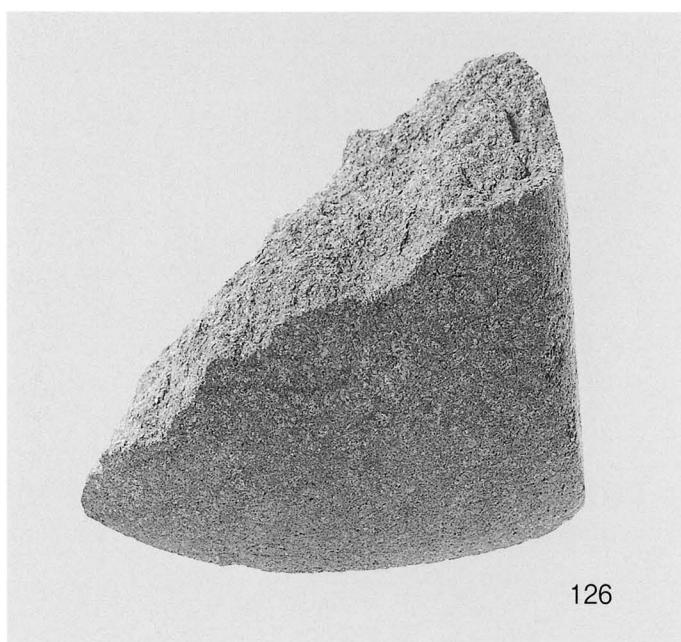
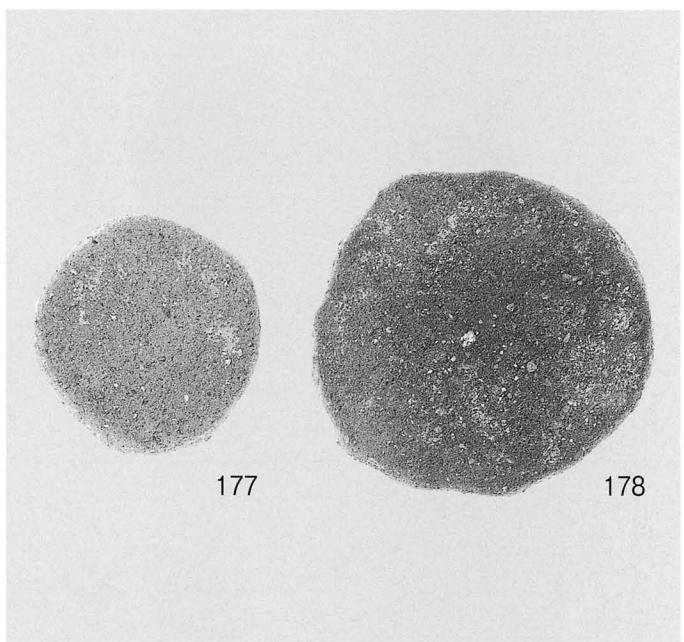
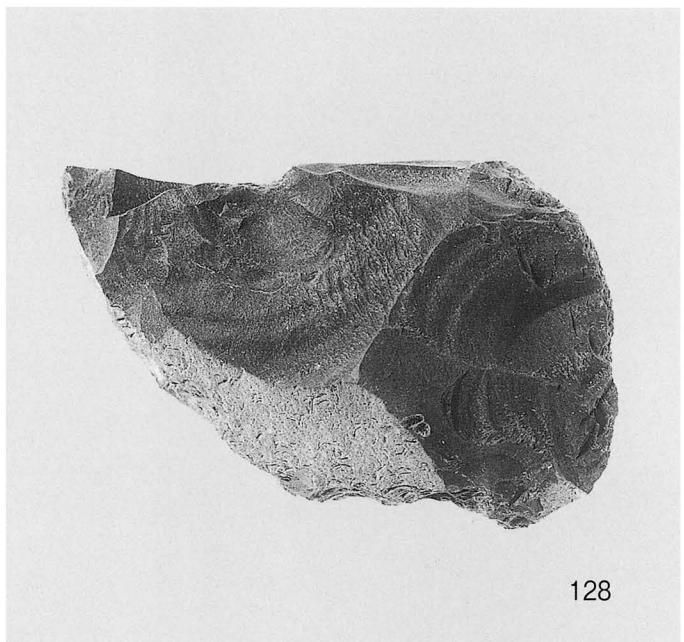
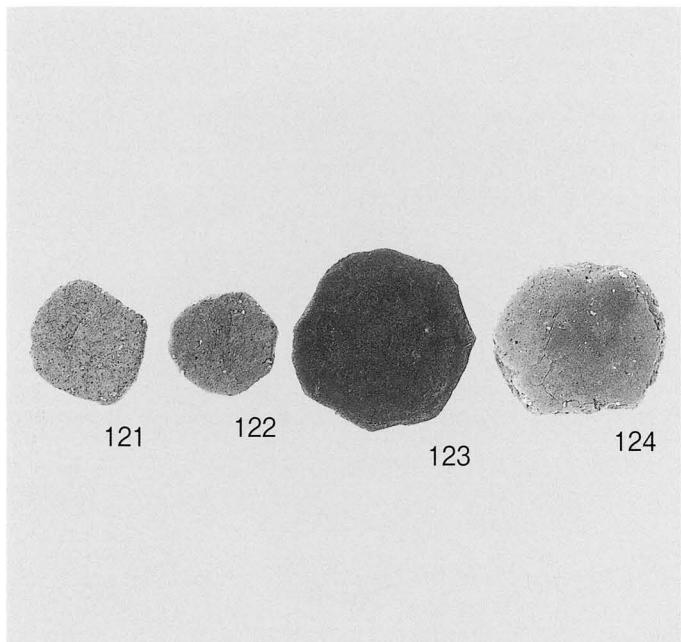


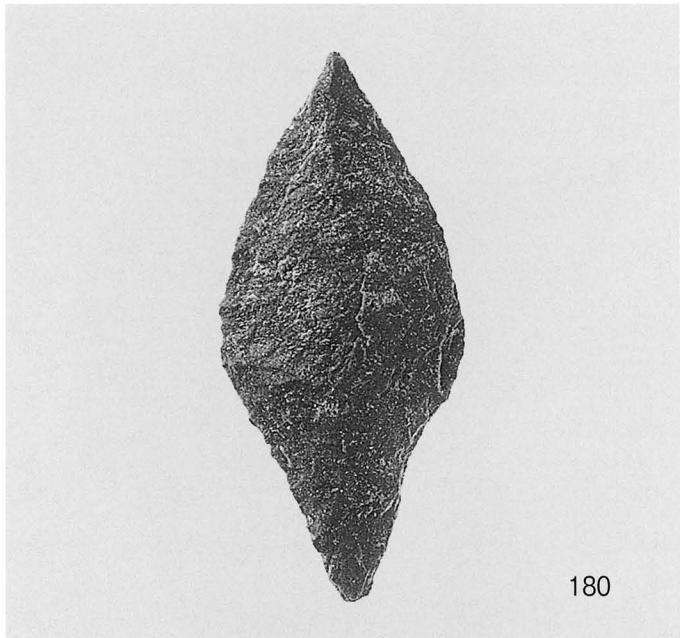
図版 17
出土遺物(7)





図版 19
出土遺物(9)

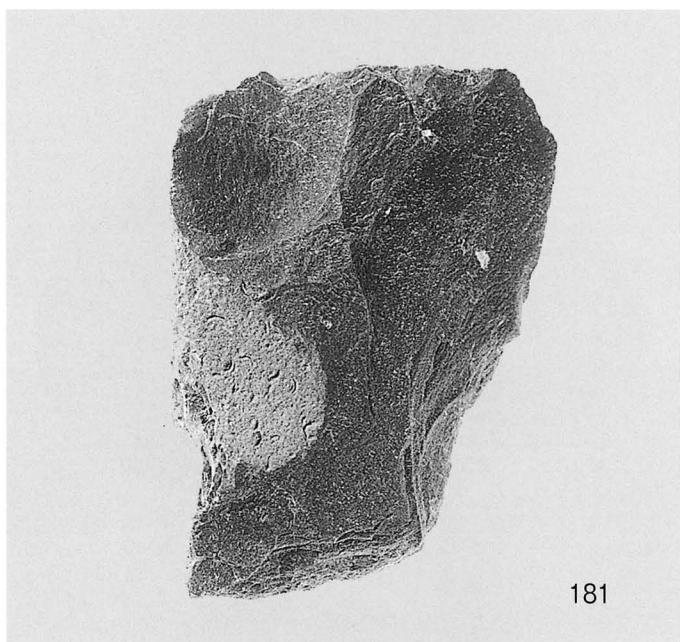




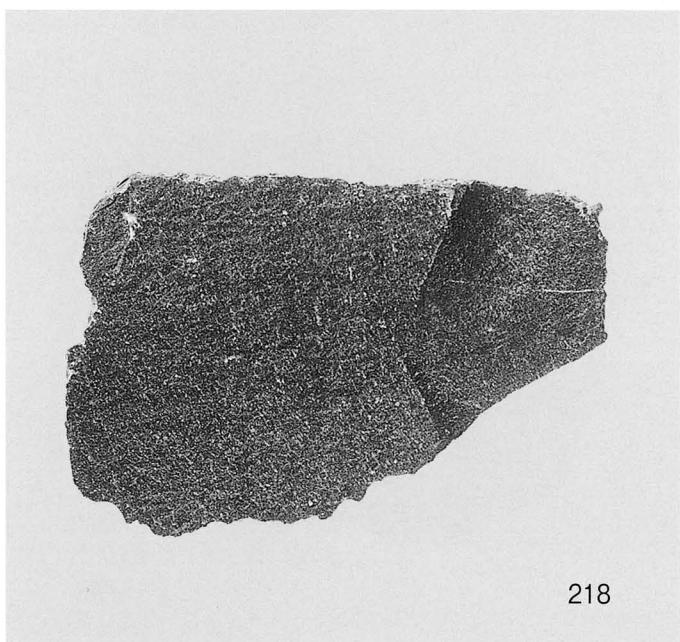
180



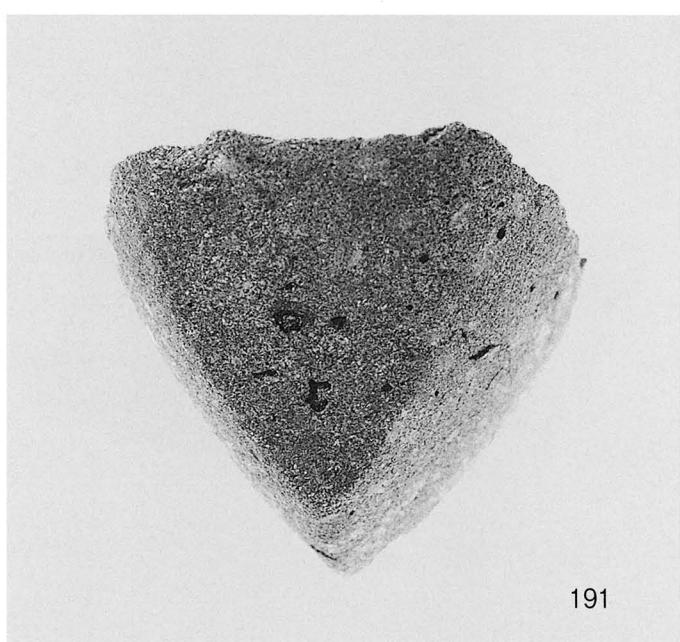
215



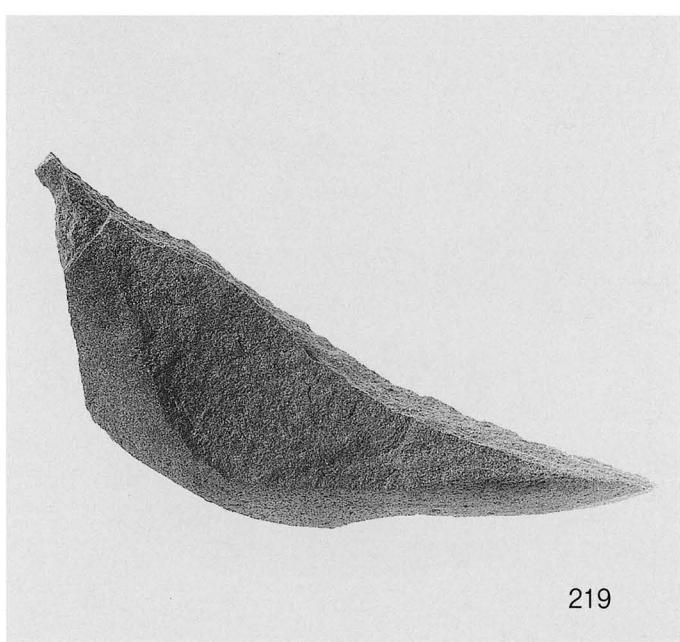
181



218

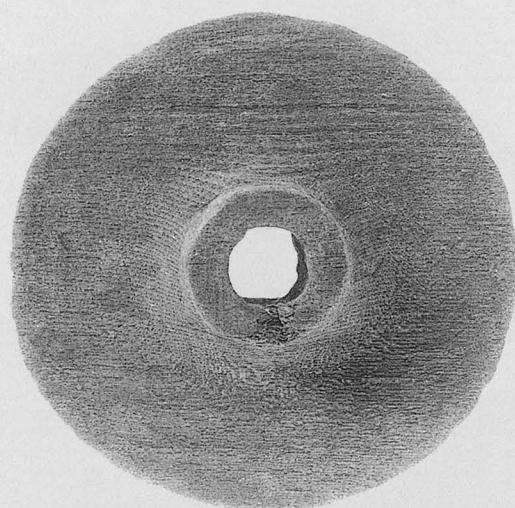


191



219

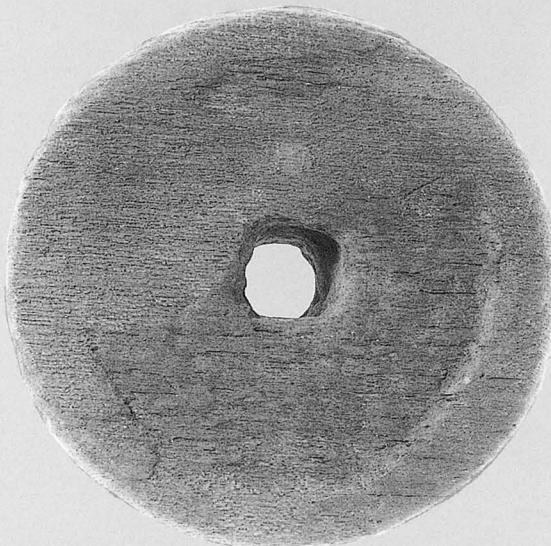
図版21
出土遺物
(11)



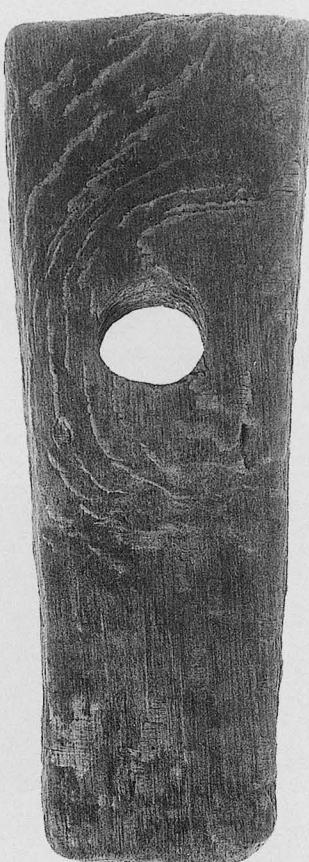
252'



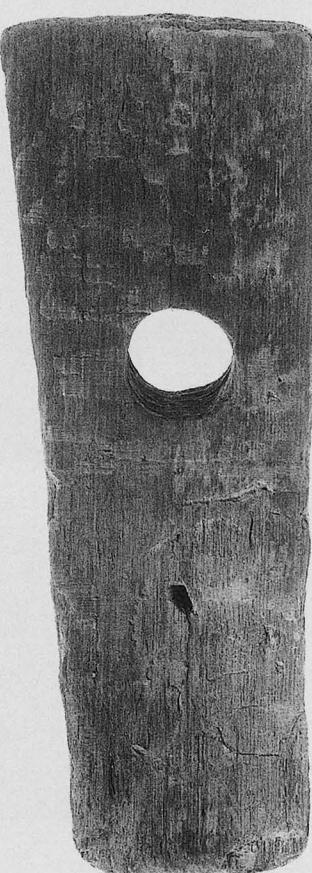
252



252''

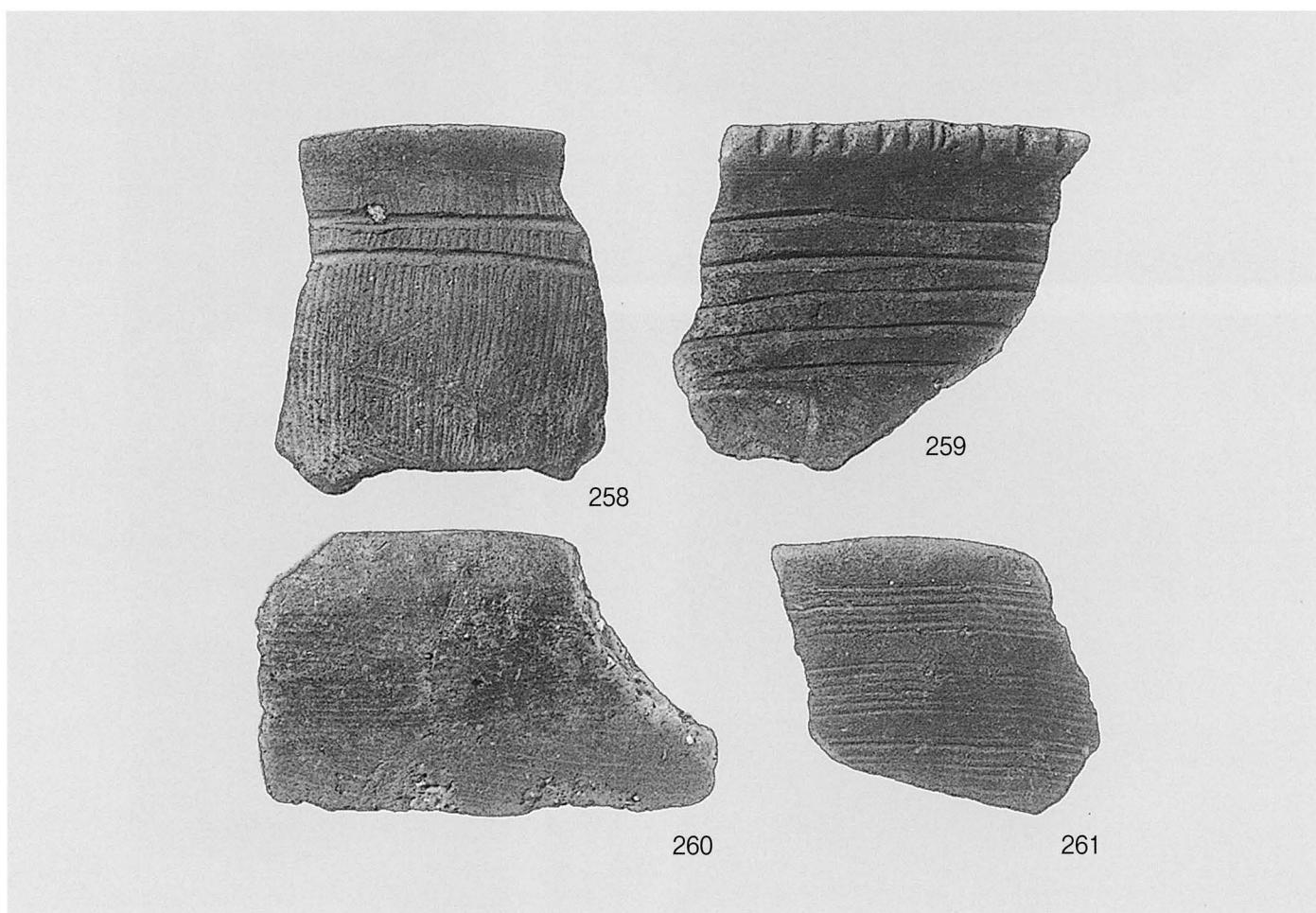
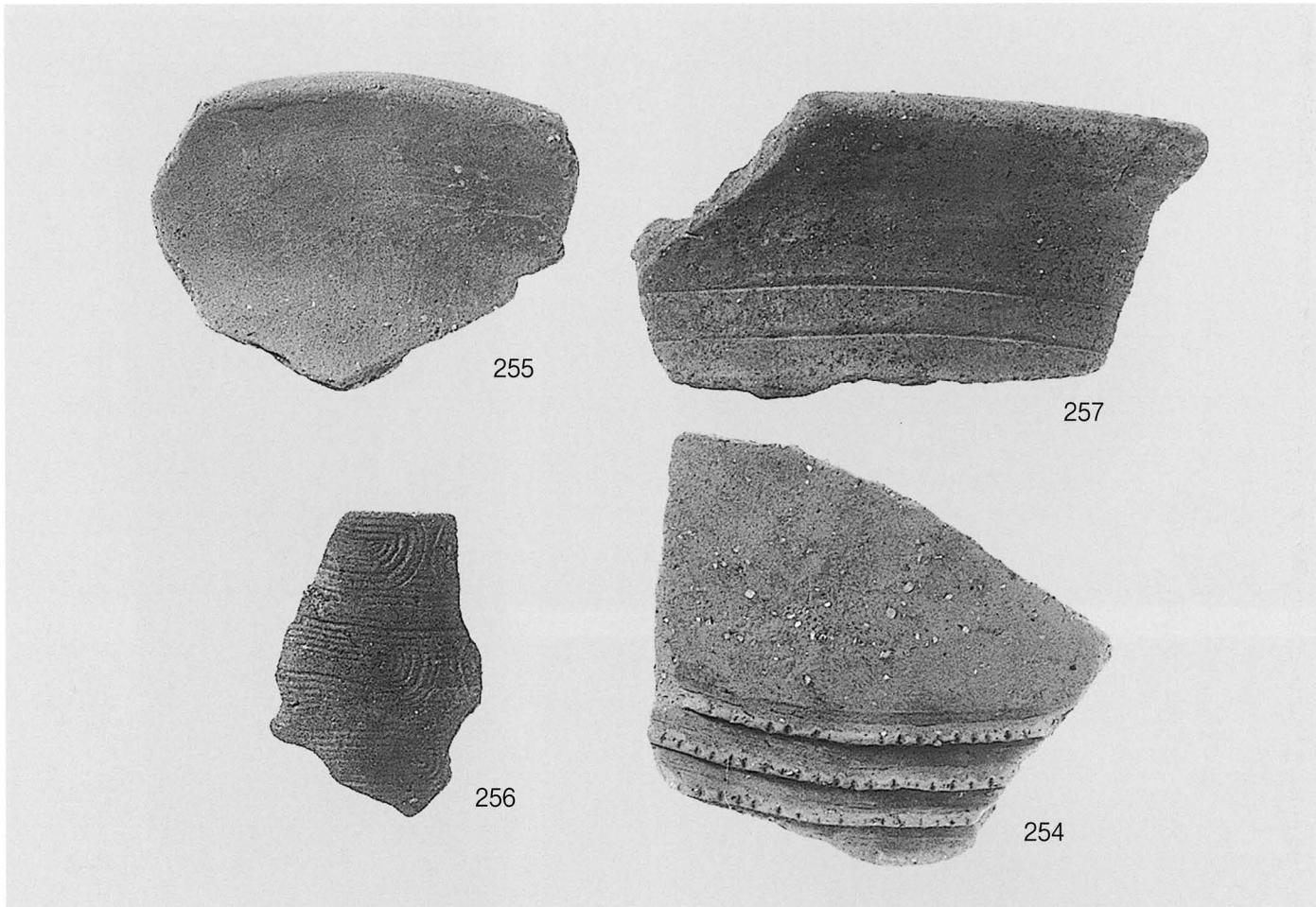


253



253'

図版22
出土遺物(12)



報 告 書 抄 錄

ふりがな	なかがいといせき							
書名	中垣内遺跡							
副書名	大東市公共下水道工事に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	大東市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	中達健一、木沢直子（財団法人元興寺文化財研究所）							
編集機関	大東市教育委員会生涯学習部生涯学習課							
所在地	〒574-0076 大阪府大東市曙町4番6号 TEL 072-870-9105							
発行年月日	平成20年(2008)3月31日							
所収遺跡名	所在	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかがいといせき 中垣内遺跡	おおさかふだいとうし 中垣内	27218	4	34° 42' 9	135° 38' 47"	平成17年7月4日 平成17年8月10日	60m ²	大東市公共 下水道工事
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
なかがいといせき 中垣内遺跡	集落	弥生時代 前～中期	大溝、溝、土坑 ピット	弥生土器、石製品、木製品				
	生産	平安時代以降	鋤溝、土坑、ピット	土師器、須恵器 黒色土器、陶器、瓦器 瓦質土器、錢貨				

印刷物番号
19-64

大東市埋蔵文化財調査報告第29集

中 埣 内 遺 跡

-大東市公共下水道工事に伴う発掘調査報告書-

2008年3月31日発行

編集・発行 大東市教育委員会生涯学習部生涯学習課
〒574-0076 大東市曙町4番6号
TEL.072-870-9105

印刷・製本 株式会社日興商会
〒577-0012 東大阪市長田東4丁目1番10号
TEL.06-6743-0380
